
東京都における犬及び猫の
飼育実態調査の概要
(平成29年度)

東京都福祉保健局

目次	
1. 調査目的	1
2. 調査期間	1
3. 実施項目	1
4. 調査対象地域	1
5. 調査方法及び内容	1
5.1 資料調査	1
5.2 猫の個体生息数の推定を行うための現地調査	1
5.3 犬及び猫の飼育に関するアンケート調査	1
6. 調査結果	2
6.1 資料調査	2
6.2 猫の個体生息数の推定を行うための現地調査	3
6.2.1 調査対象地域・調査ルートの設定	3
6.2.2 現地調査日程	4
6.2.3 現地調査結果	4
6.3 犬及び猫の飼育に関するアンケート調査	4
6.3.1 アンケート回収結果	4
6.3.2 回答者や住居に関する設問	4
6.3.3 犬及び猫飼育者への設問	10
6.3.4 犬飼育者への設問	12
6.3.5 猫飼育者への設問	21
7. 行政への要望の整理	28
8. 解析	29
8.1 犬の個体数推計	29
8.2 猫の個体数推計	30
8.3 犬の飼育について	33
8.3.1 犬の飼育環境について	33
8.3.2 犬の適正飼養について	37
8.4 猫の飼育について	44
8.4.1 猫の飼育環境について	44
8.4.2 猫の適正飼養について	48
8.5 犬及び猫に関する評価について	53
8.5.1 犬及び猫に対する嗜好性の推移	53
8.5.2 飼い主のいない猫に関する評価について	54
8.6 犬猫の終生飼養について	55
8.6.1 年代別のペット飼育理由	55
8.6.2 60代以上の世帯の飼育犬猫の年齢	56
8.6.3 年代別の安楽殺に対する意識	57
8.7 犬猫の譲渡について	58

8.7.1 飼育ペット種類と犬猫譲渡の認識.....	58
8.7.2 犬猫譲渡の取り組みの認識状況と犬入手方法の関係	59
8.8 犬及び猫の災害対策について.....	60
8.8.1 年代別の同行避難の認識	60

1. 調査目的

平成 23 年度に都が実施した犬及び猫の飼育実態調査では、同年度における都内の犬の飼育頭数は 50 万頭以上、猫の飼育頭数は 100 万頭以上と推計されており、また、内閣府の調査によれば、家庭で犬や猫などのペットを飼育している人の割合は全体の約 3 分の 1 に上り、ペットブームともいえる状況にある。同時に、飼い主のマナーの欠如による近隣住民への迷惑行為や咬傷事故、不衛生な環境での多頭飼育、飼い主のいない猫を巡るトラブルなどの苦情も多く寄せられている。

都は、「都民ファーストでつくる『新しい東京』～2020 年に向けた実行プラン～」において、人と動物との調和のとれた共生社会の実現を目指し、動物の殺処分ゼロに向け、適正飼養・終生飼養に関する普及啓発や、新しい飼い主に飼養を引き継ぐ譲渡の推進を重点的に取り組んでいくこととしている。

このたび平成 23 年度の調査から 6 年を経て、動物飼養をめぐる最近の状況等を踏まえ、これらの動物愛護管理施策に取り組むため、また、東京都動物愛護管理推進計画中間見直しに向けて、都における犬及び猫の飼育頭数の実態及びペット飼育に関する都民意識等の調査を実施し、基礎資料となる報告書を作成することを目的に調査を実施した。

2. 調査期間

平成 29 年 9 月 1 日 ～ 平成 30 年 3 月 16 日

3. 実施項目

- 1 資料調査
- 2 猫の個体生息数の推定を行うための現地調査
- 3 犬及び猫の飼育に関するアンケート調査

4. 調査対象地域

アンケート調査及び現地調査を実施する対象地域は、東京都（島しょを除く）の都市計画区域とした。

5. 調査方法及び内容

5.1 資料調査

東京都統計「平成 24 年度～平成 28 年度狂犬病予防・動物愛護管理関係報告」を整理した。

5.2 猫の個体生息数の推定を行うための現地調査

東京都（島しょ部を除く）の都市計画区域を対象に、GIS（地理情報システム）を用いて 1km メッシュを発生させ、その中から任意のメッシュ 30 箇所を無作為抽出し現地調査対象地域を設定した。各メッシュの中心点をスタート地点として、公道に沿った現地調査ルート（5km 程度）を設定した。

ルートセンサス法により、各現地調査ルート上をゆっくり歩き、ルートの片側 5m、両側で 10 m の可視範囲に確認した猫について、頭数、確認時間、首輪の有無、耳カットの有無、子猫・成猫の区別、確認時の行動、個体の特徴を記録した。調査時間帯は日中（概ね 9 時～16 時）として実施した。

5.3 犬及び猫の飼育に関するアンケート調査

配付対象全員への設問（年齢、家族構成、住居形態等の回答者の属性、犬及び猫の嗜好性等）、犬飼育者及び猫飼育者への設問（飼育頭数、飼育場所、身元表示等）の検討を行い、アンケート調査票を設計した。配布数は有効回収率 30%を目標とし、各調査対象地域につき 200 戸×30 地区=6,000 通とした。

猫の定義について

I.屋内猫： 完全に屋内飼育されている猫

II.屋外猫： ①飼い主のいない猫：野外で生活している猫であり、餌や住処は人間に依存しているが、特定の飼い主により飼育されてはいない猫（いわゆる野良猫）。

②屋外飼育猫：特定の飼い主に飼育されているが、屋内外を自由に入り出来るなど、放し飼いにされている猫。

※「飼育猫」とは、I.屋内猫、II②屋外飼育猫 を指す。首輪をつけている猫と付けていない猫がいる。アンケート調査で飼育猫頭数を推定できる

6. 調査結果

6.1 資料調査

東京都の「平成 24 年度～平成 28 年度狂犬病予防・動物愛護管理関係報告」資料及び東京都 HP に公開の統計数値を用いて、統計データの推移を整理した。以下に、結果の概要をまとめた。

- ・ 犬の登録頭数、平成 28 年度に約 52 万頭の犬が登録されている。毎年増加傾向にあるが、増加数は緩やかになってきている。区部では毎年増加しているものの、市町村部では減少している。
- ・ 都全体では、平成 28 年度に約 73.2%の予防接種率となっている。昭和 60 年度から平成 7 年度の都全体の接種率は 96%以上であったが、平成 8 年度から徐々に減少して、平成 12 年度以降、横ばいとなっている。接種率は、市町村部の方が区部より高い傾向にある。
- ・ 犬捕獲収容数は、都全体で平成 28 年度に 76 頭が捕獲収容されている。平成 24 年度から平成 25 年度に増加したものの、その後は半減している。区部、市町村部別にみても、平成 24 年度から平成 25 年度で増加しているが、その後は減少あるいは横ばいであり、特に市町村部で大きく減少している。
- ・ 犬の引取総数は、都全体では、平成 28 年度に 336 頭が引き取られている。毎年減少しており、平成 24 年度の 726 頭から半減している。特に、区部では、平成 24 年度の 335 頭から平成 28 年度は 102 頭になり、約 70%減少した。
- ・ 猫の引取総数は、都全体では、平成 28 年度に 522 頭が引き取られている。毎年減少しており、平成 24 年度の 2,140 頭から 76%減少した。特に、市町村部は、平成 24 年度の 827 頭から平成 28 年度は 187 頭になり、約 77%減少した。
- ・ 犬及び猫ともに、飼い主からの引取りより拾得者からの引取りの方が圧倒的に多い。引取りの半数以上は、拾得者からの成犬及び子猫で占められている。
- ・ 都全体の負傷動物収容数は、平成 28 年度は 427 頭の負傷動物が収容されている。平成 24 年度から平成 25 年度に減少し、それ以降は概ね減少傾向にある。市町村部より区部の方が高い傾向にある。
- ・ 犬及び猫の処分総数・内訳（返還／譲渡／致死処分）ともに減少傾向にあり、処分のうち、致死処分の頭数が最も多いが、平成 24 年度から平成 28 年度で約 75%減少している。処分動物の種類は、返還は犬が大半、譲渡は犬 4 割猫 6 割、致死処分は猫が大半となっている。
- ・ 犬及び猫に関する苦情は、都全体では、平成 28 年度は 9,856 件の苦情が寄せられている。苦情総数は、毎年 10,000 件程度であり、概ね横ばいに推移している。市町村部より区部の方が高い傾向にあり、区部での苦情が全体の約 75%を占めている。苦情動物の種類は、犬 4 割猫 5 割であり、犬への苦情は 4,000 件程度、猫への苦情は 5,000～6,000 件程度と、概ね横ばいである。苦情内訳は、区部、市町村部で差はないが、区部での猫への苦情が最も多かった。

6.2 猫の個体生息数の推定を行うための現地調査

6.2.1 調査対象地域・調査ルートの設定

図 6.2-1 に示す 30 の現地調査ルートが無作為に設定した。

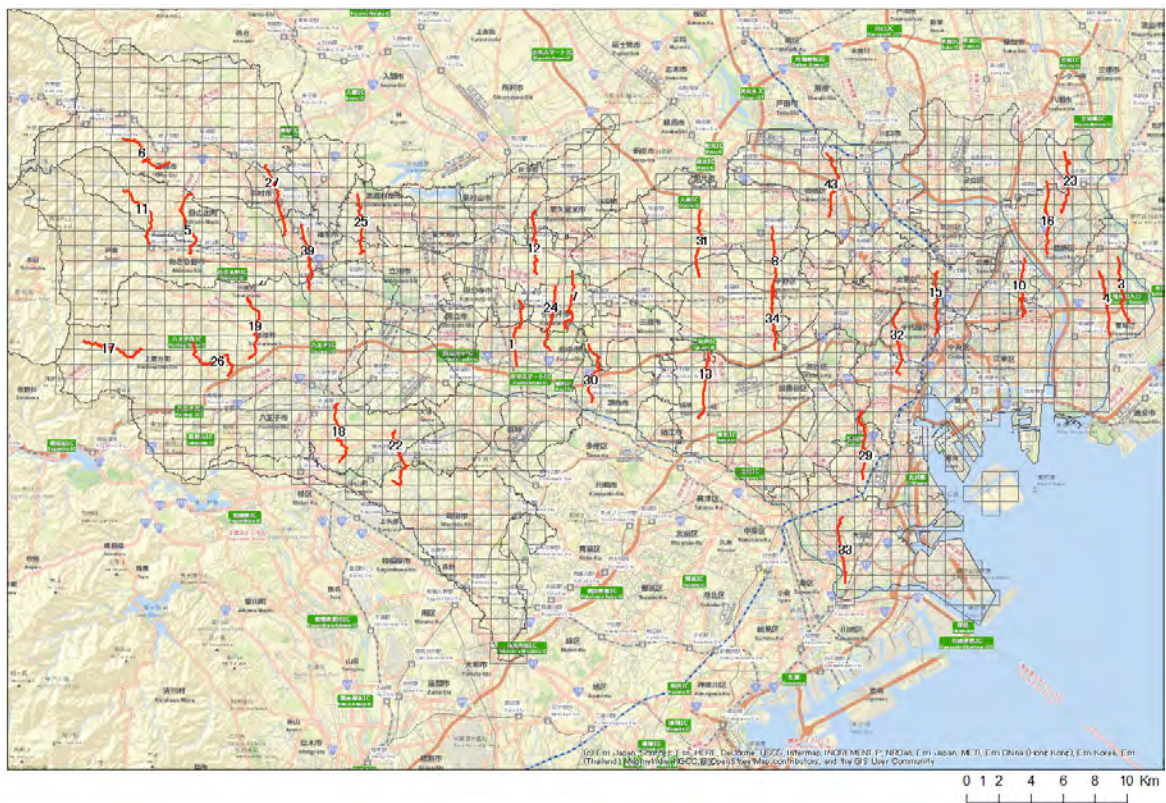


図 6.2-1 調査対象地域の無作為抽出結果

6.2.2 現地調査日程

現地調査は、平成 29 年 11 月 22 日、27 日～29 日に行った。

6.2.3 現地調査結果

調査の結果、計 130 頭の屋外猫を確認した（表 6.2.1）。調査ではルート側の片側 5m、両側で 10m の調査範囲内で確認した個体のほか、調査中に確認した調査範囲外の猫についても記録を行ったため、後者は全データとして調査範囲内のデータと合わせた数値を記載した。

表 6.2.1 屋外猫の現地調査結果

ルートNo.	全データ							調査範囲内
	データ数	首輪			耳カット・ヒース等			データ数
		有	無	不明	有	無	不明	
合計	130	22	98	10	48	67	15	55

6.3 犬及び猫の飼育に関するアンケート調査

6.3.1 アンケート回収結果

アンケート調査 6,025 通を配付し、計 1,867 通の回答を回収した。調査結果のとりまとめは計 1,867 通を用いて集計を行った。有効回収率は 30.9%であった。

表 6.3.1 集計母数

	アンケート回収率	有効アンケート数	犬		猫	
			飼育頭数	飼育軒数	飼育頭数	飼育軒数
平成29年度	30.9%	1,867通	424頭	336軒	365頭	214軒

6.3.2 回答者や住居に関する設問

- ・ 回答者の 25.9%が 70 代以上であり、次いで 24.9%が 60 代であった。
- ・ 回答者の世帯構成は「二世帯世帯」が最も多く 44.0%であった。一方で、「単独世帯(一人暮らし)」または「夫婦のみ世帯」といった同居する子供のいない世帯が全体の 48.3%と約半数であった。
- ・ 犬の飼育世帯率は 18.0%、猫の飼育世帯率は 11.5%であった。犬猫以外の動物を飼育している世帯の割合は 17.0%であり、その内訳は魚が最も多く全体の 10.8%を占めた。
- ・ ペット飼育理由は、「潤いや安らぎを与えてくれるから」が 27.5%を占め、次いで「動物が好きだから」が 19.4%であった。
- ・ 犬に対するアレルギーのある家族がいるという回答は 8.0%、猫に対するアレルギーのある家族がいるという回答は 16.7%であった。
- ・ 回答者の住居形態は「持ち家（一戸建て）」が圧倒的に多く、75.7%を占めた。「賃貸（一戸建て）」を合わせると回答者全体の 77.5%が一戸建てであった。集合住宅の比率は、持ち家と賃貸を合わせて 21.2%であった。
- ・ 集合住宅に居住している回答者のうち犬猫飼育が「許可されている」と回答したのは 38.5%であり、「許可されていない」と回答したのは 49.1%であった。また、飼育許可がされているかわからないとした回答は 10.4%であった。
- ・ 犬が「好き」という回答が回答者全体の 67.3%を占めた。一方で、「嫌い」という回答は 5.4%であり、「どちらでもない」という回答は 26.4%であった。
- ・ 猫が「好き」という回答は 48.2%を占めたが、「嫌い」という回答は 17.2%、「どちらでもない」という回答は 33.2%であった。

(1) 飼い主のいない猫の評価

飼い主のいない猫を「かわいそうだと思う」(39.4%)、「問題だと思う」(35.6%)という回答が多く、飼い主のいない猫に対して何らかの問題意識を持つ回答が上位となった。次いで、「かわいいと思う」(26.4%)、「近づきたくない」(18.3%)、「心が和む」(13.6%)といった飼い主のいない猫に対する感情に関する回答が続いた。

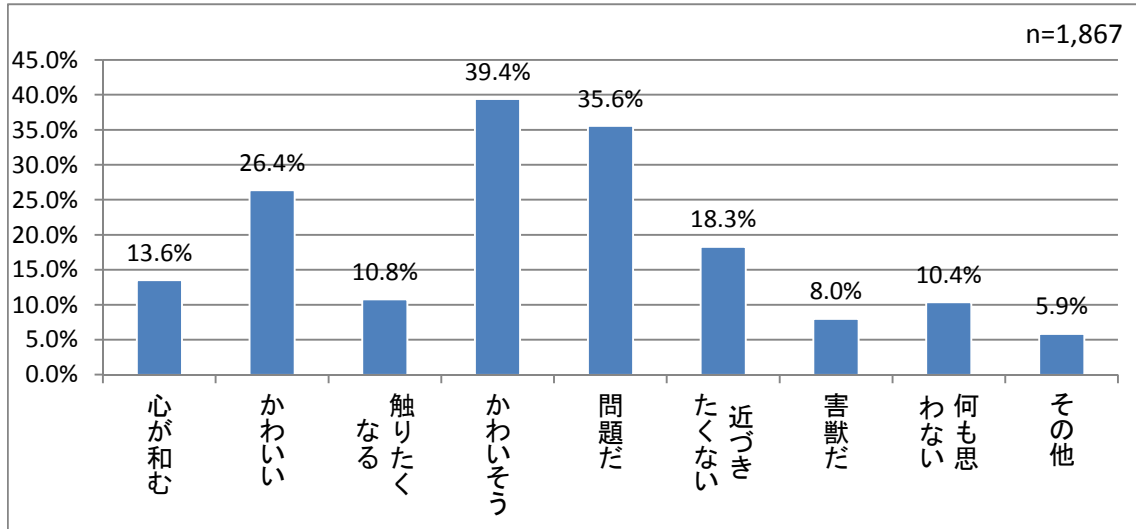


図 6.3-1 飼い主のいない猫に対する評価の回答者割合（複数回答可）

(2) 飼い主のいない猫への餌やりを目にした経験

飼い主のいない猫への餌やりを「ほとんど見ない」「見たことがない」は合わせて 55.2%であり、半数を上回った。これに対し「よく見かける」は 13.8%であり、「時々見かける」と合わせても 44.0%であった。

飼い主のいない猫への餌やりを「目にしたことがない」という回答が過半数であった。

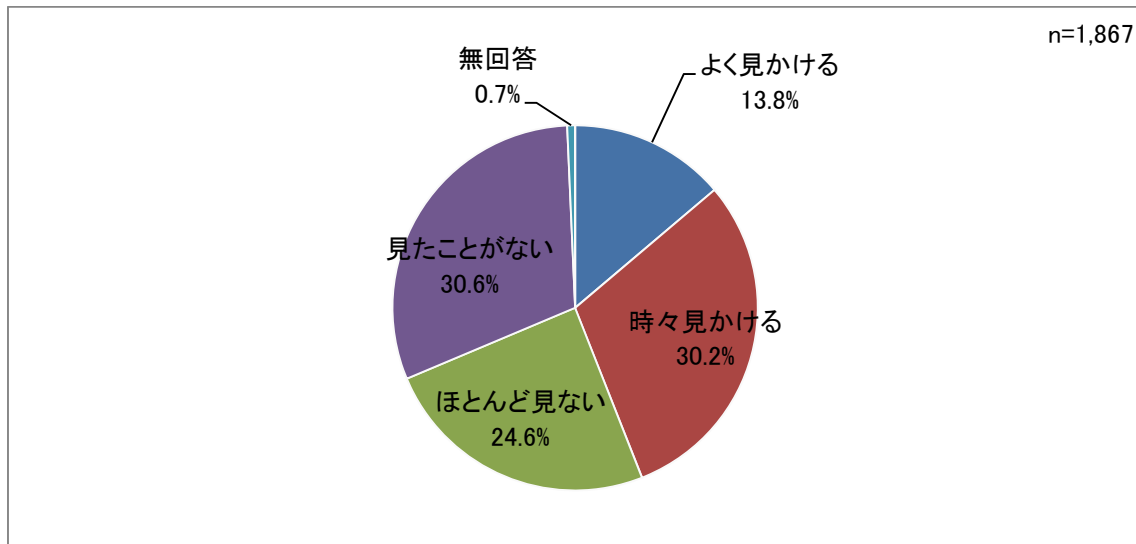


図 6.3-2 飼い主のいない猫への餌やり目撃（構成比）

(3) 飼い主のいない猫への餌やりの評価

飼い主のいない猫への餌やりを「良くないと思う」とした回答が最も多く、全体の 64.7% を占めた。一方で「良いと思う」との回答は、11.2%であった。

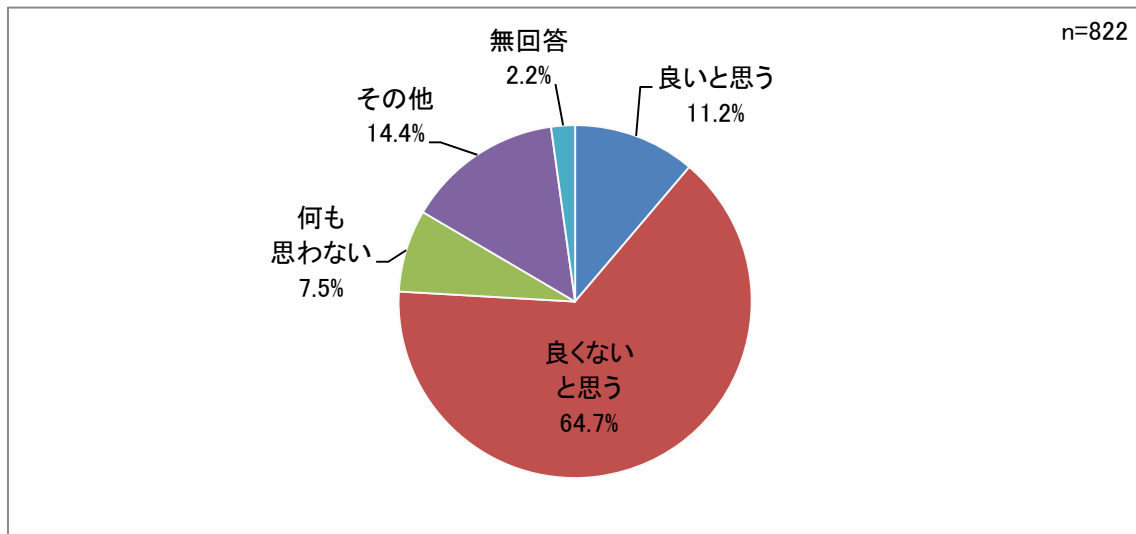


図 6.3-3 飼い主のいない猫への餌やりの評価（構成比）

(4) 飼い主のいない猫活動の認知度

飼い主のいない猫対策（地域猫活動）を「知らない」とした回答が最も多く、回答者全体の 57.3%を占めた。飼い主のいない猫対策（地域猫活動）への参加の有無を問わず「知っている」とした回答は全体の 41.2%であり、その中でも「知っている、参加している（参加したことがある）」とした回答は 2.7%であった。

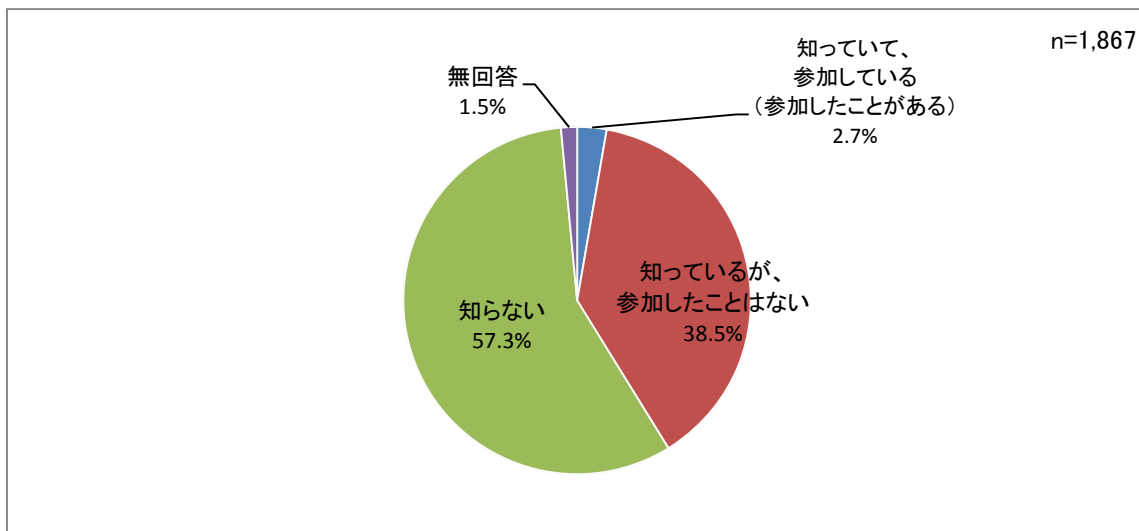


図 6.3-4 「飼い主のいない猫活動」の認知度（構成比）

(5) 行政・ボランティア団体による犬や猫の譲渡の認知度

行政やボランティア団体による犬や猫の譲渡を「知っている」とした回答が多く、回答者全体の 80.6%を占めた。

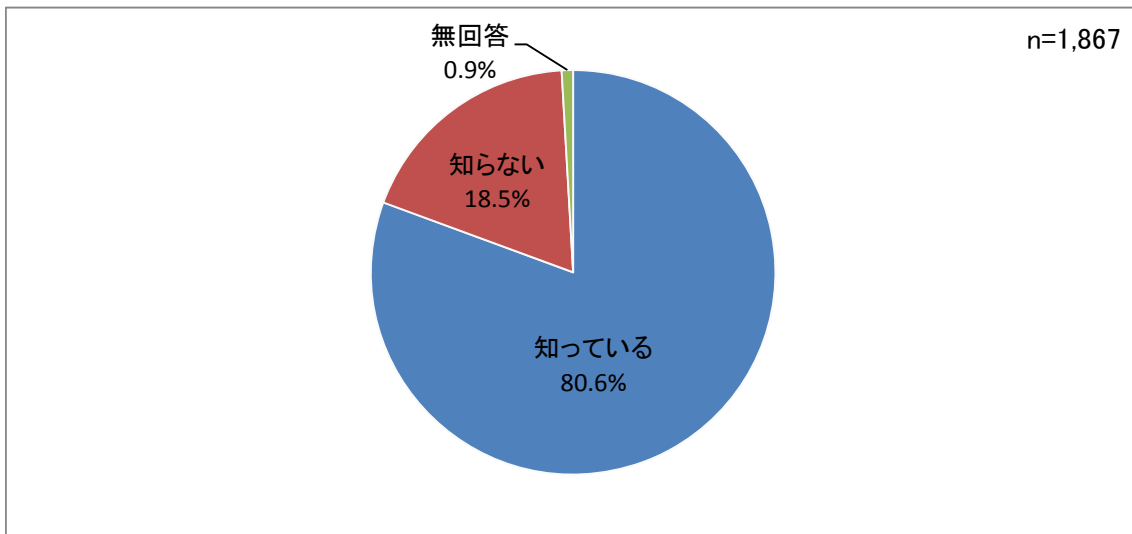


図 6.3-5 行政・ボランティア団体による犬や猫の譲渡の認知度（構成比）

(6) 犬の迷惑行為への評価

今まで犬に対して迷惑に感じたことが「ある」という回答が回答者全体の 50.8%であり、「ない」という回答は 43.6%であった。

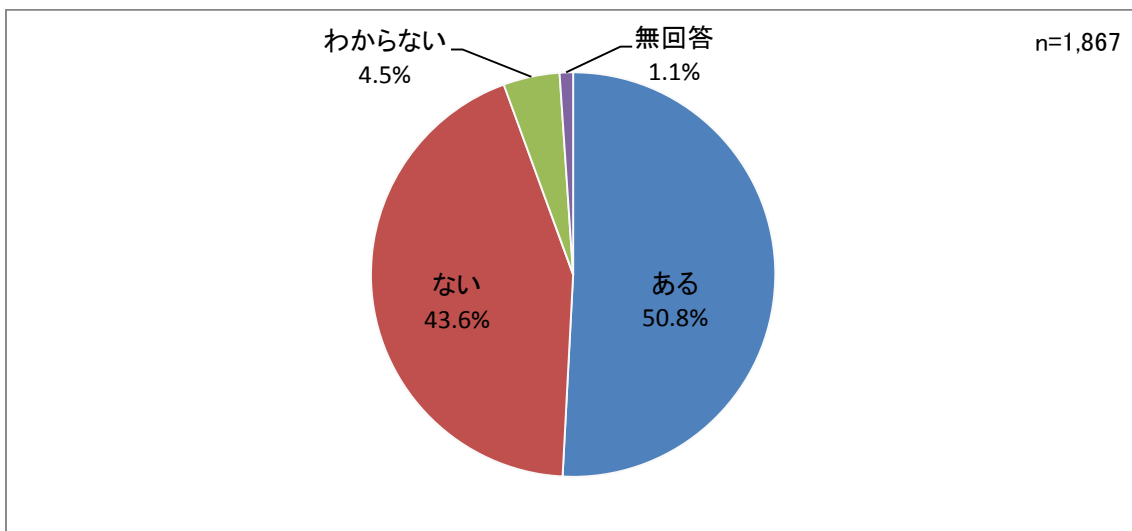


図 6.3-6 犬の迷惑行為に関する回答（構成比）

(7) 犬に関する迷惑だと感じる内容

犬に対して迷惑だと感じる内容として、76.5%が「糞」を選択しており、最も多かった。次いで「尿」46.2%、「鳴き声」41.4%が続き、「放し飼い」については22.3%であった。

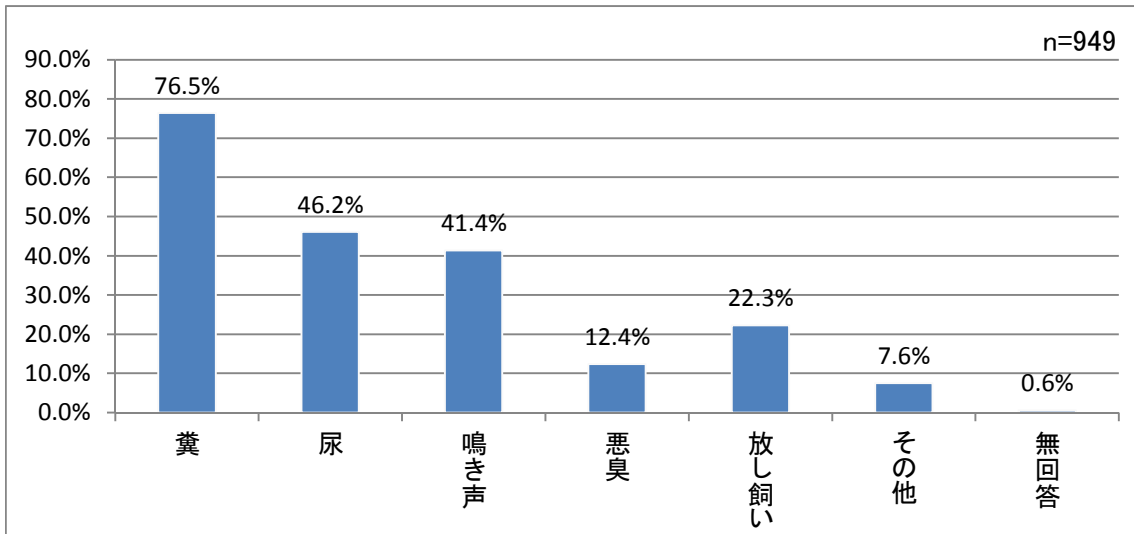


図 6.3-7 犬の迷惑だと感じる内容の回答者割合（複数回答可）

(8) 猫の迷惑行為への評価

今まで猫に対して迷惑に感じたことが「ある」という回答は回答者全体の63.5%であり、「ない」という回答の31.9%の概ね2倍となった。

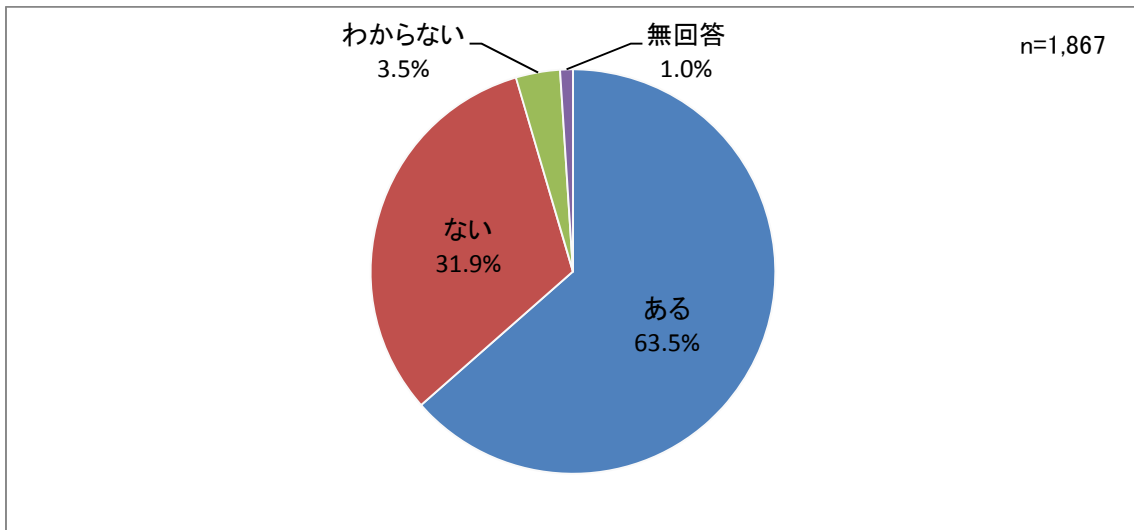


図 6.3-8 猫の迷惑行為に関する回答（構成比）

(9) 猫に関する迷惑だと感じる内容

猫に対して迷惑だと感じる内容として、74.2%が「糞」を選択しており、次いで「尿」(49.2%)が多かった。次に「鳴き声」(35.1%)、「庭やゴミ捨て場を荒らす」(33.7%)の選択が続いた。

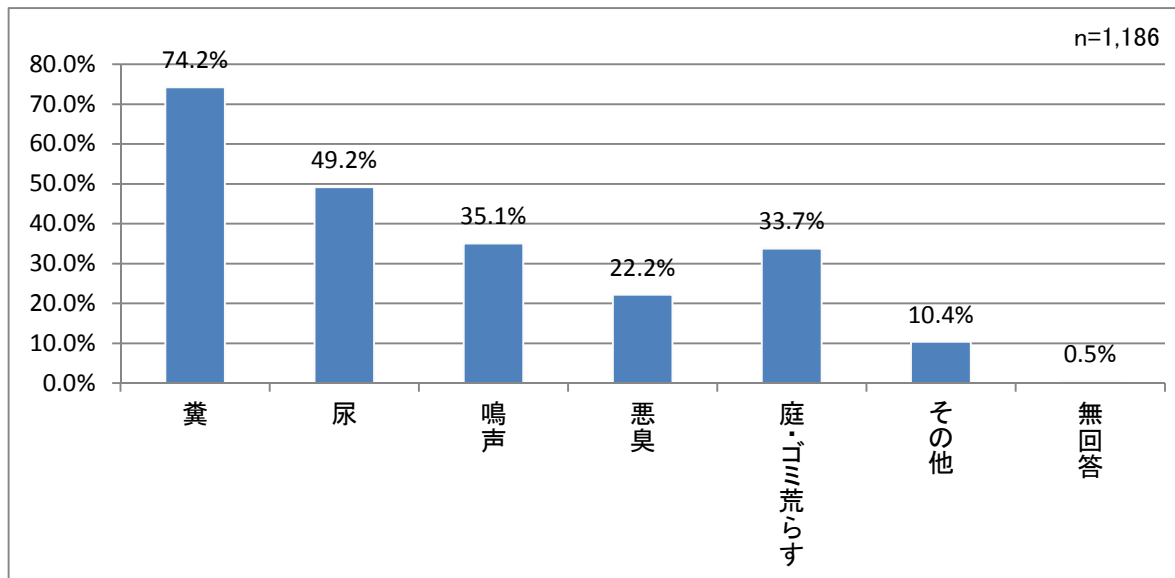


図 6.3-9 猫に関して迷惑だと感じる内容の回答者割合 (複数回答可)

(10) 同行避難の認知度

災害発生時に避難所へペットと一緒に避難すること (同行避難) を「知っている」とした回答が回答者全体の 51.0%、「知らない」という回答は回答者全体の 46.0%であり、ほぼ半々と言う結果であった。

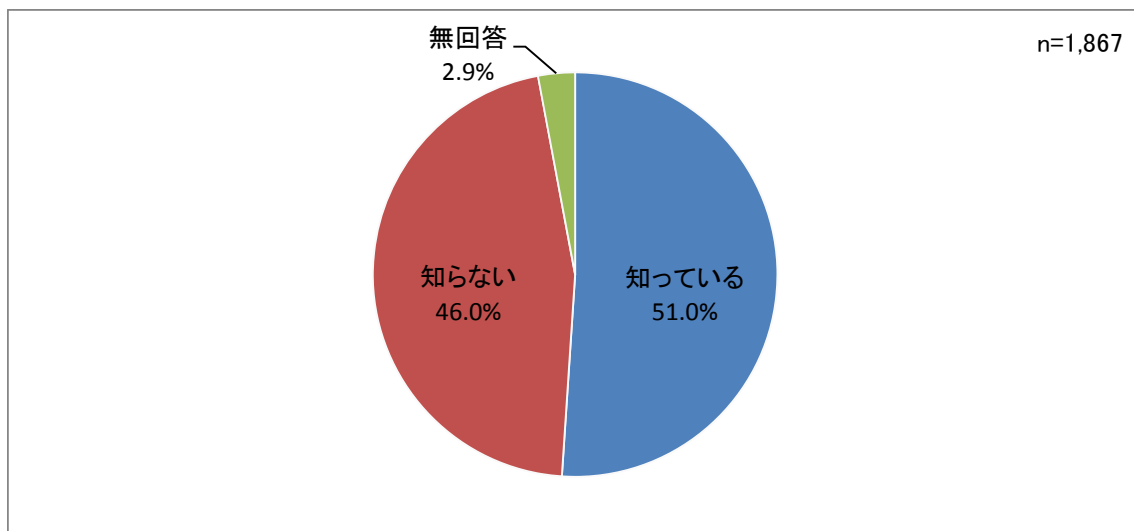


図 6.3-10 同行避難の認知度 (構成比)

6.3.3 犬及び猫飼育者への設問

(1) 災害発生時の対応

災害発生時に「連れて逃げる」という回答が最も多く、回答者全体の75.8%を占めていた。次いで「連れて行けない為、自宅に置いていく」という回答が多かったが、回答者全体の7.4%であった。

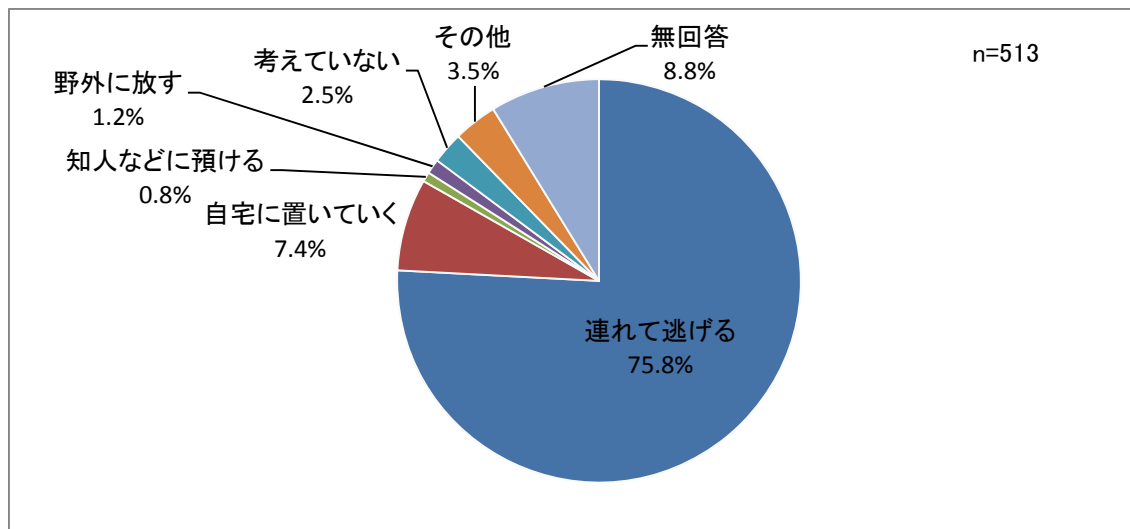


図 6.3-11 災害発生時の対応（構成比）

(2) 災害発生時の備え

犬または猫の飼育者の45.4%が災害時の備えを「特にしていない」と回答した。災害時の備えをしているとした場合には、「ゲージに嫌がらずに入るしつけ」が最も多く27.9%、次いで「犬・猫用の防災グッズの準備」（19.1%）であった。

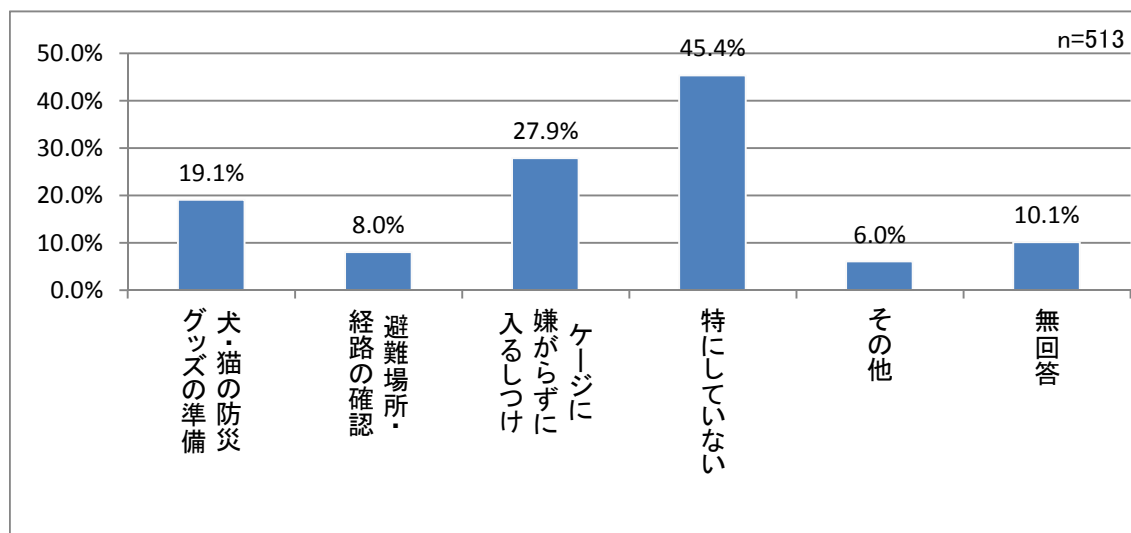


図 6.3-12 災害発生時の備え（回答者割合）

(3) 飼えなくなった時の準備

万が一飼いきれなくなったときのために準備していることは「ない」という回答が最も多く、回答者全体の 73.1% を占めた。

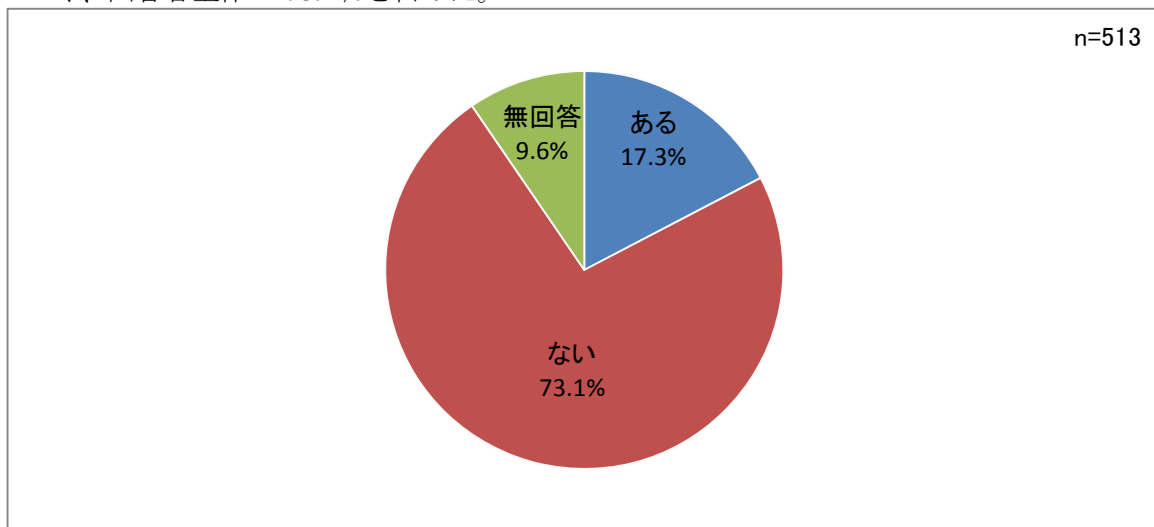


図 6.3-13 飼えなくなった時の準備（構成比）

(4) 安楽殺の選択

「飼っている犬・猫が、病気やケガにより助かる見込みがないと獣医師から判断された場合、苦痛から解放するため麻酔薬を用い、死なせることを選択しますか？」との質問に対して、「選択する」という回答が最も多く回答者全体の 47.0% であり、「選択しない」という回答は 32.7%、「わからない」は 9.9% となった。なお、「わからない」には、「現時点では判断することが出来ない」という意見も含まれる。

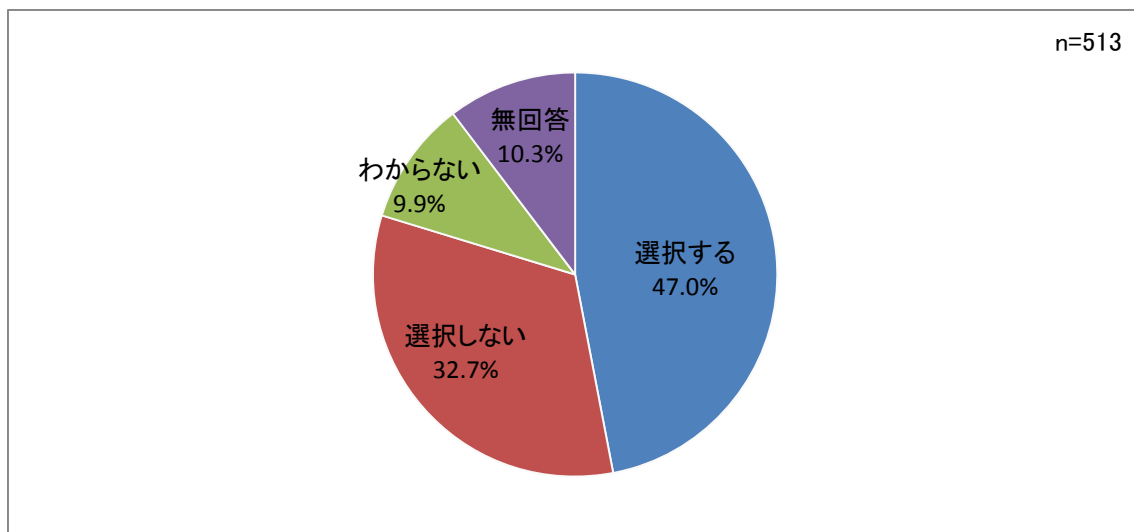


図 6.3-14 安楽殺の選択（構成比）

6.3.4 犬飼育者への設問

(1) 犬の飼育頭数

犬を飼育している世帯は 336 軒で、回答者全体の 18.0%であった。また、飼育頭数の合計は 424 頭であった。

各世帯の飼育頭数については、1 頭が最も多く、犬を飼育している世帯の 78.9%を占めた。最も頭数が多い世帯では 5 頭を飼育しているが、そのような世帯は 1 軒のみであり、1 頭及び 2 頭飼育している世帯で、全体の 94.7%となった。1 軒当たりの平均飼育頭数は、1.27 頭であった。

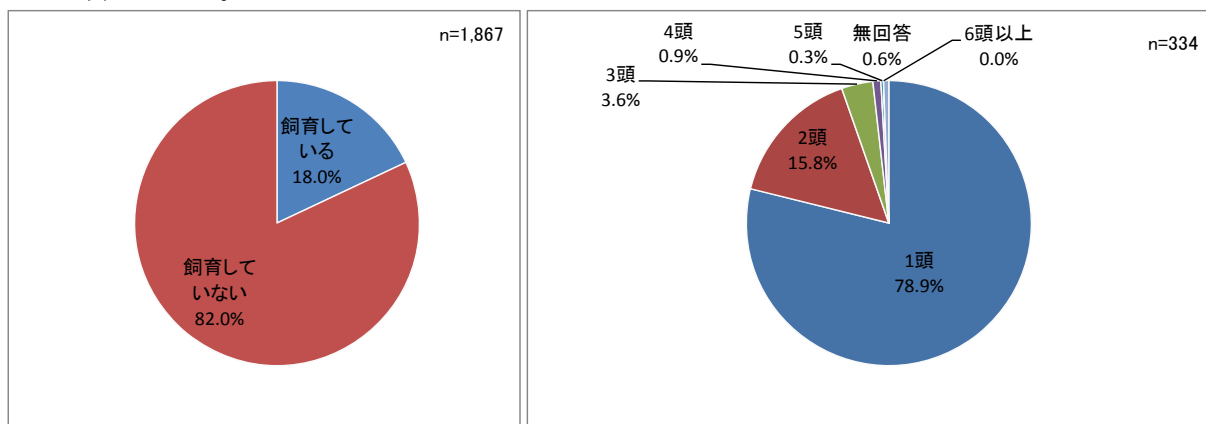
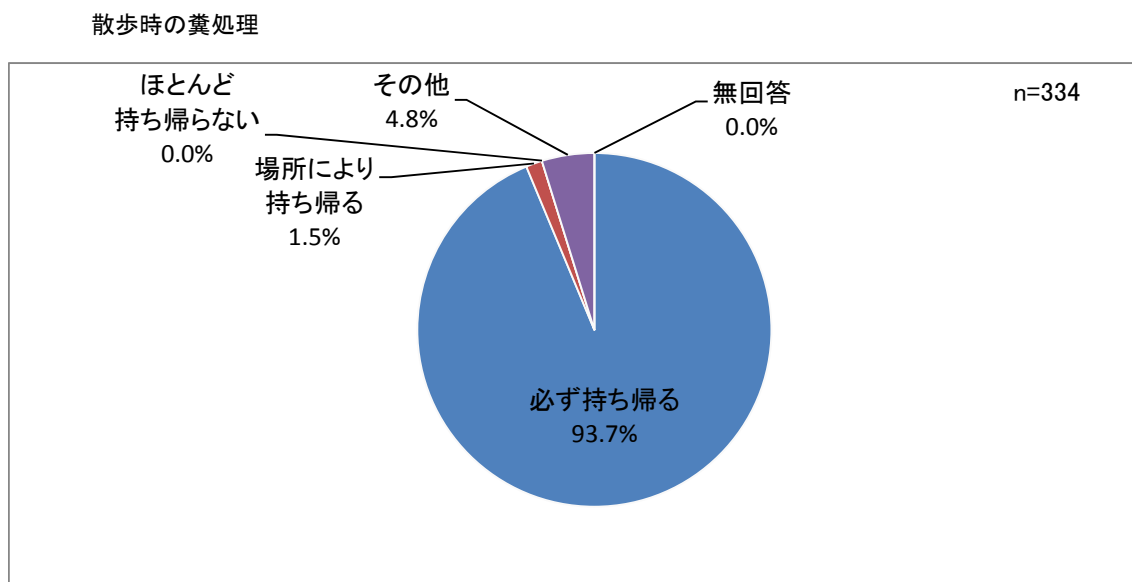


図 6.3-15 犬の飼育軒数 (左) と犬の飼育頭数別軒数 (右) (構成比)

(2) 散歩時の糞処理、尿処理

散歩時の糞処理について、「必ず持ち返る」という回答が犬飼育者全体の 93.7%を占めた。「場所により持ち返る」という回答も 5 件あったが、「ほとんど持ち帰らない」という回答は無かった。

散歩時の尿処理について、散歩時の尿を「水で洗い流す等する」という回答が 59.9%を占めたが、「何もしない」という回答も 26.6%見られた。



散歩時の尿処理

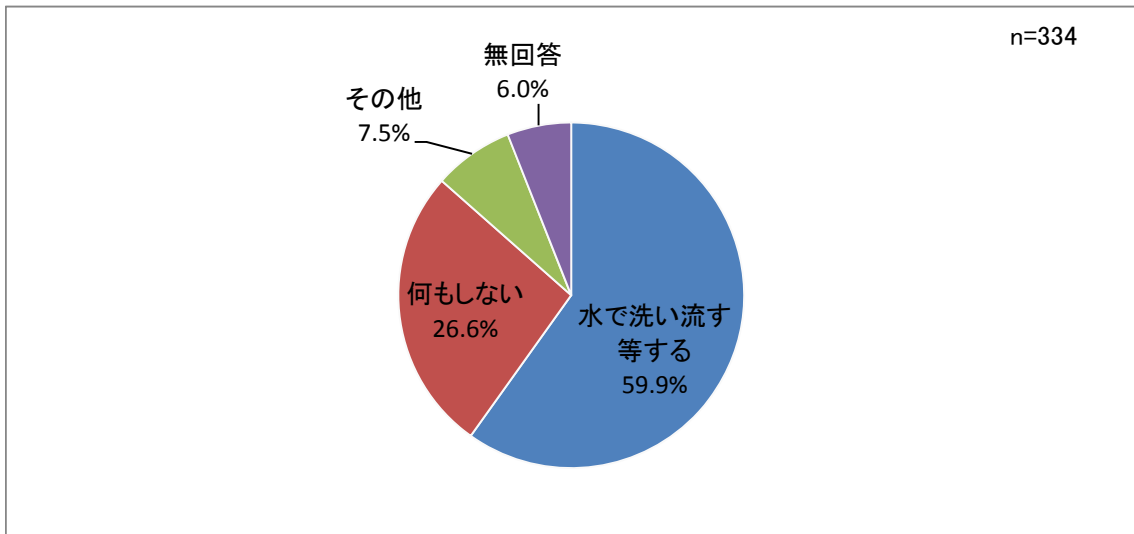


図 6.3-16 犬の散歩時の糞処理（上）と尿処理（下）（構成比）

(3) 犬の餌代

年間「3～6万円未満」という回答が最も多く、犬飼育者全体の32.6%であり、次いで「1～3万円未満」が25.1%となった。

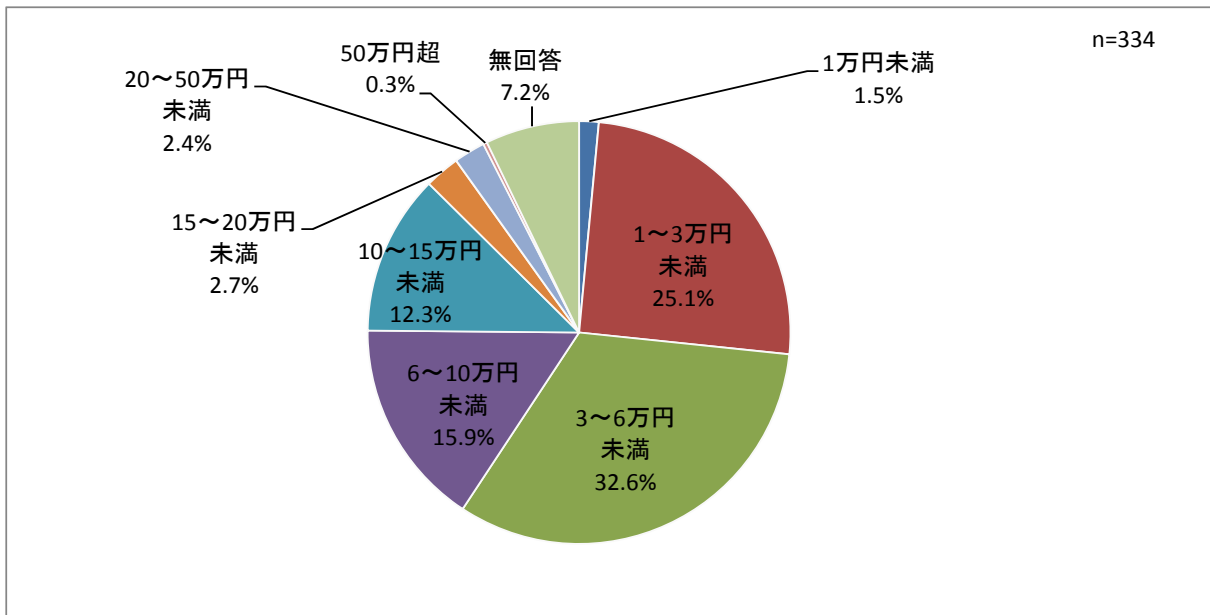


図 6.3-17 犬の餌代（年額）（構成比）

(4) 犬の医療費

年間「3～6万円未満」という回答が最も多く、次いで「1～3万円未満」という回答が続き、両選択を合わせると53.6%となった。

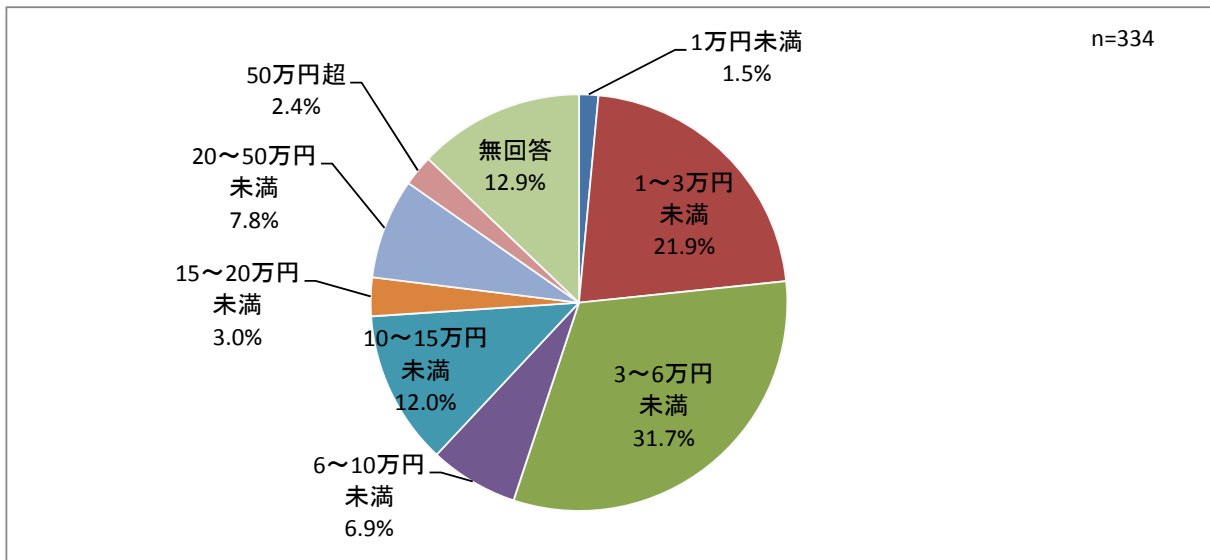


図 6.3-18 犬の医療費（年額）（構成比）

(5) 犬の餌代・医療費以外の費用

年間「3～6万円未満」という回答が最も多く26.0%であり、次いで「1～3万円未満」という回答が多かったが、無回答者が29.6%と餌代・医療費より多くみられた。

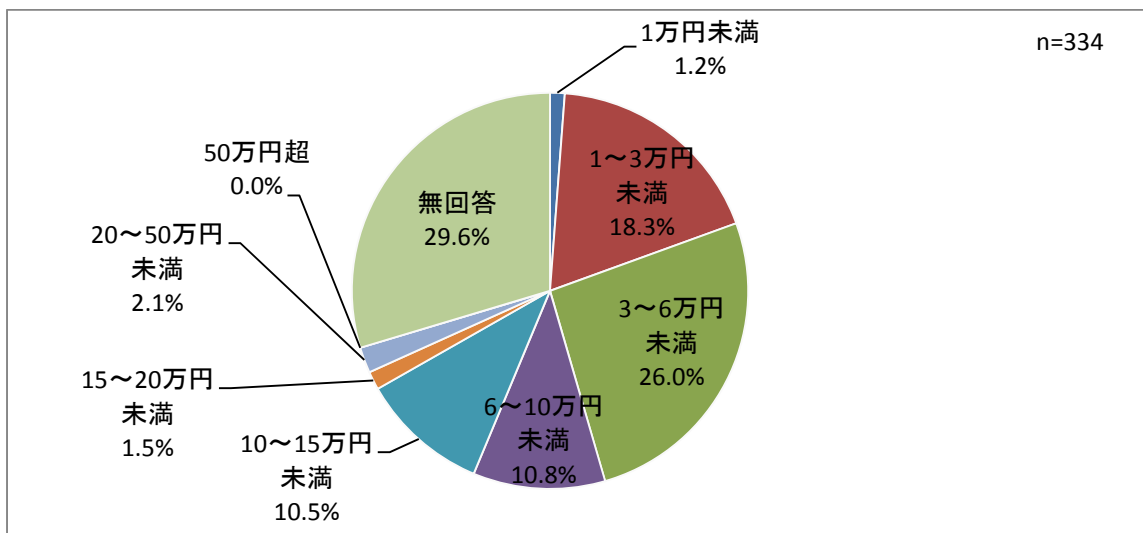


図 6.3-19 犬の餌代・医療費以外の費用（年額）（構成比）

(6) 犬の性別、年齢

飼育犬の性別は、オス 205 頭、メス 206 頭とほぼ同数であった。年齢は、6～10 才の犬が最も多く 160 頭で、飼育犬全体の 37.7% を占めた。次いで 1～5 才の 118 頭 (27.8%)、11～15 才の 115 頭 (27.1%) が多かった。

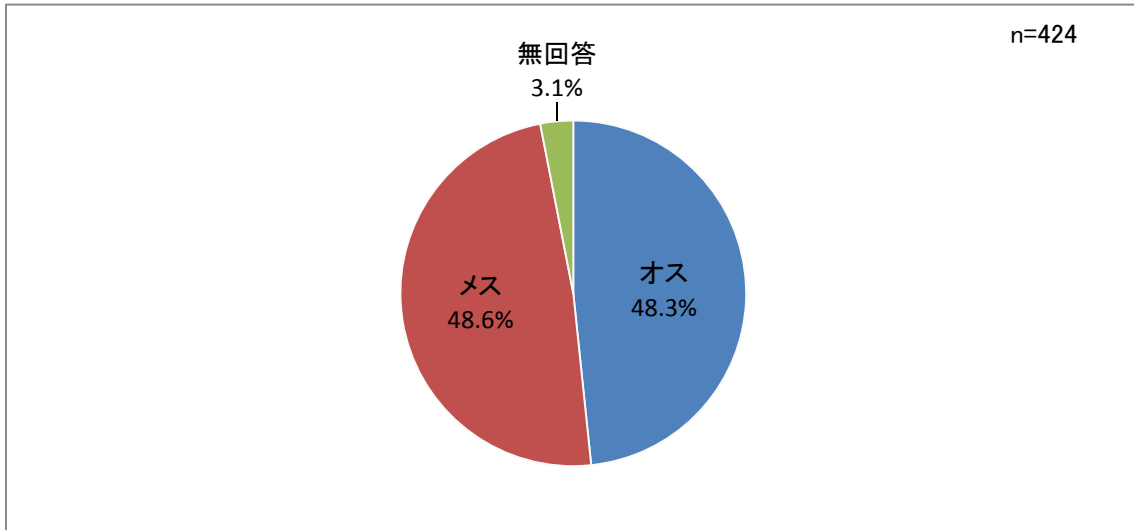


図 6.3-20 犬の性別 (構成比)

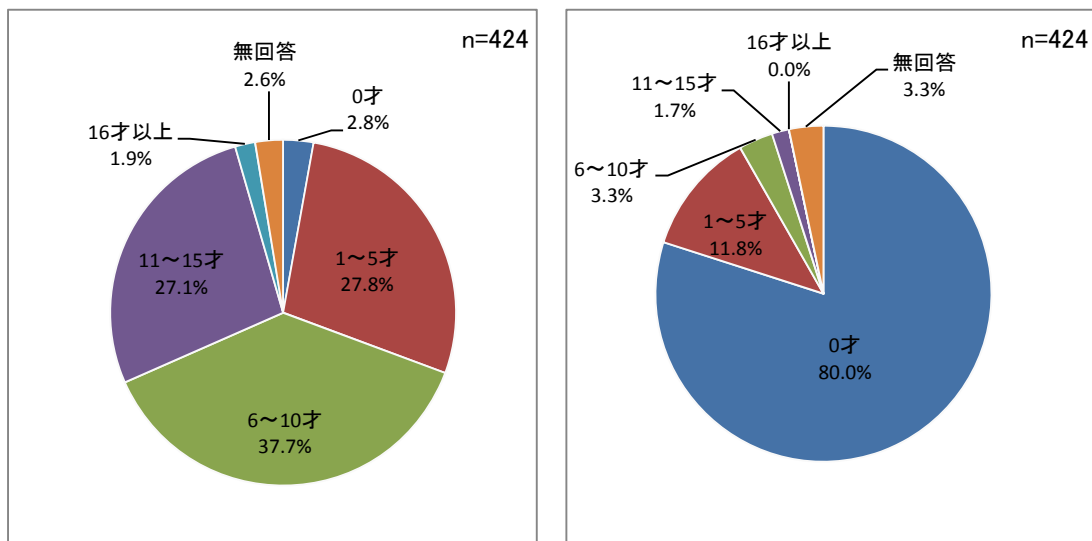


図 6.3-21 犬の年齢 (現在 : 左) と (飼い始め : 右) (構成比)

(7) 犬の飼育期間

6～10年飼育されている犬が140頭と最も多く、33.0%を占めた。次いで1～5年の128頭（30.2%）、11～15年の99頭（23.3%）が多かった。

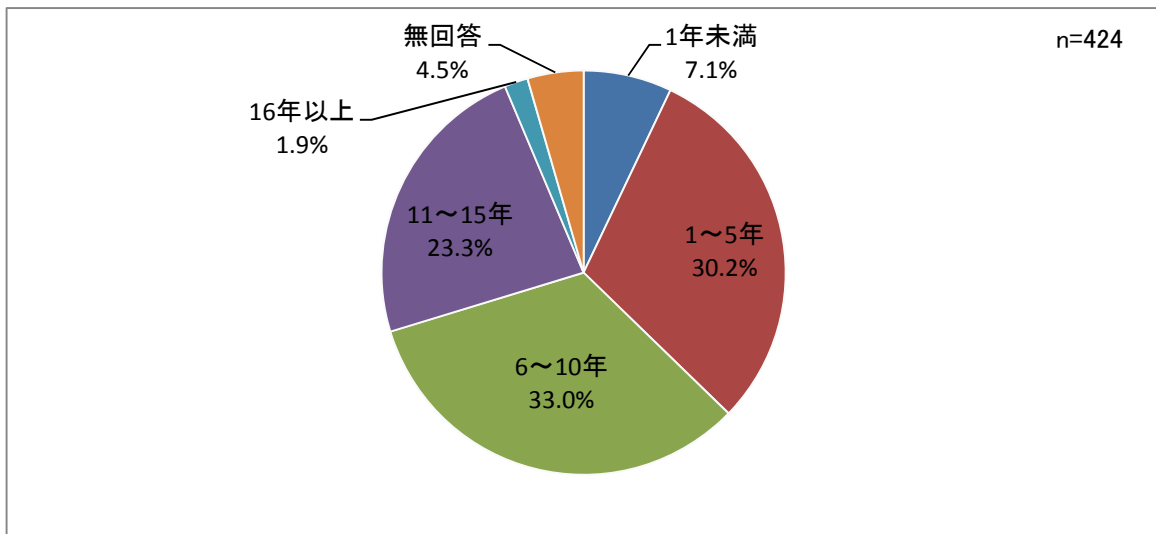


図 6.3-22 犬の飼育期間（構成比）

(8) 犬の身元表示方法

設問にあげた身元表示方法の選択肢のうち「鑑札をつけている」、「マイクロチップを入れている」犬が同数であり、飼育犬の31.8%であった。「注射票をつけている」という犬は25.2%であった。「連絡先のある首輪・迷子札などをつけている」犬は14.9%であった。

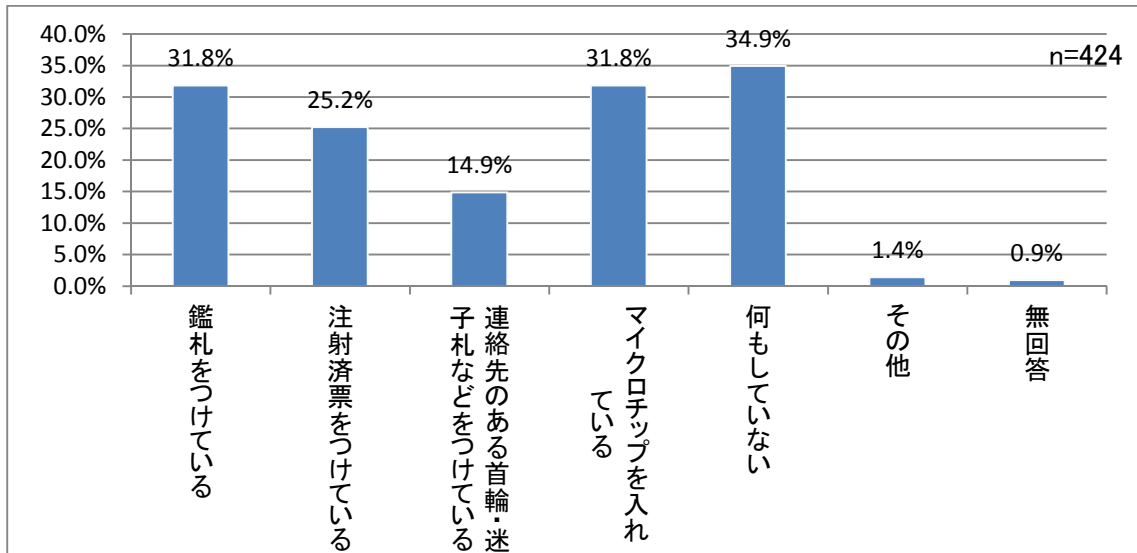


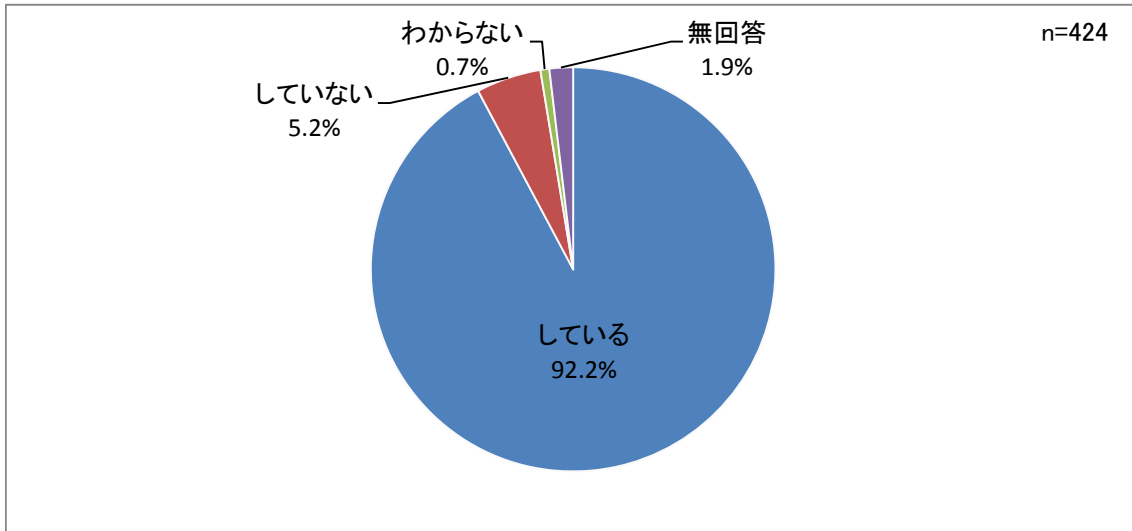
図 6.3-23 犬の身元表示方法に関する回答者割合（複数回答可）

(9) 犬の登録、狂犬病予防注射接種

登録されている犬は 391 頭で、飼育犬全体の 92.2%であった。一方、登録されていない犬は 22 頭で 5.2%、登録されているかわからない犬は 3 頭で 0.7%であった。

また、毎年、狂犬病予防注射接種をしている犬は 389 頭で、飼育犬全体の 91.7%であった。一方、毎年の狂犬病予防注射をしていない犬は 23 頭で、全体の 5.4%であった。

犬の登録



犬の狂犬病予防注射接種

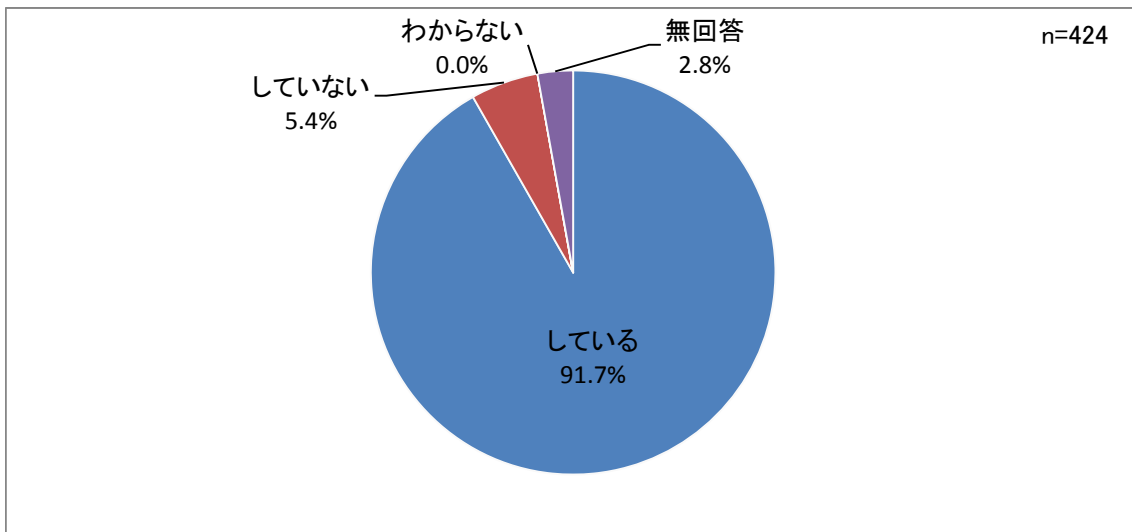


図 6.3-24 犬の登録有無（上）と狂犬病予防注射接種（下）（構成比）

(10) 犬の不妊・去勢処置

不妊処置を「している」犬はメス犬全体の74.8%であるのに対し、去勢「している」犬はオス全体の64.9%であり、不妊・去勢処置の処置率はメス犬の方がやや高かった。

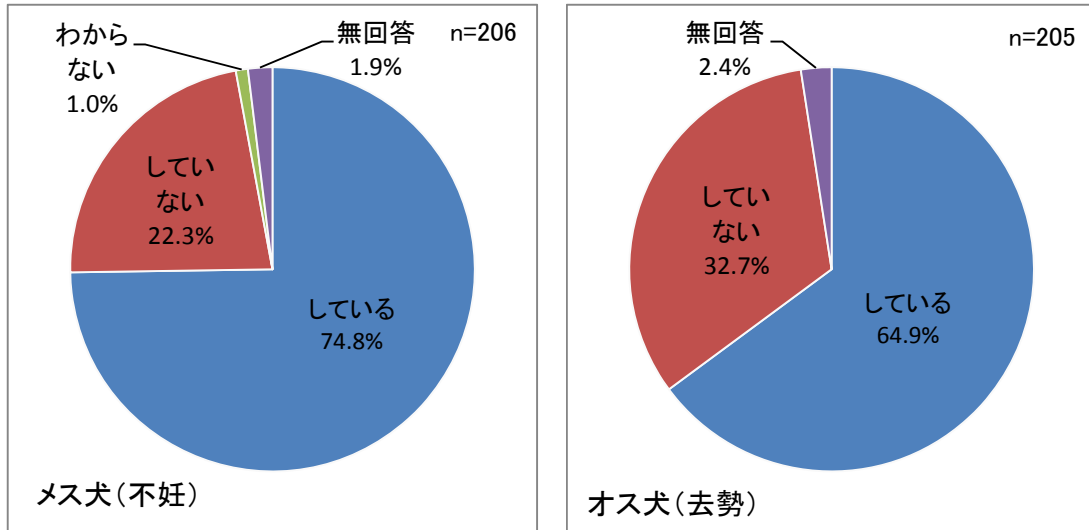


図 6.3-25 メス犬の不妊処置（左）とオス犬の去勢処置（右）（構成比）

(11) 意図しないメス犬の繁殖経験

繁殖経験の「ない」メス犬が圧倒的に多く、メス犬の95.1%を占めた。

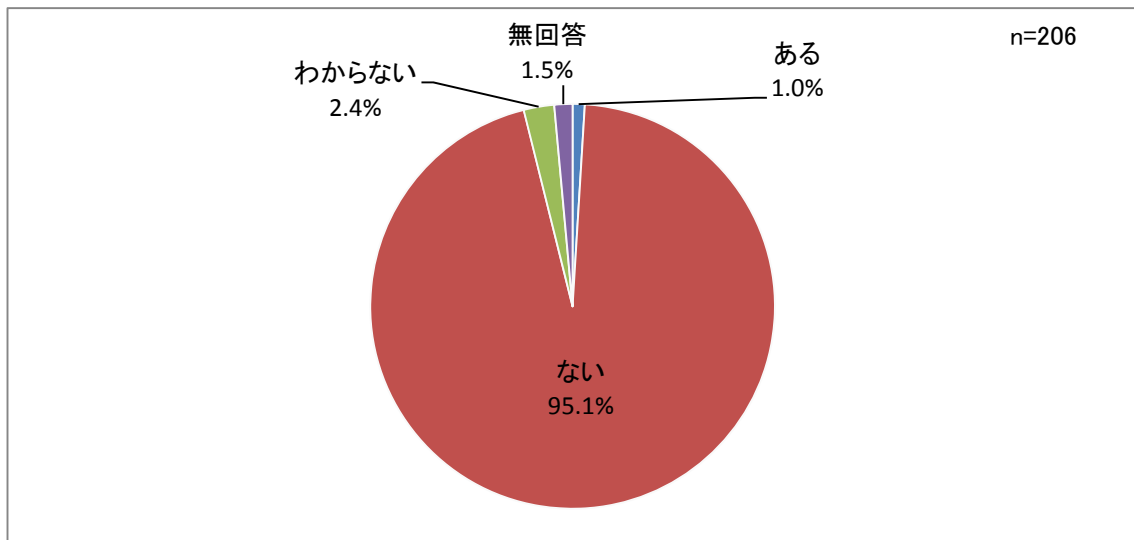


図 6.3-26 メス犬の繁殖経験（構成比）

(12) 散歩時のリード装着

散歩時にリードを「している」犬は 394 頭で、飼育犬全体の 92.9%に達している。リードを「していない」犬は 4 頭のみ (0.9%) であり、散歩をする犬 (「散歩はしない」以外) のほぼ全てがリードをつけていた。

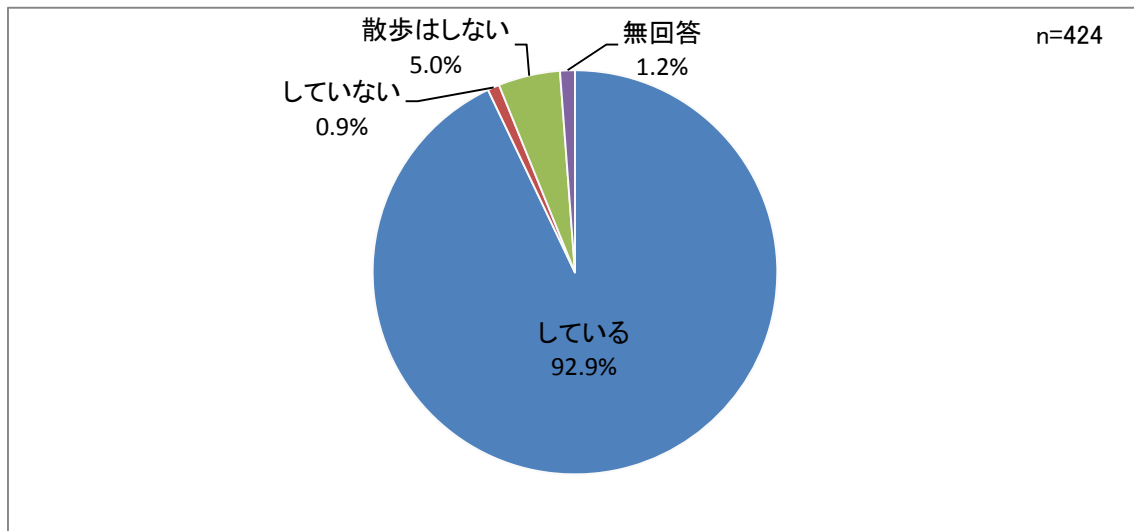


図 6.3-27 散歩時のリード装着有無 (構成比)

(13) 犬の飼育形態

「屋内」のみで飼われている犬が 369 頭と飼育犬全体の 87.0%を占め、「屋外」のみで飼われている犬は 18 頭で 4.2%であった。「屋内と屋外 (出入り管理)」で飼われている犬は 32 頭で 7.5%、「屋内と屋外 (出入り自由)」は 1 頭で 0.2%であった。

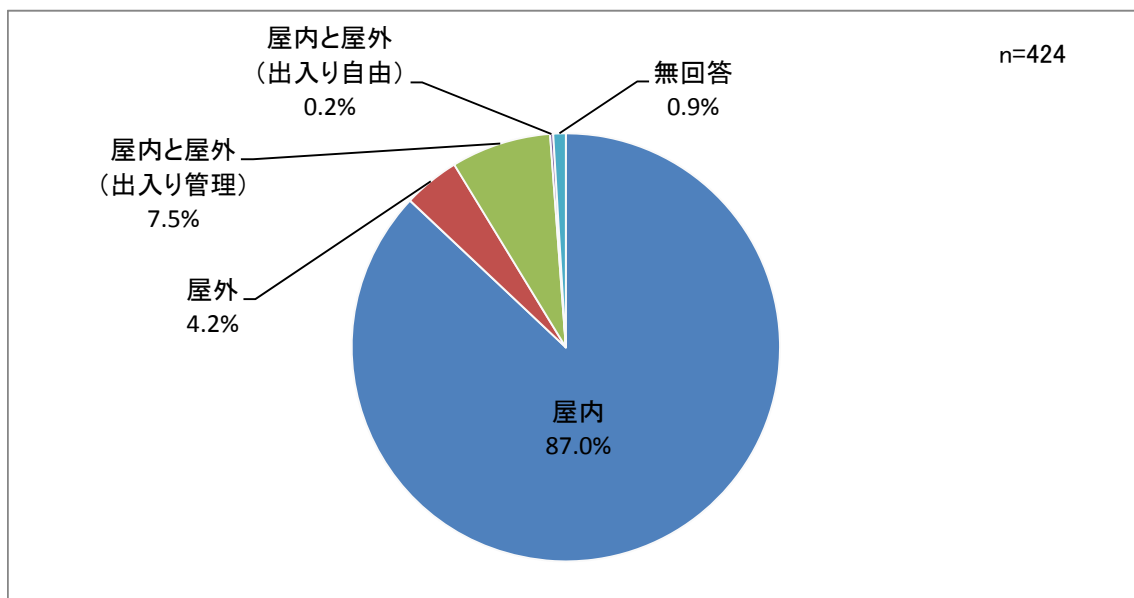


図 6.3-28 犬の飼育形態 (構成比)

(14) 犬のトイレ

トイレの場所として多いのは「屋内」という回答であり、犬の飼育犬全体の 69.8%であり、「屋外」という回答は 97.8%であった。屋外の内訳は「屋外(散歩時などの敷地外)」が 63.4%、「屋外(庭などの敷地内)」が 34.4%であった。

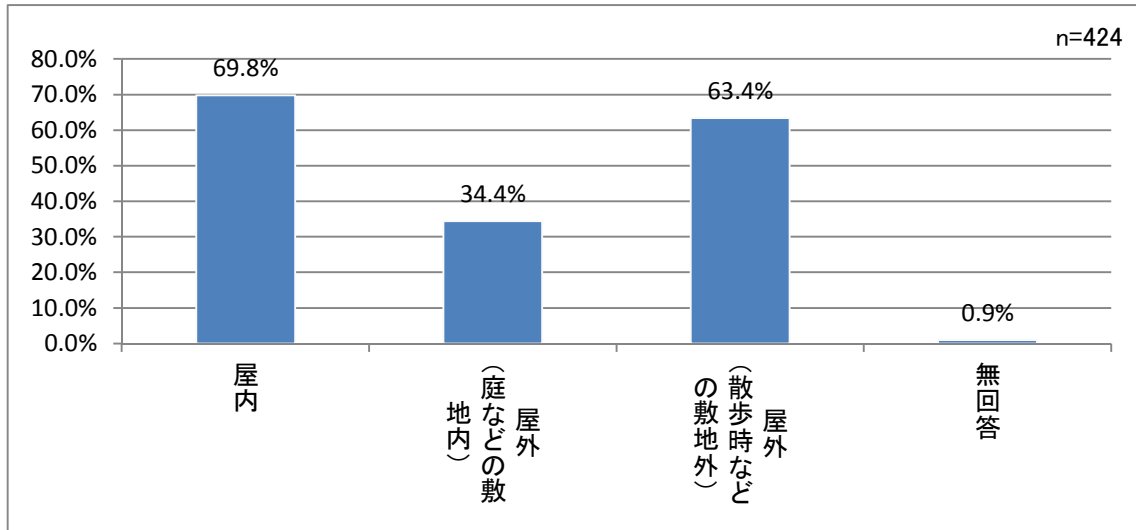


図 6.3-29 犬のトイレに関するしつけ内容の回答者割合（複数回答可）

(15) 犬の入手方法

「ペットショップで購入した」という回答が最も多く、64.2%と半数を占めた。次いで、「知人から貰った」という回答が多く、13.9%であった。「拾った」という回答は 0.9%であった。また、「行政機関からの譲受」または「ボランティア団体等からの譲受」という回答は全体の 7.0%であった。

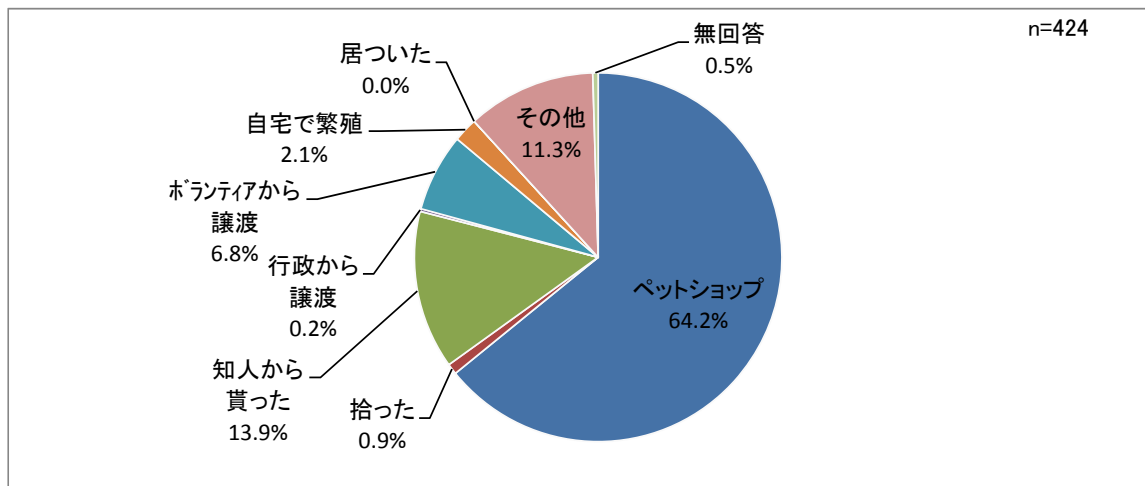


図 6.3-30 犬の入手方法（構成比）

6.3.5 猫飼育者への設問

(1) 猫の飼育頭数

猫を「飼育している」世帯は 214 軒で、回答者全体の 11.5%であった。また飼育頭数の合計は 368 頭であった。飼育頭数は「1 頭」が最も多く、猫飼育世帯の 56.1%を占めた。複数頭飼っている世帯も多く、最多で 8 頭を飼育していた。1 軒当たりの飼育頭数は 1.74 頭となった。

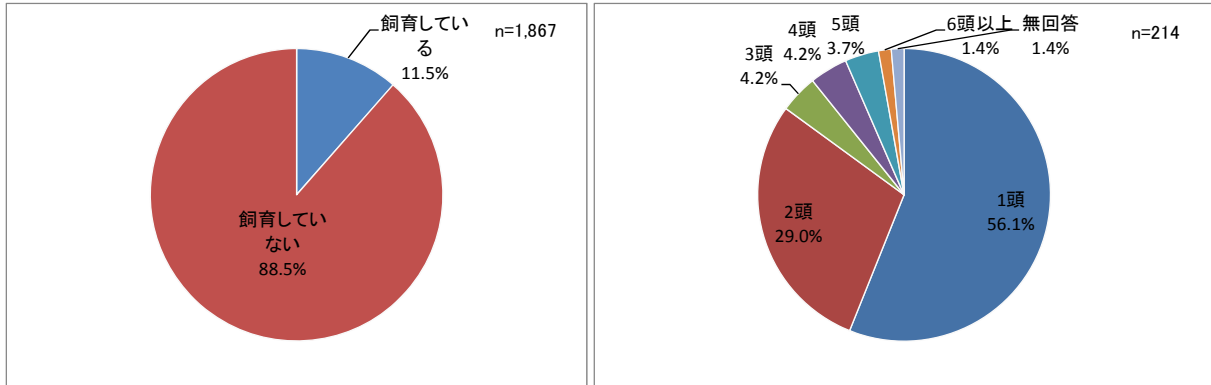


図 6.3-31 猫の飼育軒数及び飼育頭数別軒数 (構成比)

(2) 猫の餌代

年間「3～6 万円未満」という回答が猫飼育者全体の 31.3%と最も多く、「1～3 万円未満」という回答が 28.0%、「6～10 万円未満」という回答が 11.4%となった。

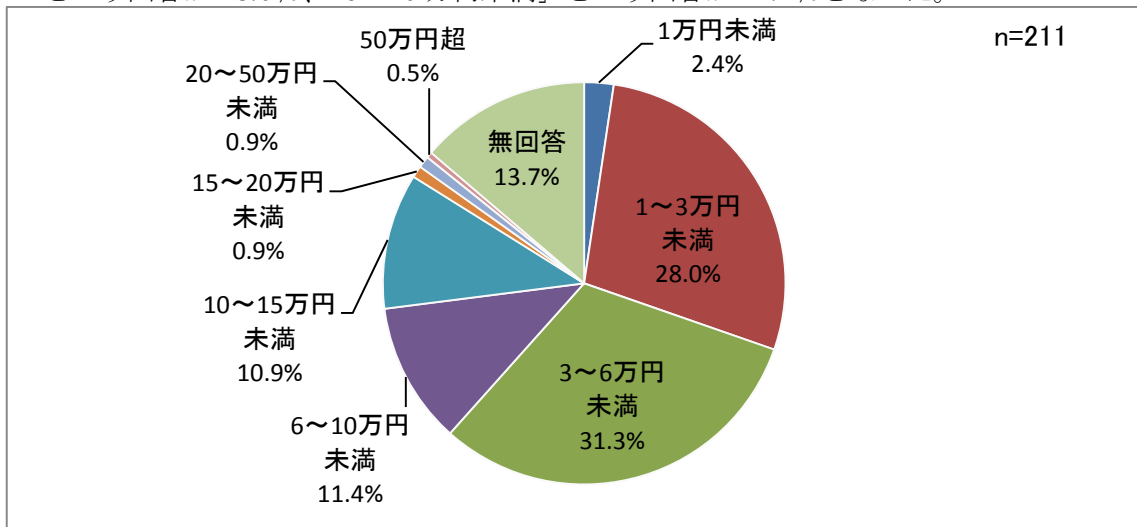


図 6.3-32 猫の餌代 (年額) (構成比)

(3) 猫の医療費

年間「1～3万円未満」という回答が猫飼育者全体の32.7%と最も多く、次いで「3～6万円未満」の17.5%が多かった。

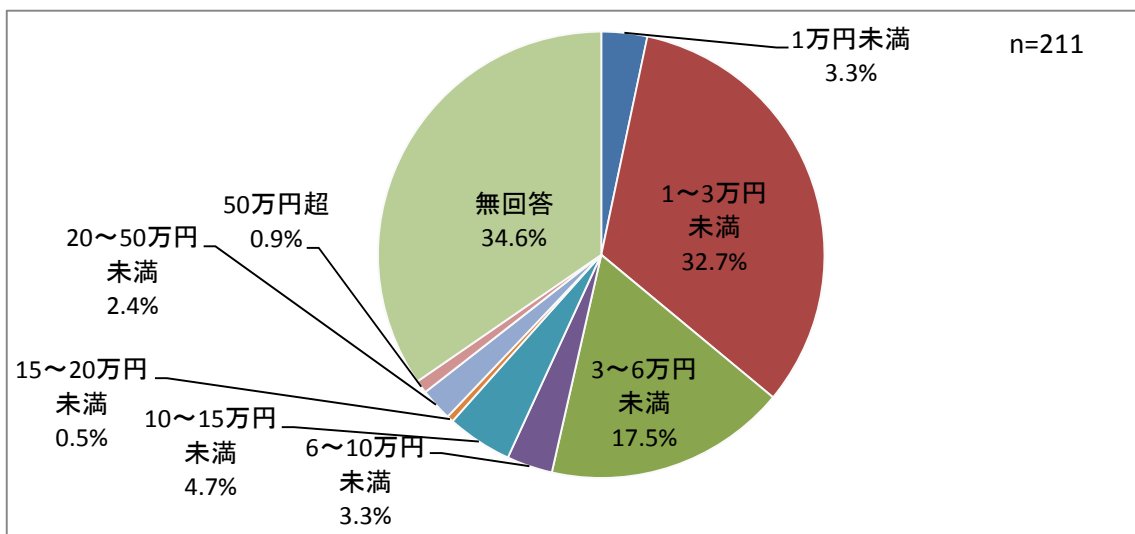


図 6.3-33 猫の医療費（年額）（構成比）

(4) 猫の餌代・医療費以外の費用

年間「1～3万円未満」という回答が猫飼育者全体の45.5%と最も多く、次いで「3～6万円未満」の13.3%が多かった。「1万円未満」を含めた3万円未満の回答は、全体の54.0%を占めた。

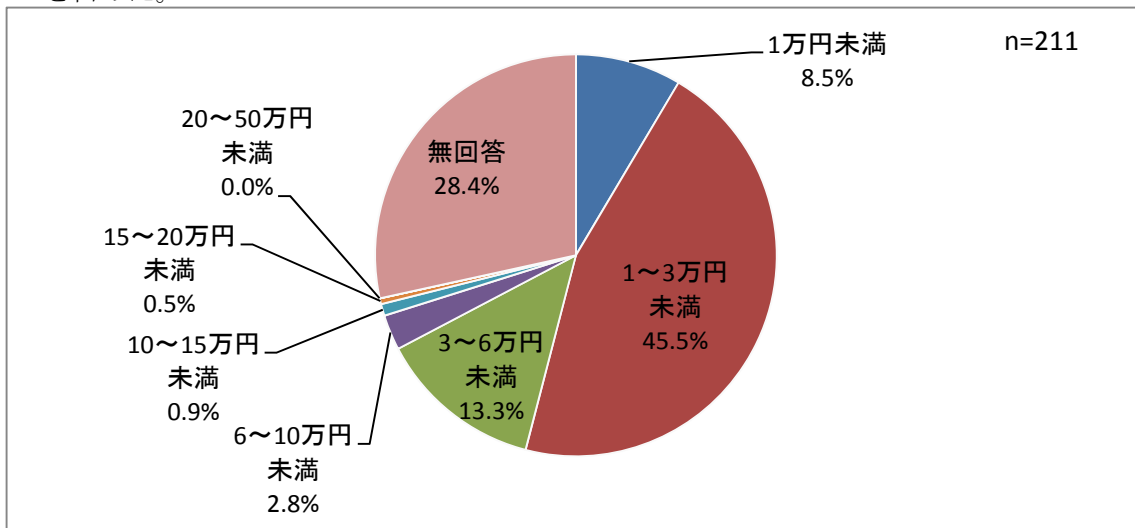


図 6.3-34 猫の餌代・医療費以外の費用（年額）（構成比）

(5) 猫の性別、年齢

飼育猫の性別は、「オス」169頭・「メス」188頭とほぼ同数であるが、メスの方がやや多かった（51.5%）。年齢は、「6～10才」が最も多く飼育猫全体の36.4%であり、次いで「1～5才」が多かった。一方、「16才以上」の高齢の猫は5.2%であった。

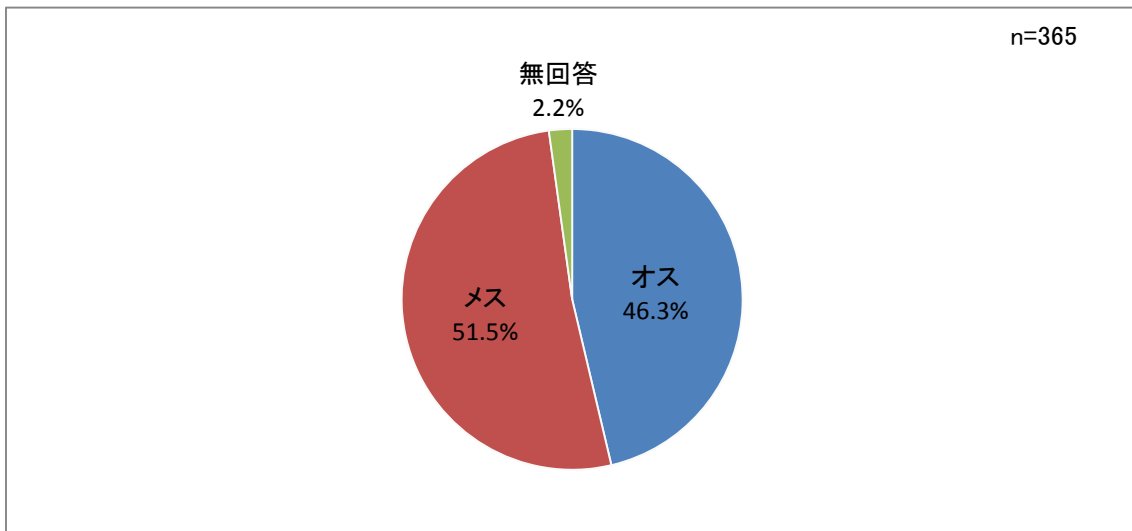


図 6.3-35 猫の性別（構成比）

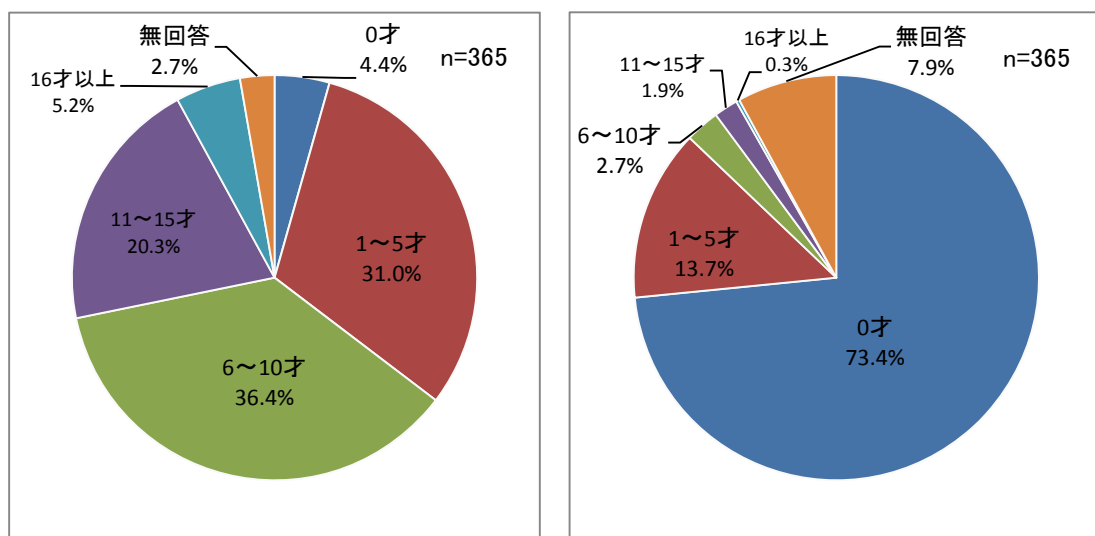


図 6.3-36 猫の年齢（現在：左）と（飼い始め：右）（構成比）

(6) 猫の飼育期間

飼育期間「6～10年」が最も多く飼育猫全体の32.1%であり、次いで「1～5年」が多かった。

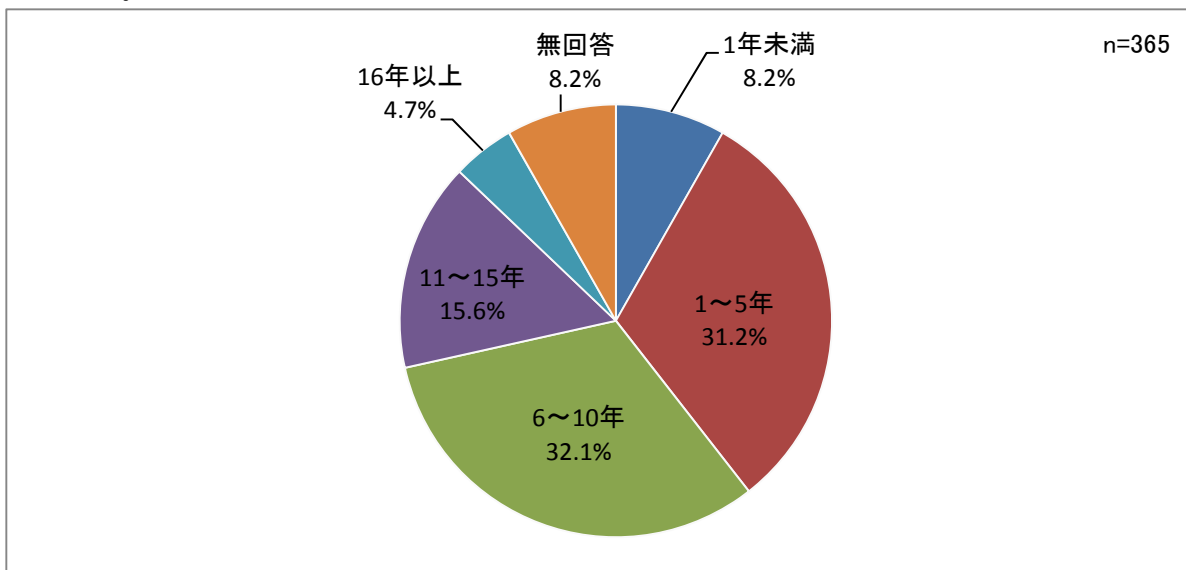


図 6.3-37 猫の飼育期間（構成比）

(7) 猫の身元表示方法

最も多い回答は「首輪などはつけていない」という回答で、飼育猫の49.9%と半数程度を占めた。「連絡先は無いが、首輪をつけている」という回答は29.3%であった。また、「マイクロチップを入れている」猫は9.9%であった。

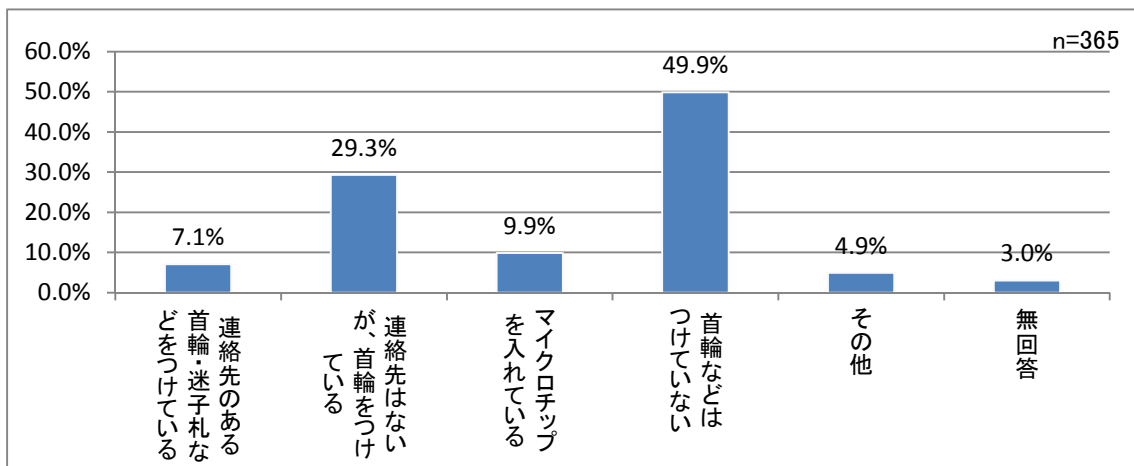


図 6.3-38 猫の身元表示方法に関する回答者割合（複数回答可）

(8) 猫の不妊・去勢処置

不妊処置「している」猫はメス猫全体の92.0%、去勢「している」猫はオス猫全体の88.8%であり、オス猫・メス猫ともに繁殖防止の処置率は高かった。

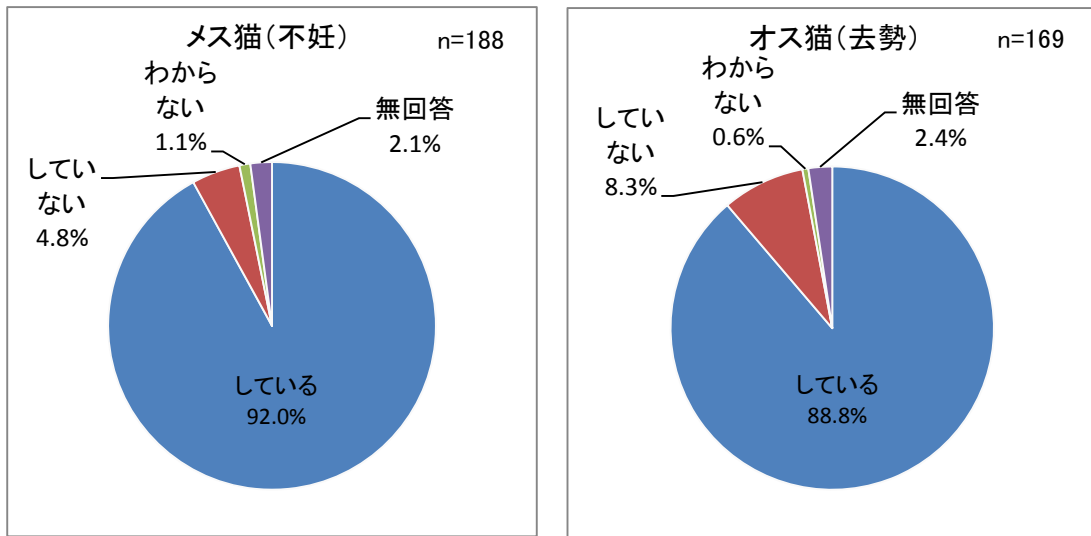


図 6.3-39 メス猫の不妊処置（左）及びオス猫の去勢処置（右）の頭数（構成比）

(9) 意図しないメス猫の繁殖経験

繁殖経験の「ない」メス猫が圧倒的に多く、メス猫の83.5%を占めた。

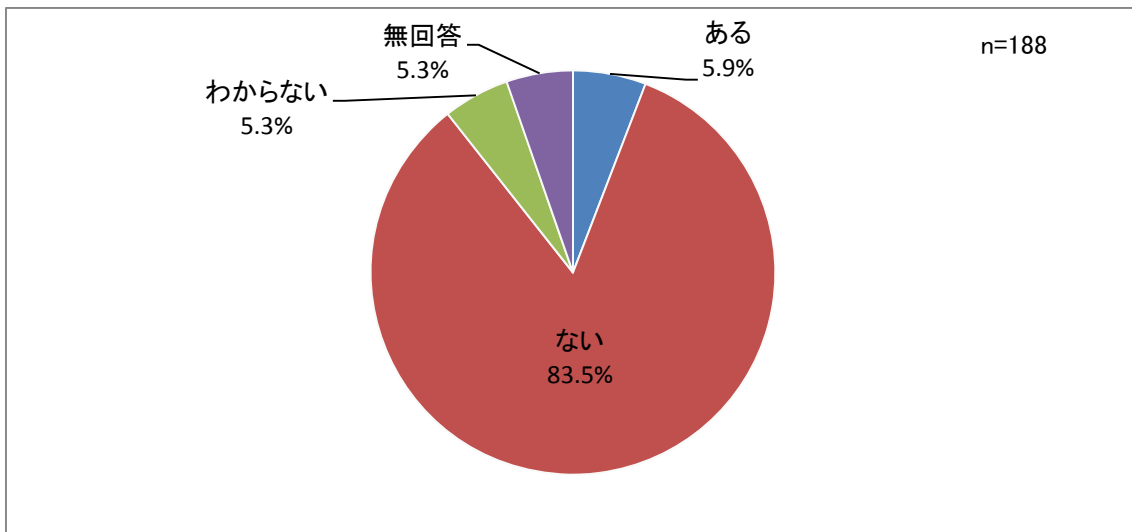


図 6.3-40 意図しないメス猫の繁殖経験（構成比）

(10) 猫の飼育形態

「屋内」で飼われている猫が最も多く、いわゆる完全屋内飼育の猫は飼育猫全体の 73.7% を占めた。屋外でも飼われている猫の比率をみると、「屋内と屋外（出入り管理）」で飼われている猫は全体の 10.4%、「屋内と屋外（出入り自由）」は 7.1%、「屋外」は 6.8%であった。

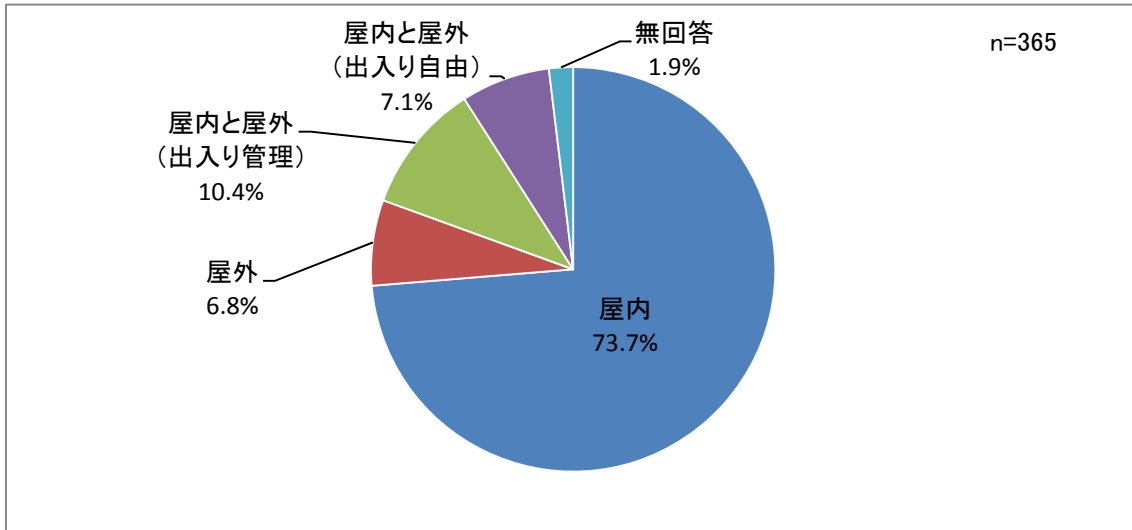


図 6.3-41 猫の飼育形態（構成比）

(11) 猫のトイレ

「屋内の猫トイレ」という猫が最も多く、飼育猫全体の 82.7% を占めた。「屋外」という猫は 11.8%、「屋内と屋外」という猫は 4.4%となった。

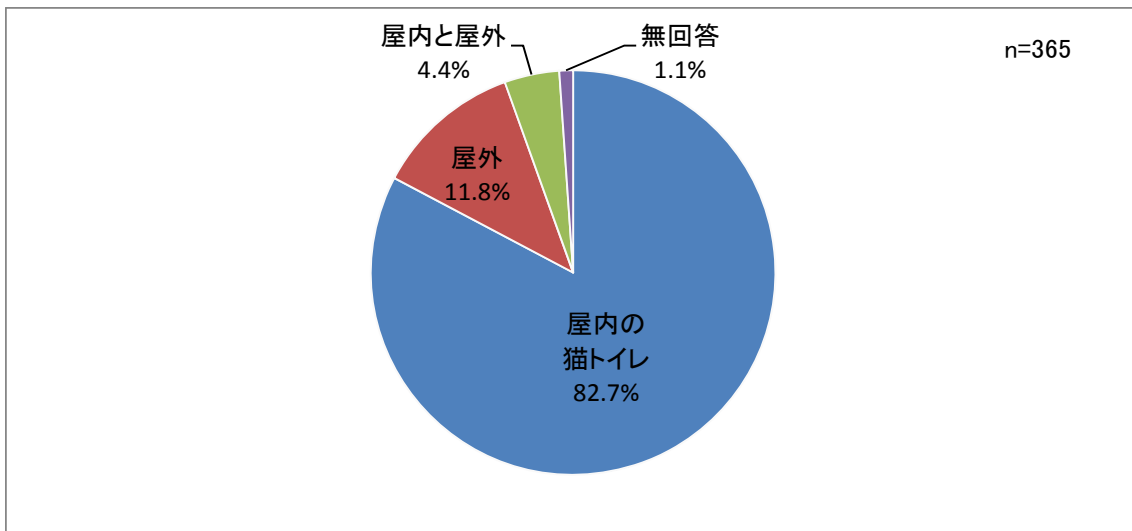


図 6.3-42 猫のトイレに関するしつけ（構成比）

(12) 猫の入手方法

「拾った」という猫が最も多く、飼育猫全体の36.2%であった。「いつのまにか居ついた」という猫(9.3%)と合わせると、飼い主のいない猫由来と特定可能な飼い猫が全体の45.5%を占めた。また、「知人などから貰った」(15.6%)と、「ボランティア団体からの譲受」(12.1%)、「行政機関からの譲受」(0.8%)を合わせると、譲受により入手された猫は全体の28.5%となった。犬の場合(64.2%)とは対照的に、「ペットショップ」で購入された猫は全体の11.0%であった。

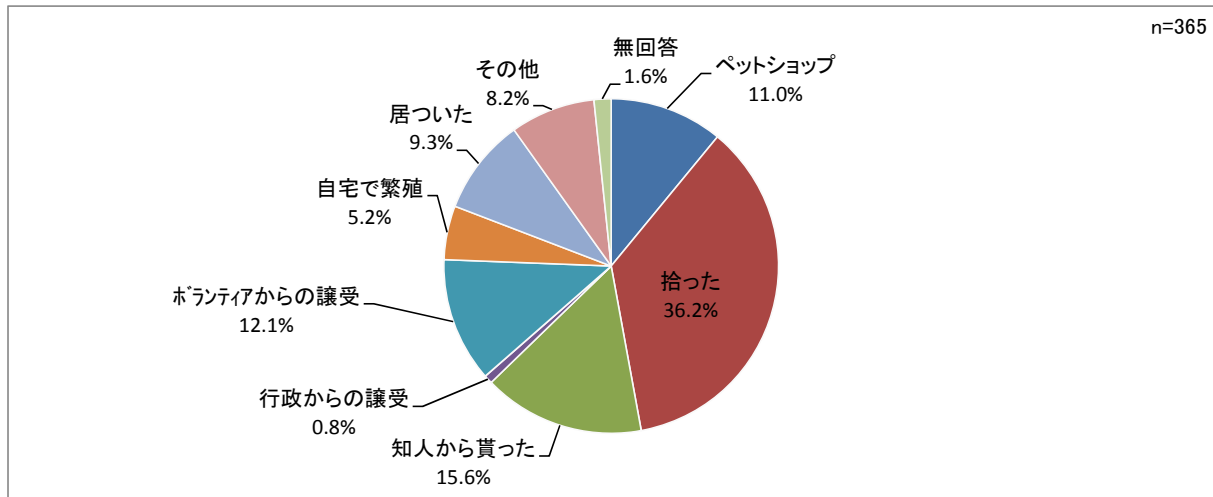


図 6.3-43 猫の入手方法（構成比）

7. 行政への要望の整理

合計 709 件の意見が寄せられた。意見の種類別に集計した件数は以下の通りである。

- ・ 飼い主責任・マナーに関する事 (406 件)
- ・ 規制強化に関する事 (214 件)
- ・ 飼い主のいない猫に関する事 (127 件)
- ・ 動物取扱業者に関する事 (31 件)
- ・ (災害発生時における) 避難に関する事 (9 件)
- ・ 殺処分ゼロに関する事 (41 件)
- ・ 譲渡に関する事 (13 件)
- ・ 犬猫以外の動物に関する事 (4 件)
- ・ その他 (204 件)

8. 解析

調査結果をもとに、解析を行った。また、過去に行った調査として平成9年度調査、平成18年度調査及び平成23年度調査の結果を引用し、可能な場合は比較を行った。平成9年度調査、平成18年度調査及び平成23年度調査の報告書は以下のとおりである。

- 『東京都における猫の飼育実態調査報告書』（平成10年3月,アジア航測株式会社）
- 『平成18年度犬及び猫の飼育実態調査報告書』（平成18年12月,株式会社プラトー研究所）
- 『東京都における犬の飼育実態調査の概要 参考（平成18年度）』（東京都福祉保健局）
- 『東京都における猫の飼育実態調査の概要（平成18年度）』（東京都福祉保健局）
- 『平成23年度犬及び猫の飼育実態調査報告書』（平成24年3月,アジア航測株式会社）

なお、解析精度をより高めるため、平成9年度、平成18年度、平成23年度の調査結果と比較を行うにあたり、各調査年度の直近の国勢調査による東京都の世帯数のデータを用いて、当時の結果を再評価した。合わせて、今回の調査結果と比較するため、無効データや無回答データも含めて比率を算出し直している。

8.1 犬の個体数推計

(1) 登録頭数からみた犬の飼育頭数推計

「6.3 犬及び猫の飼育に関するアンケート調査」から犬の登録率を求め、東京都における犬の登録数より飼育頭数の推計を行った。推計の結果は約55万頭となった。

表 8.1.2 登録頭数からみた犬の飼育頭数推計結果

アンケート調査結果				登録頭数からみた推定飼育頭数			
[a] 登録済	[b] 未登録	不明	無回答	合計	[c]登録頭数	[d]登録率 [a]/([a]+[b])	推定飼育頭数 [c]/[d]
391	22	3	8	424	518,216	94.7%	547,373.9
							約55万頭

[a] アンケート調査結果

[b] アンケート調査結果

[c] 登録頭数合計は「平成28年度 狂犬病予防・動物管理関係報告」における「1 登録・注射」表中の、「期末現在登録頭数」のうち島しょ部を除いた「区部」「市郡部」の合計値

(2) 注射済票交付総数からみた犬の飼育頭数推計

「6.3 犬及び猫の飼育に関するアンケート調査」から登録されている犬の狂犬病予防注射接種率と、登録率の2つの値を求め、東京都における犬の注射済票交付総数より飼育頭数の推計を行った。推計の結果は約42.6万頭となった。

表 8.1.1 注射済票交付総数からみた犬の飼育頭数推計結果（平成29年度）

	[a]東京都 登録頭数		[b]東京都 済票交付 総数	[c]アンケート結果 登録犬の 予防接種率	[d]済票から推定した 登録頭数	[e] アンケート結果 登録率	推定飼育頭数	
	頭数	増加率			[b]/[c]		頭数	平均頭数
不明・無回答除く	518,216	103.9%	380,383	94.6%	401,972.3	92.2%	435,978.6	426,389.4
不明・無回答含む				96.3%	395,126.5	94.8%	416,800.1	

[a] 「平成28年度 狂犬病予防・動物管理関係報告」における「1 登録・注射」表中の、「注射済票交付総数」のうち島しょ部を除いた「区部」「市郡部」の合計値

[b] 「平成28年度 狂犬病予防・動物管理関係報告」における「1 登録・注射」表中の、「期末現在登録頭数」のうち島しょ部を除いた「区部」「市郡部」の合計値

[c] アンケート調査結果

[e] アンケート調査結果

※登録を「している」「わからない・無回答」の回答数と予防接種を「している」の回答数で比率を算出

8.2 猫の個体数推計

「6.2 猫の個体生息数の推定を行うための現地調査」及び「6.3 犬及び猫の飼育に関するアンケート調査」の結果をもとに、東京都における猫の個体数の推計を行った。

その結果、平成 29 年度の東京都における猫の推定総数は約 117 万頭であった。

下図に平成 9 年度・平成 18 年度及び平成 23 年度とともに、推定結果を図示した。

平成 23 年度に比べ合計頭数が 6 万頭ほど増加しているが、これは飼い主のいない猫（図中 ■）の増加（4 万頭）による影響が大きいとの結果となった。

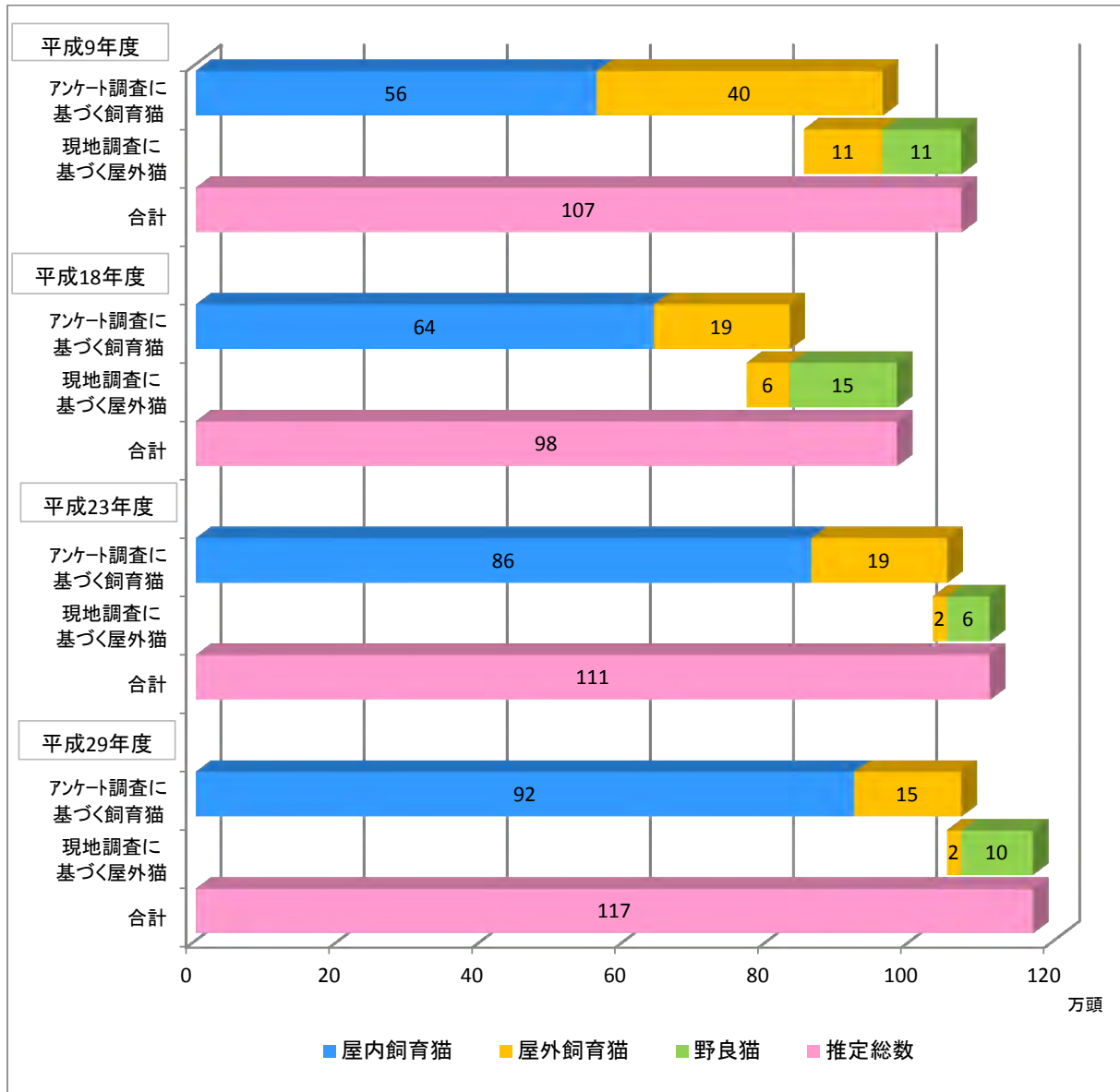


図 8.2-1 猫の推定個体数の推移

(1) 飼育猫の推定頭数

アンケート調査より得たデータをもとに、飼育猫の頭数を推計した結果、平成 29 年度アンケート調査における飼育猫の推定頭数は約 107 万頭となった。

表 8.2.1 飼育猫の推定頭数

	[a] 世帯数(軒)	[b] 飼育軒数比率	[c] 平均飼育頭数	推定頭数 [a]x[b]x[c]	合計推定頭数
一戸建て	1,975,613	12.0%	1.79	424,362	約107万頭
集合住宅	4,590,501	9.4%	1.50	647,261	
その他	12,100	6.3%	1.00	762	

[a] 平成 27 年国勢調査における「第 19-2 表 住居の種類・住宅の所有の関係(6 区分), 住宅の建て方(8 区分) 別一般世帯数, 一般世帯人員及び 1 世帯当たり人員(世帯が住んでいる階-特掲) - 全国※, 全国市部・郡部, 都道府県※, 都道府県市部・郡部, 市区町村※」の世帯数のうち島嶼部に該当する市町村を除いた値 (一戸建て:一戸建 集合住宅:長屋建+共同住宅 その他:その他)

[b] アンケート集計結果

[c] アンケート集計結果

(2) 屋外飼育猫・屋内飼育猫の推定頭数

アンケート調査より得たデータをもとに、屋外飼育猫及び屋内飼育猫の頭数を推計した。その結果、平成 29 年度アンケート調査における屋外飼育猫数の推定頭数は約 15 万頭となり、屋内飼育猫数の推定頭数は約 92 万頭となった。

表 8.2.2 屋外飼育猫及び屋内飼育猫の推定頭数

	[a] 推定飼育頭数	[b] 屋外飼育率	[c] 推定屋外飼育頭数 [a]x[b]	推定屋内飼育頭数 [a]-[c]	合計推定屋外飼育頭数	合計推定屋内飼育頭数
一戸建て	424,362	26.5%	112,456	311,906	約15万頭	約92万頭
集合住宅	647,261	5.6%	36,247	611,014		
その他	762	0.0%	-	-		

[a] 「(1) 飼育猫の推定頭数」における算出結果

[b] アンケート集計結果

(3) 屋外猫の推定頭数

現地調査の結果より、屋外猫の推定頭数を推計した。

平成 29 年調査における東京都都市計画区域内における屋外猫は約 12 万頭との推計結果となった。

$$\begin{aligned} \text{屋外猫の推定頭数} &= \frac{\text{[a] 確認頭数}}{\text{[b] 調査面積(ha)}} \times \text{[c] 都市計画区域面積(ha)} \div \text{[d] 発見率} \\ \text{屋外猫の推定頭数} &= \frac{55}{152.3} \times 144,227.8 \div 0.43 \\ \text{屋外猫の推定頭数} &= 52,088.3 \div 0.43 \\ \text{屋外猫の推定頭数} &= 121,135.6 \div 12\text{万頭} \end{aligned}$$

[a] 現地調査結果

[b] 調査ルート面積の合計

[c] 「東京都統計年鑑 平成 20 年 1-4 都市計画の名称, 市街化区域・市街化調整区域, 用途地域,」における島しょ部を除いた都市計画区域面積

[d] 『東京都における猫の飼育実態調査報告書』(平成 10 年 3 月, アジア航測株式会社)にて実施された、補完調査結果に基づく値(同報告書, pp.138-139)

(4) 屋外猫の首輪率

「(6) 屋外猫中の屋外飼育猫の推定頭数」に必要な数値として、屋外猫の首輪率（首輪装着率）を算出した。屋外猫の首輪率とは、屋外猫首輪有（頭）の、屋外猫全体に対する割合を指す。算出は、現地調査にて得られたデータを用いて行った。

計算の結果、屋外猫の首輪率は9.8%であった。

表 8.2.3 屋外猫の首輪率（参考：過去の屋外猫の首輪率）

屋外猫		屋外猫首輪率 [a]/([a]+[b])	過去の屋外猫首輪率		
[a] 首輪有(頭)	[b] 首輪無(頭)		[c] H23	[d] H18	[e] H9
5	46	9.8%	13.0%	15.0%	25.0%

[a] 現地調査結果

[b] 現地調査結果

[c] 『東京都における犬及び猫の飼育実態調査の概要(平成23年度)』(東京都福祉保健局),p.23

[d] 『東京都における猫の飼育実態調査の概要(平成18年度)』(東京都福祉保健局),p.11

[e] 『東京都における猫の飼育実態調査報告書』(平成10年3月,アジア航測株式会社),p.142

(5) 屋外飼育猫の首輪率

屋外飼育猫の首輪率とは、屋外飼育猫首輪有（頭数）の、屋外飼育猫全体に対する割合を指す。アンケート調査にて得られたデータを用いて算出した結果、平成29年における屋外飼育猫の首輪率は50.6%となった。

表 8.2.4 屋外飼育猫の首輪率（参考：過去の屋外猫の首輪率）

屋外飼育猫		屋外飼育猫首輪率 [a]/([a]+[b])	過去の屋外飼育猫首輪率		
[a] 首輪有(頭)	[b] 首輪無(頭)		[c] H23	[d] H18	[e] H9
43	42	50.6%	45.2%	51.8%	51.5%

[a] アンケート調査結果

[b] アンケート調査結果

[c] 『東京都における犬及び猫の飼育実態調査の概要(平成23年度)』(東京都福祉保健局),p.23

[d] 『東京都における猫の飼育実態調査の概要(平成18年度)』(東京都福祉保健局),p.11

[e] 『東京都における猫の飼育実態調査の概要(平成18年度)』(東京都福祉保健局),pp.6-7

(6) 屋外猫中の屋外飼育猫の推定頭数

現地調査結果及びアンケート調査結果のデータを用いて、屋外飼育猫の推計を行った。

平成29年調査における東京都都市計画区域内における屋外猫中の屋外飼育猫は約2万頭との推計結果となった。

$$\begin{aligned}
 \text{H29 屋外飼育猫推定頭数(頭)} &= \frac{[\text{a}] \text{ 屋外飼育猫の推定頭数(頭)} \times [\text{b}] \text{ 屋外猫の首輪率}}{[\text{c}] \text{ 屋外飼育猫の首輪率}} \\
 &= \frac{121,136 \times 9.8\%}{50.0\%} \\
 &= 23,752.1 \quad \approx \quad 2\text{万頭}
 \end{aligned}$$

[a] 「8.2 (3) 屋外猫の推定頭数」における算出結果

[b] 「8.2 (4) 屋外猫の首輪率」における算出結果

[c] 「8.2 (5) 屋外飼育猫の首輪率」における算出結果

8.3 犬の飼育について

8.3.1 犬の飼育環境について

(1) 犬の飼育世帯率等の推移

犬の飼育世帯率は、平成 18 年度で 15.0%、平成 23 年度で 16.4%、平成 29 年度で 18.0% であり、平成 18 年度以降増加傾向であった。

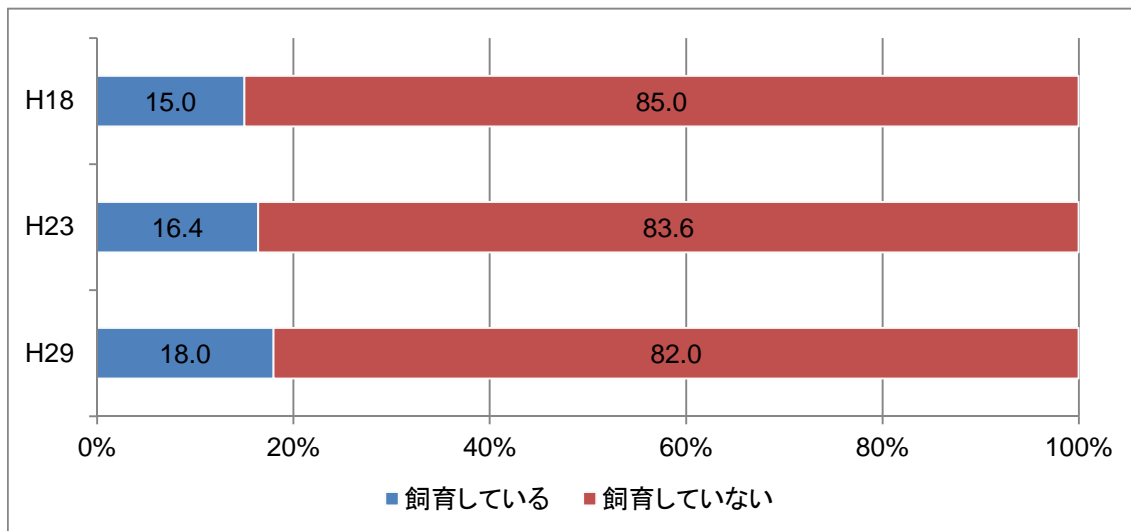


図 8.3-1 犬の飼育世帯率（構成比）の推移

(2) 住居形態と犬の飼育世帯率

平成 18 年度・平成 23 年度と住居形態別の犬飼育世帯率を比較すると、一戸建て世帯で犬飼育世帯率がやや増加し、集合住宅ではやや減少していた。また、平成 23 年度と平成 29 年度の住居形態別の犬飼育世帯率を比較すると、一戸建て、集合住宅ともに増加していた。

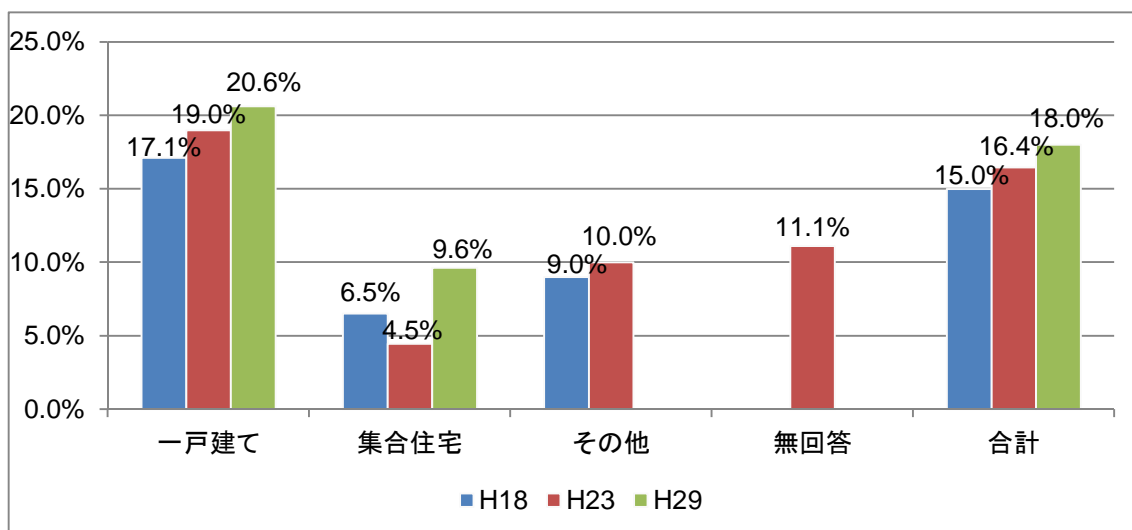


図 8.3-2 住居形態別に見た犬の飼育軒数比率の推移

(3) 住居形態と犬の飼育頭数

いずれの住居形態においても1頭のみ飼育は80%前後であり、20%前後が2頭以上の飼育を行っていた。

集合住宅での最大飼育頭数は3頭であり、一戸建てでは4頭飼育している世帯が3軒(1.0%)、5頭飼育している世帯が1軒(0.3%)あった。

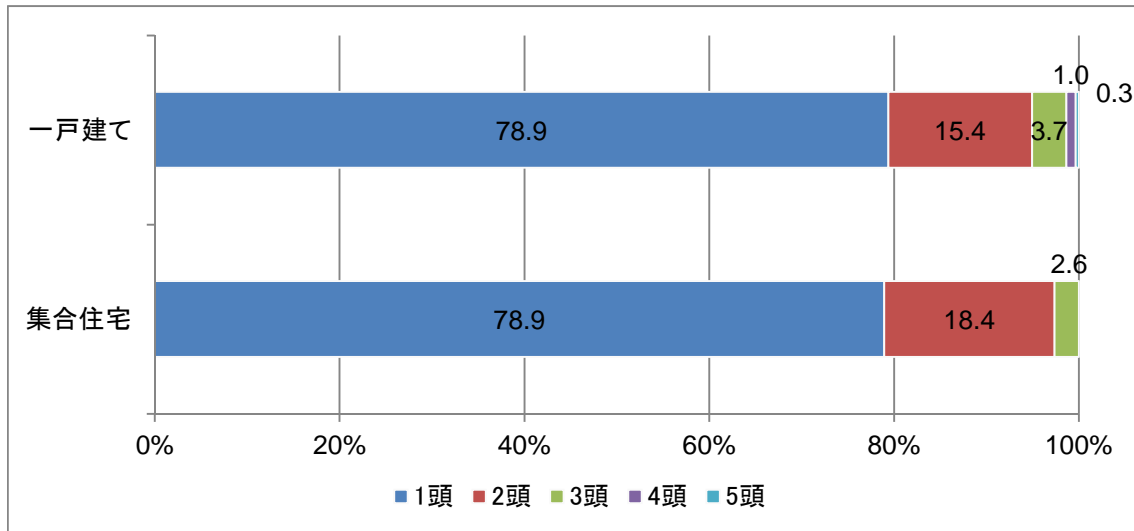


図 8.3-3 住居形態別の犬の飼育頭数別軒数（構成比）

(4) 住居形態と犬の平均飼育頭数の推移

住居形態別の犬の平均飼育頭数について、平成18年度、平成23年度及び平成29年度の調査結果を比較したところ、一戸建て、集合住宅ともにやや増加傾向がみられたが概ね横ばいであり、犬の平均飼育頭数については大きな変化は見られなかった。

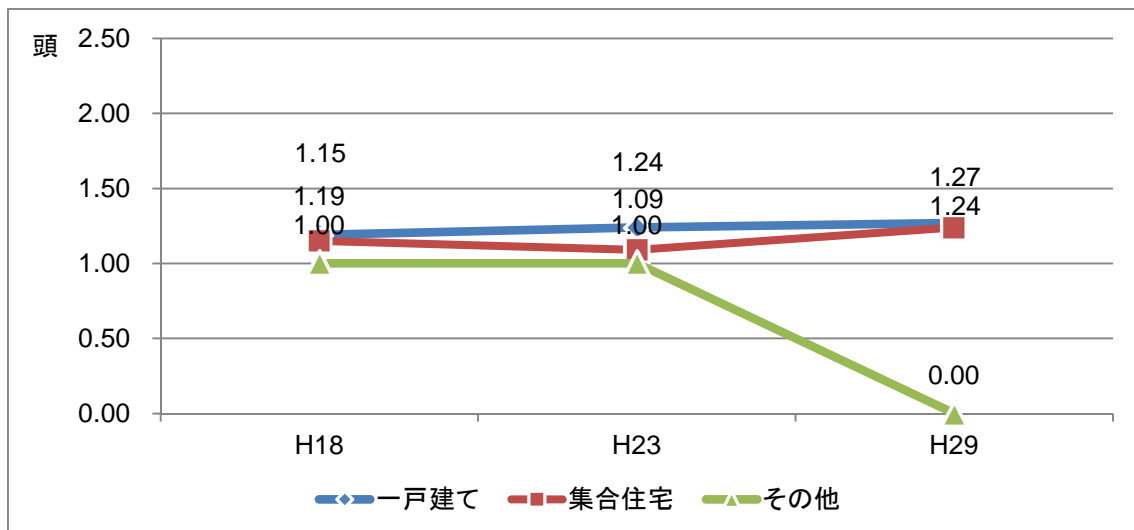


図 8.3-4 住居形態別の犬の平均飼育頭数の推移

(5) 住居形態と犬の飼育形態

一戸建て、集合住宅ともに、屋内で飼育されている犬が 90%を越えており、屋外のみで飼育されている犬は一戸建てで 4.0%、集合住宅で 6.4%であった。

屋内と屋外で飼育されている犬はいずれの住居形態でも持ち家のみであり、1軒を除いてすべて出入り管理であった。

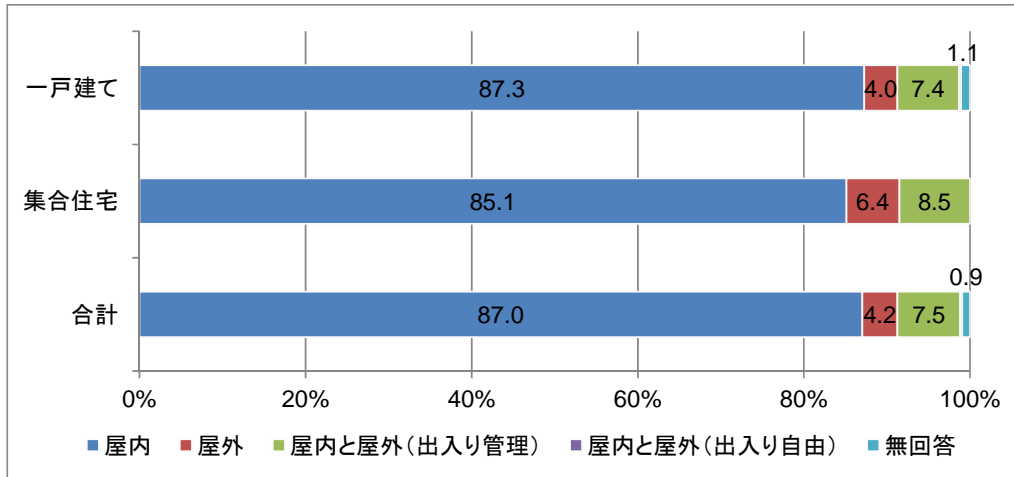


図 8.3-5 住居形態別の犬の飼育形態（構成比）

(6) 集合住宅の犬飼育許可と犬飼育

犬飼育を「許可されている」とした世帯のうち犬を飼っている世帯は 33 軒（22.1%）であり、犬飼育を「許可されていない」とした世帯のうち犬を飼っている世帯は 4 軒（2.0%）であった。

また、「許可されていない」とした世帯のうちの 1.5%、「知らない」とした世帯のうちの 2.4%でも、犬を飼っている世帯があった。

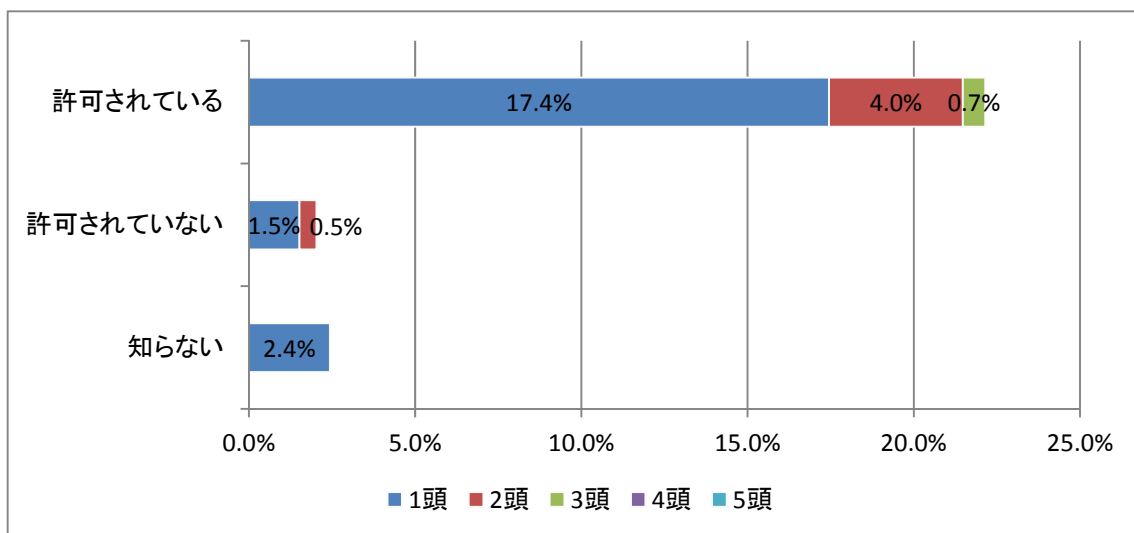


図 8.3-6 集合住宅の犬飼育許可と犬の飼育軒数（構成比）

(7) 世帯構成と犬の飼育世帯率

世帯構成別の犬飼育世帯における頭数内訳を見ると、いずれの世帯構成においても「1頭」飼育が最も多く、70～85%を占めた。

2頭以上の飼育は「単独世帯（一人暮らし）」が30.0%と最も多く、5頭飼育も1件（3.3%）見られた。

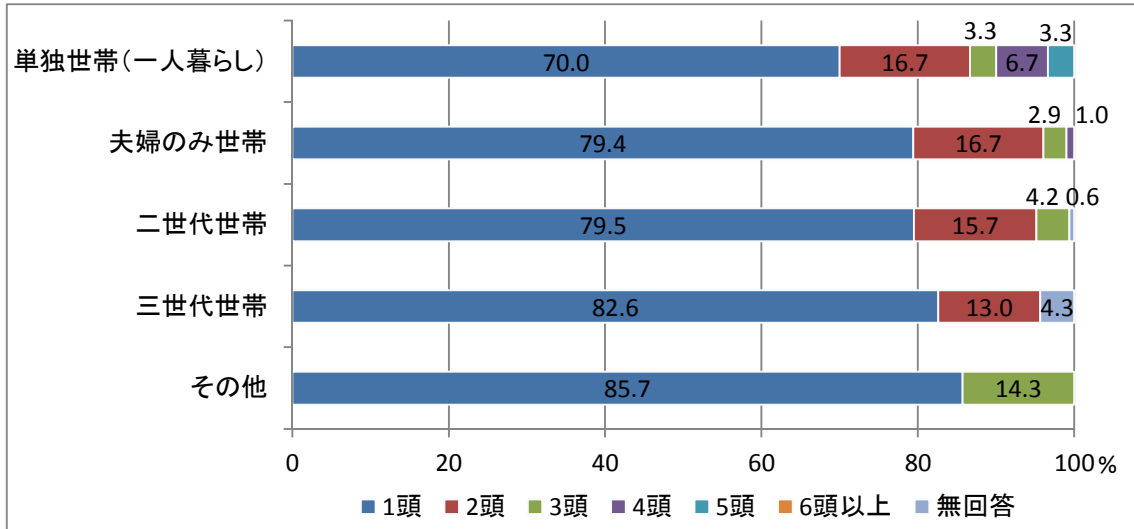


図 8.3-7 世帯構成別の犬の飼育頭数別軒数（構成比）

8.3.2 犬の適正飼養について

(1) 犬の入手方法の推移

犬の入手方法について、平成 18 年度、平成 23 年度及び平成 29 年度の調査結果を比較したところ、調査を行ったすべての年度において最も多い入手方法は「ペットショップで購入した」であり、その比率は 58.2%（平成 18 年度）から 50.3%（平成 23 年度）に減少したが、64.2%（平成 29 年度）へと増加した。

「行政からの譲渡」は平成 23 年度には 1.7%見られたが、平成 29 年度は 0.2%へと減少した。また、「ボランティア団体からの譲渡」は、平成 23 年度以降、約 7%で推移していた。

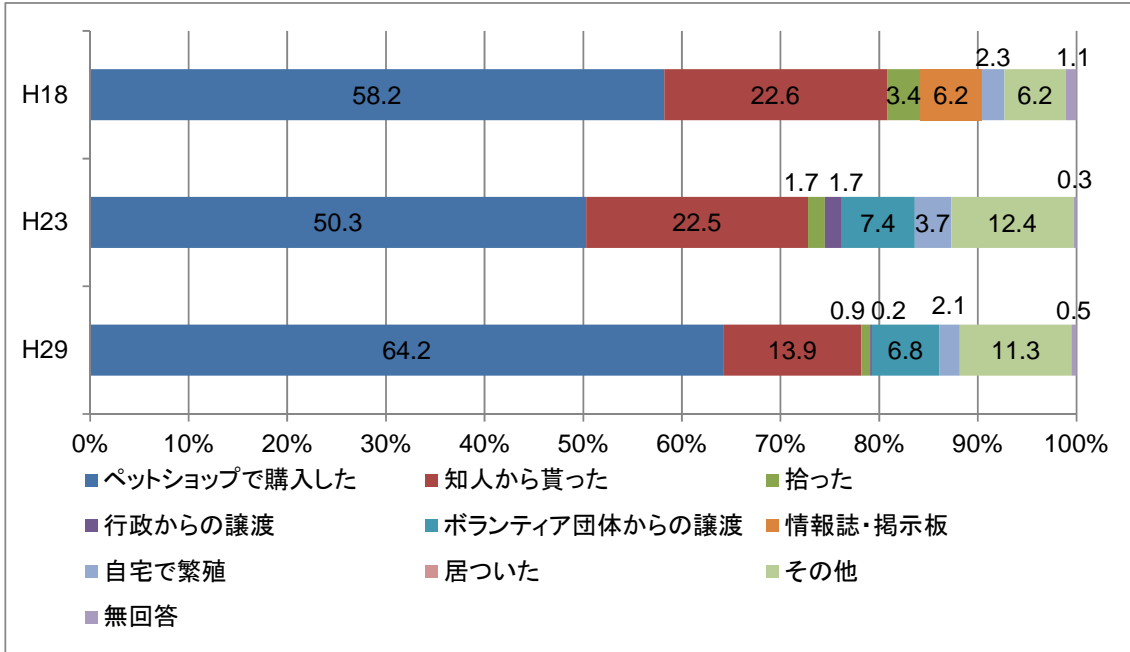


図 8.3-8 犬の入手方法（構成比）の推移

(2) 犬の身元表示の推移

犬の身元表示方法について、平成 18 年度、平成 23 年度及び平成 29 年度の調査結果を比較したところ、「外見上判断できる身元表示あり」は、21.5%（平成 18 年度）から 50.7%（平成 23 年度）に増加していたが、平成 29 年度は 43.4%とやや減少した。

「何もしていない」は、平成 29 年度には 34.9%へと減少し、これに変わって「マイクロチップのみ」を入れている犬が増加した。

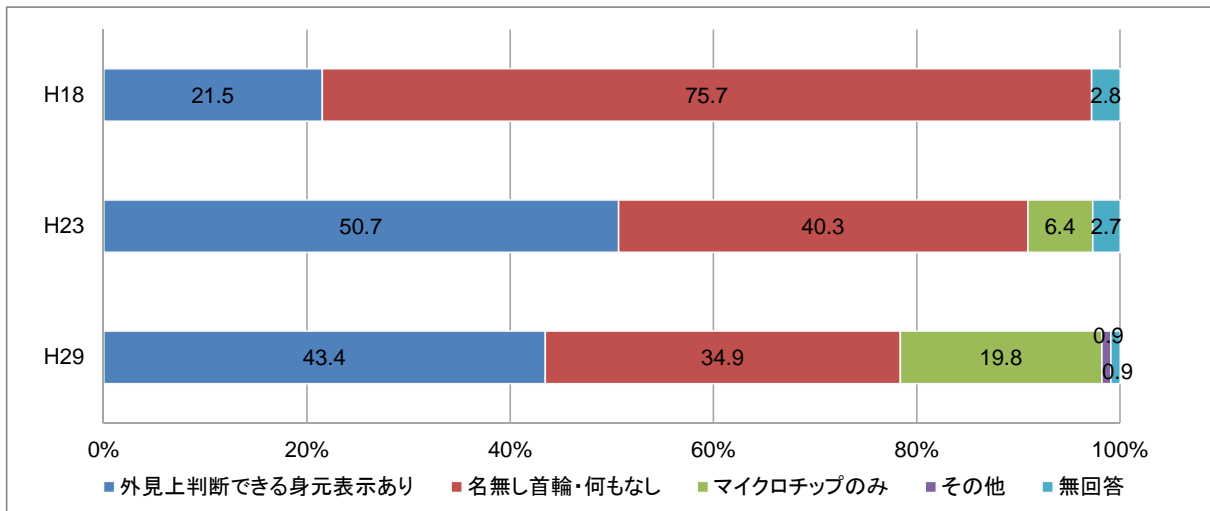


図 8.3-9 犬の身元表示有無（構成比）の推移

(3) 飼育形態と身元表示

「屋外」で飼育されている犬では鑑札・注射済票のいずれか又は両方を付けている犬が60%を占めており、「屋内と屋外（出入り管理）」の犬でも連絡先のある鑑札・注射済票・連絡先のある首輪を装着している個体が50%を占めた。

「マイクロチップのみ」を入れている犬は「屋外」「屋内と屋外（出入り管理）」でも10～15%ほど見られたが、「屋内」飼育が最も多く、20%を超えた。

いずれの飼育形態においても、30%程度の犬が身元表示を何もしていなかった。

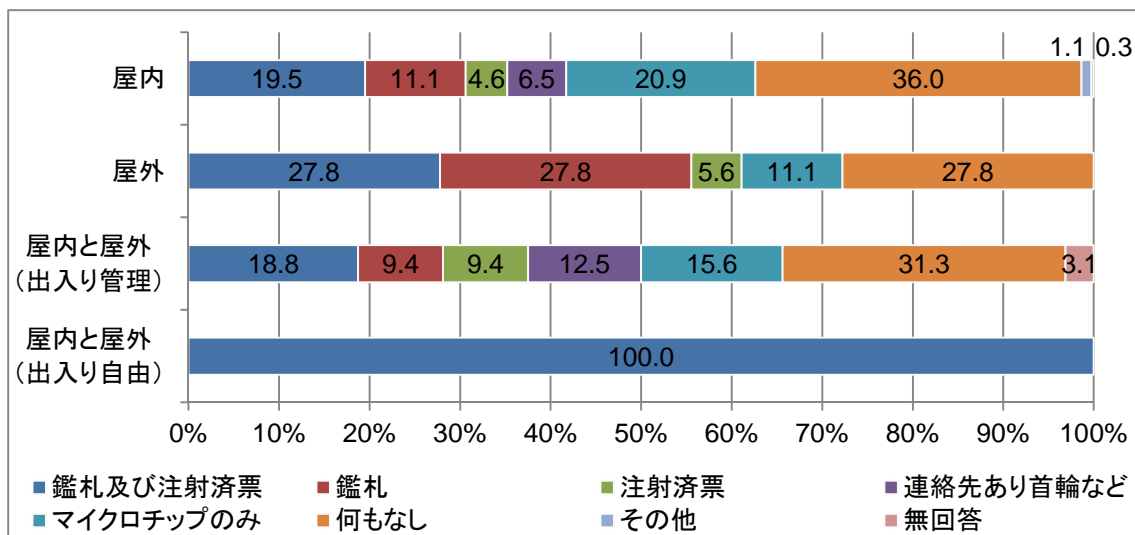


図 8.3-10 飼育形態別の身元表示方法（構成比）

(4) 犬の登録率の推移

犬の登録率について、平成18年度、平成23年度及び平成29年度の調査結果を比較したところ、犬の登録を「している」は概ね90%程度で推移しており、平成29年度は3か年で最も高い92.2%であった。

犬の登録を「していない」は年々減少しており、平成29年度は3か年で最も低い5.2%であった。

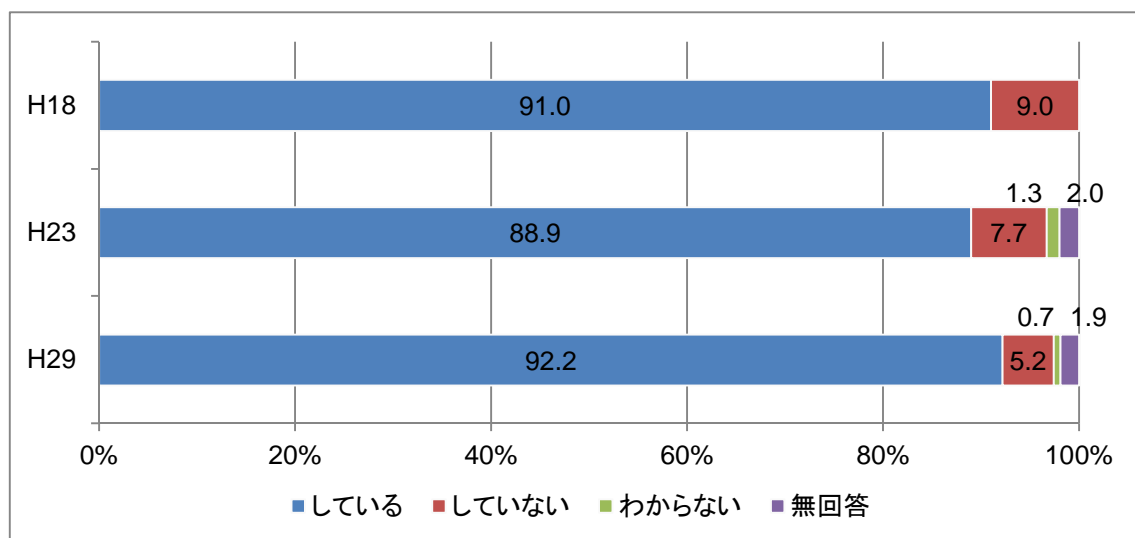


図 8.3-11 犬の登録率（構成比）の推移

(5) 犬の狂犬病予防注射接種率の推移

犬の狂犬病予防注射接種率について、平成 18 年度、平成 23 年度及び平成 29 年度の調査結果を比較したところ、犬の狂犬病予防注射接種を「している」は概ね 90%程度で推移しており、平成 29 年度は 3 か年で最も高い 91.7%であった。

犬の狂犬病予防注射接種を「していない」は増減を繰り返しているが、平成 29 年度は 3 か年で最も低い 5.4%であった。

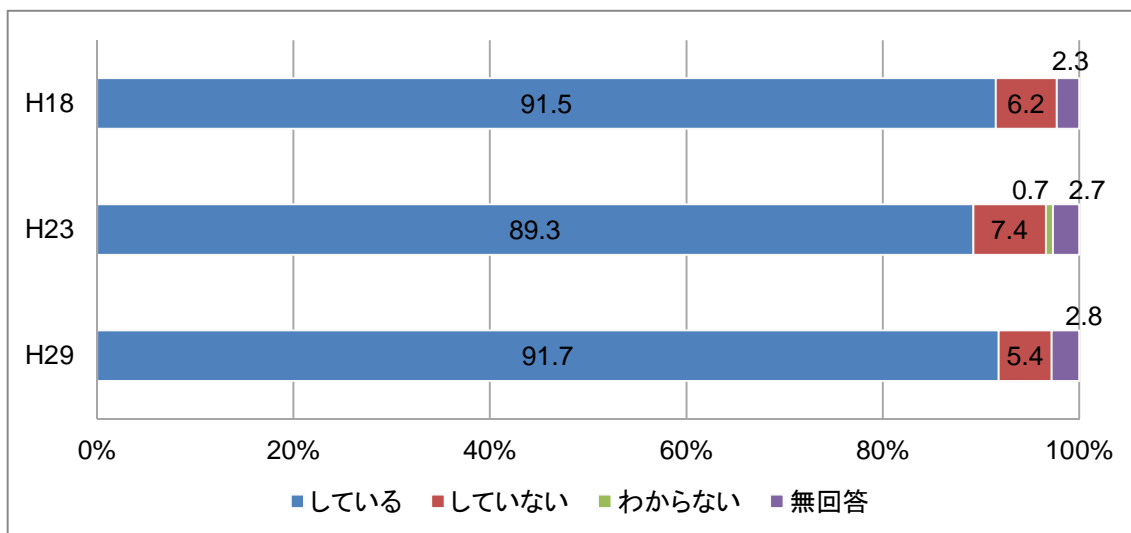


図 8.3-12 犬の狂犬病予防注射接種率（構成比）の推移

(6) 犬の登録と狂犬病予防注射

登録も予防注射も行っている犬は 87.3%であり、登録のみを行っている犬は 4.9%、予防注射のみを行っている犬は 4.5%であった。

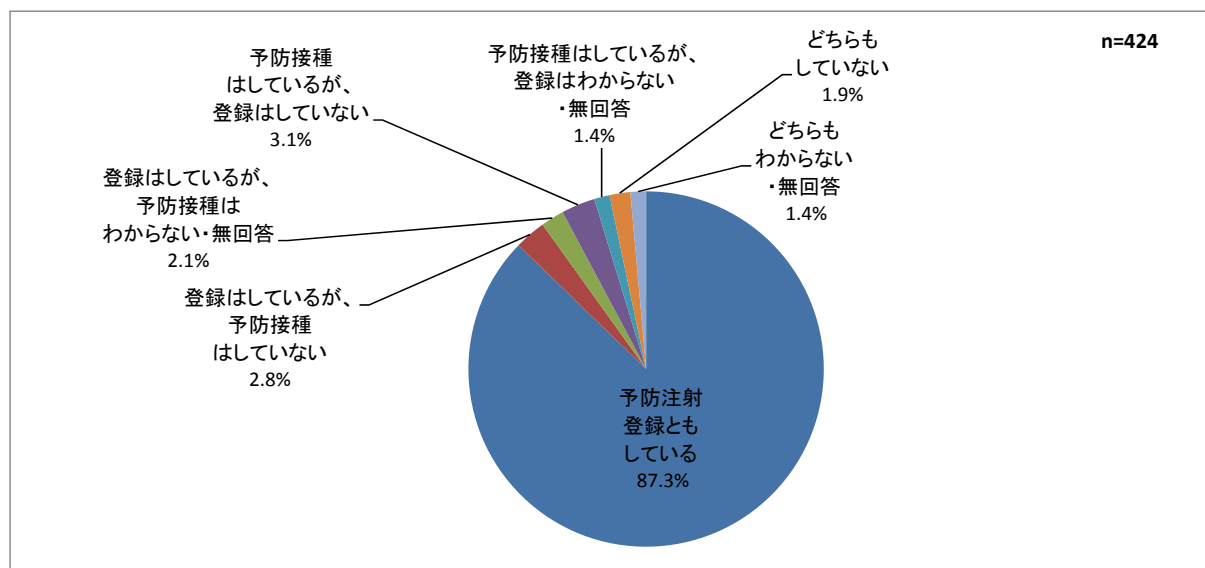


図 8.3-13 犬の登録と狂犬病予防注射接種の関係（構成比）

(7) 犬の不妊・去勢処置の推移

犬の不妊・去勢処置率について、平成 18 年度、平成 23 年度及び平成 29 年度の調査結果を比較したところ、メス犬の不妊処置率は、平成 18 年度及び平成 23 年度では 60%弱で推移していたが、平成 29 年度には約 75%へと増加した。

オス犬の去勢処置率は、平成 18 年度及び平成 23 年度では 50%前後で推移していたが、平成 29 年度には約 65%へと増加した。

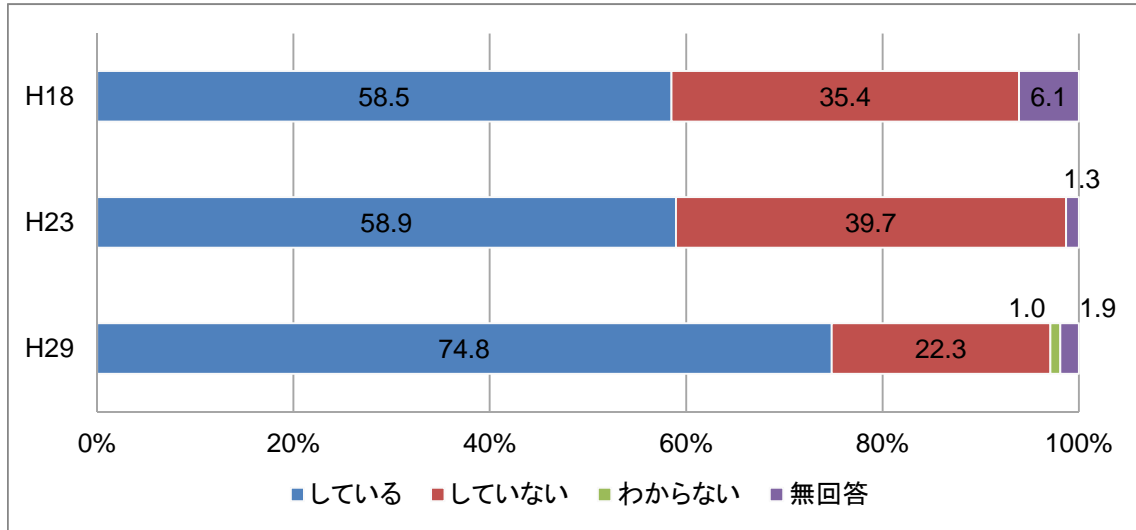


図 8.3-14 メス犬の不妊処置（構成比）の推移

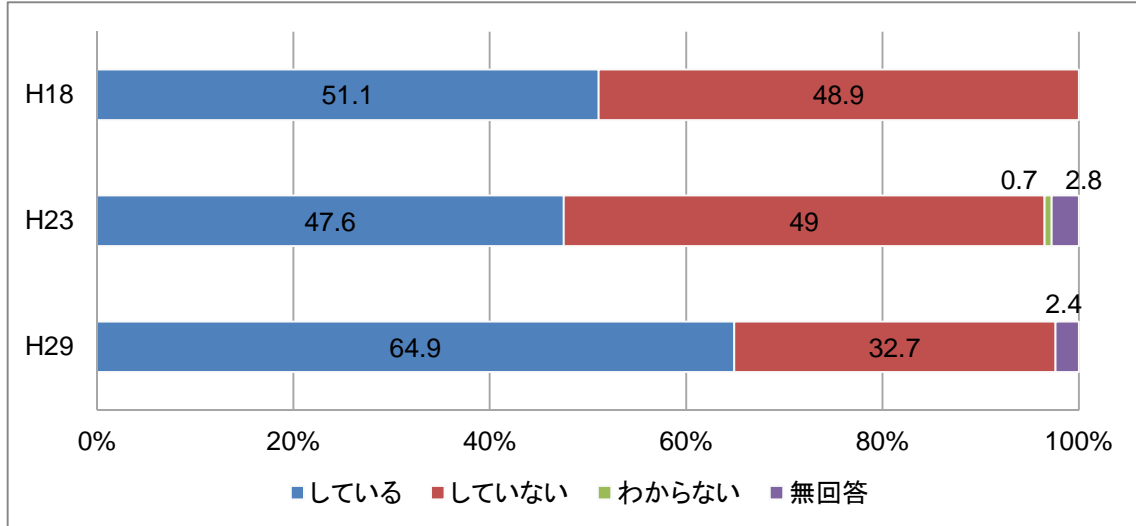


図 8.3-15 オス犬の去勢処置（構成比）の推移

(8) 犬の散歩時のリードの装着の推移

リードを付けて散歩するという世帯が約 93%いるため、犬散歩時のリード装着は徹底されるようになっているが、リードをつけないという世帯も少数いる。

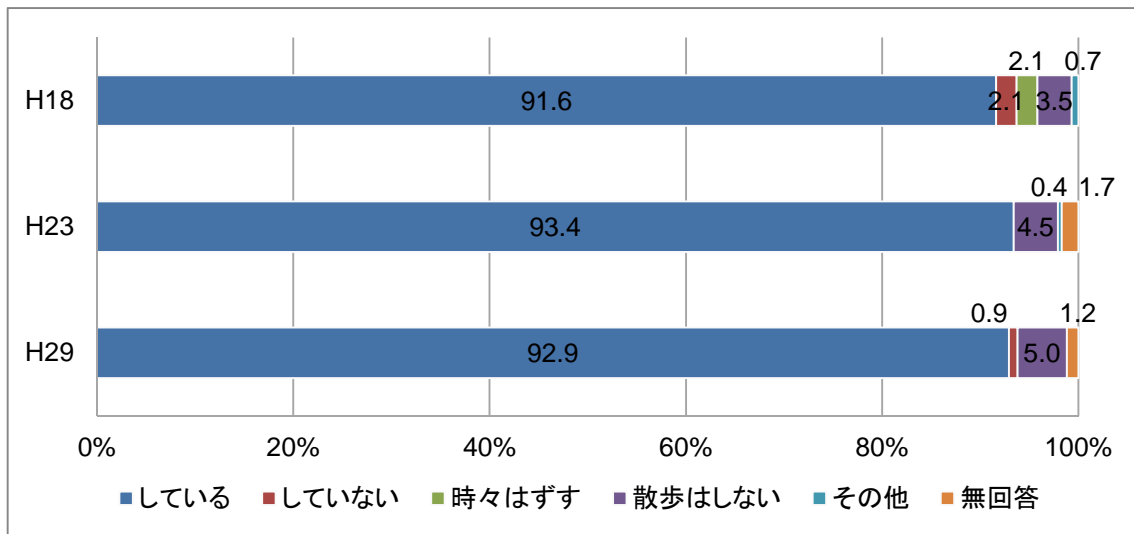


図 8.3-16 散歩時のリード装着（構成比）の推移

(9) 犬の飼育形態の推移

犬の飼育形態について、平成 18 年度、平成 23 年度及び平成 29 年度の調査結果を比較したところ、平成 18 年度から平成 23 年度にかけて「屋内」飼育が増加していたが、平成 29 年度にかけては 85%後半代でほぼ横ばいであった。

平成 23 年度から平成 29 年度では「屋外」飼育が 9.1%から 4.2%へと減少し、「屋内と屋外」での飼育が 3.7%から 7.7%へと増加した。

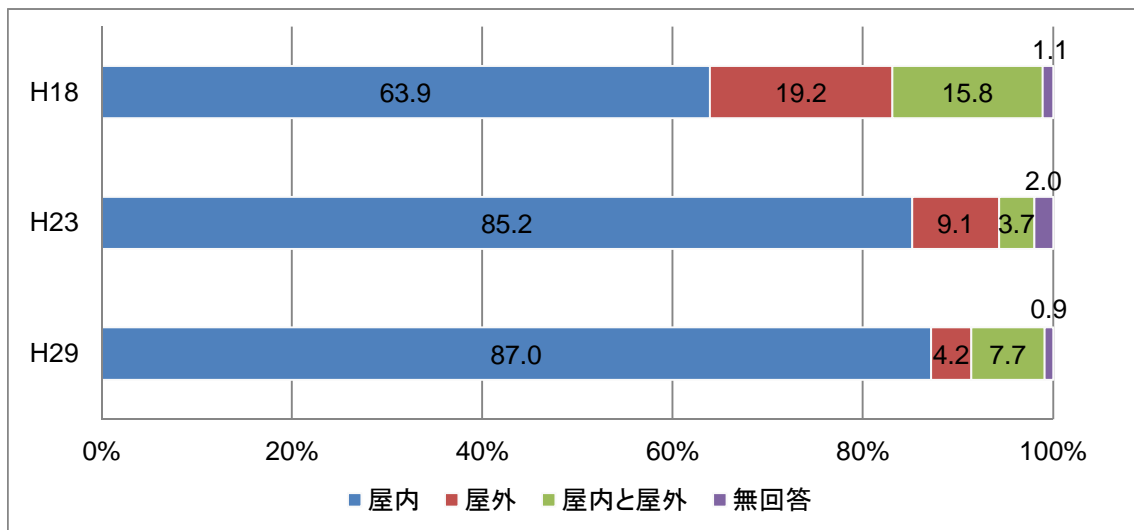


図 8.3-17 犬の飼育形態（構成比）の推移

(10) 犬の飼育形態とトイレに関するしつけの推移

「屋内」及び「屋内と屋外」飼育では、敷地内のみで排泄する犬の割合が、平成 23 年度から平成 29 年度にかけてそれぞれ 35.4%から 38.2%、9.1%から 15.2%へとわずかながら増加した。

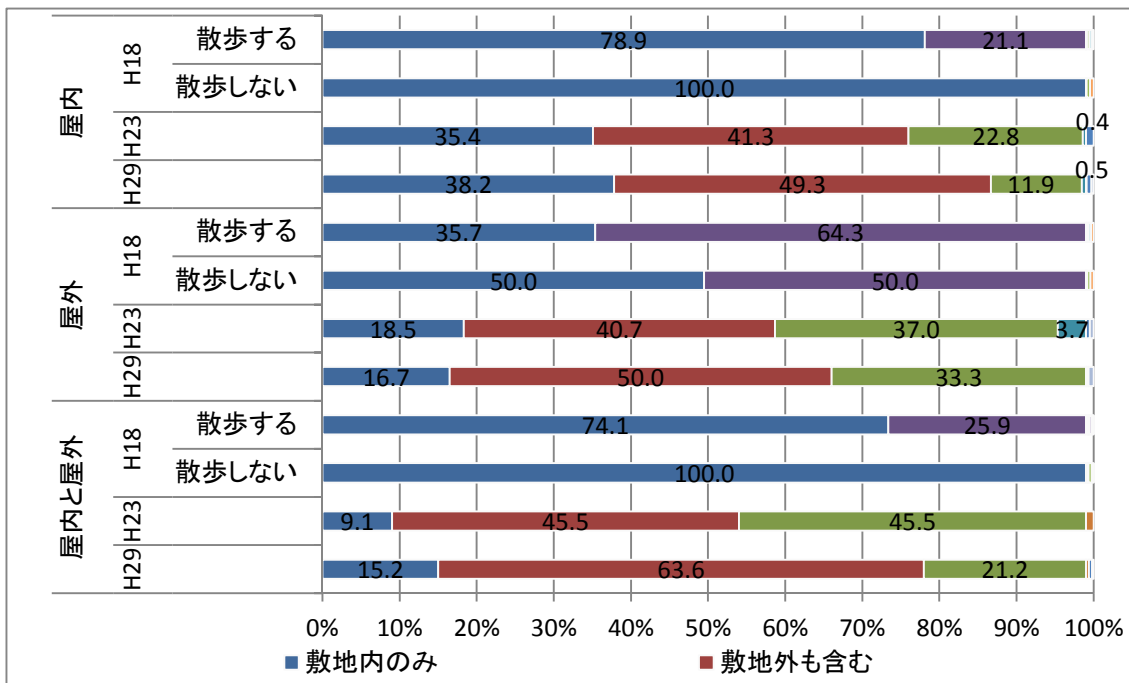


図 8.3-18 飼育形態とトイレに関するしつけ（構成比）の推移

(11) 散歩時の糞処理の推移

犬の散歩時の糞処理について、「必ず持ち帰る」は年々増加しており、平成 29 年度は 93.7%であった。

平成 18 年度には見られた「持ち帰らない」という回答は平成 23 年以降はなくなったが、「場所により持ち帰る」との回答は、平成 23 年度以降 1%強で推移していた。

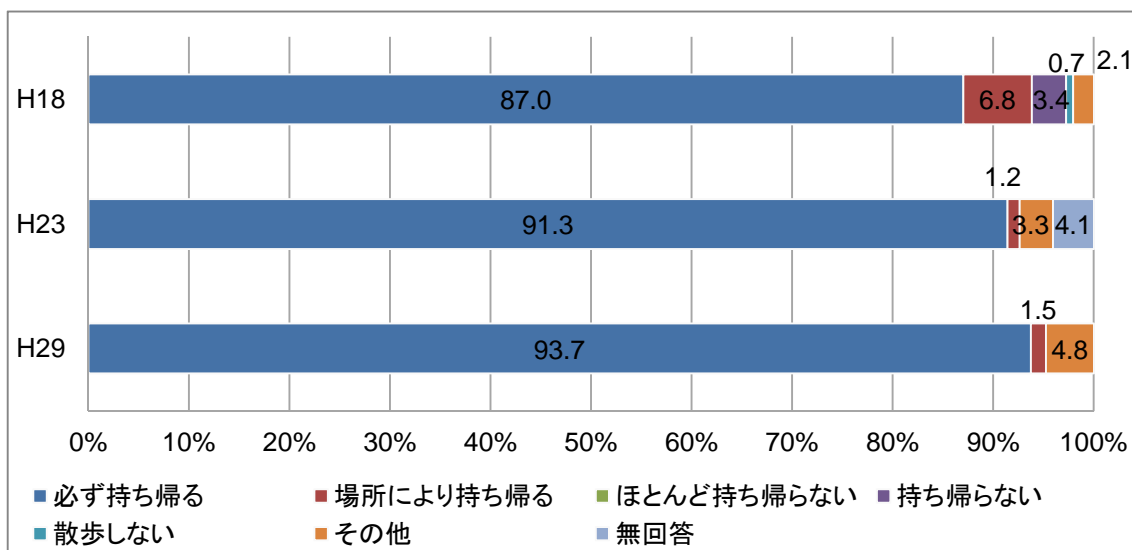


図 8.3-19 犬の散歩時の糞処理（構成比）の推移

(12) 犬の餌代の推移

犬の餌代（年額）について、平成 18 年度、平成 23 年度及び平成 29 年度の調査結果を比較したところ、各々の餌代比率を比較すると特に大きな変化はなく、犬飼育世帯の 57.7% が年間 1 万円から 6 万円未満の餌代を費やしている。

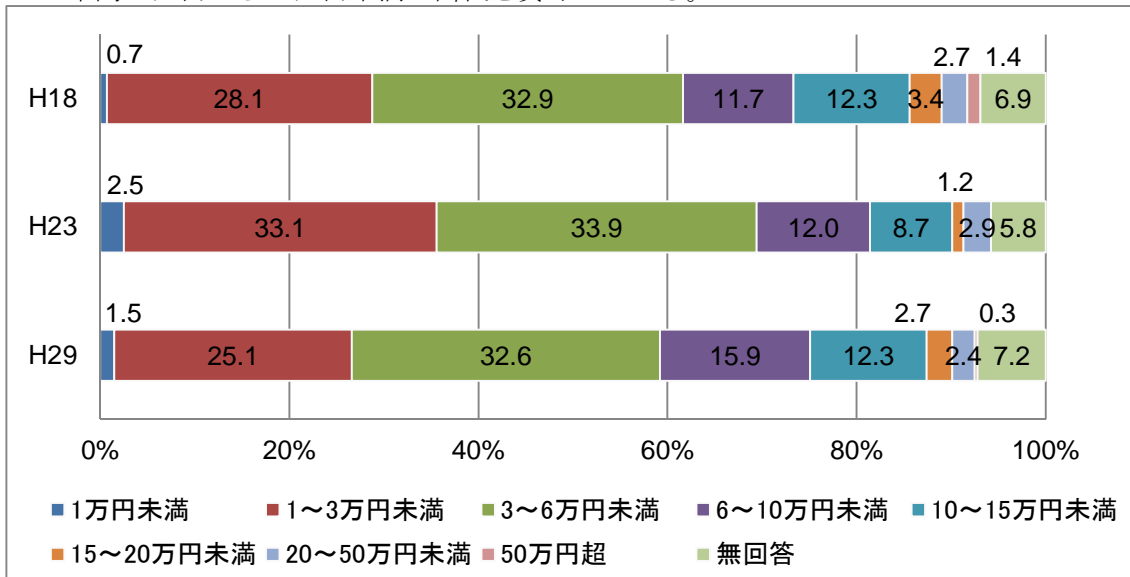


図 8.3-20 犬の餌代（年額・構成比）の推移

(13) 犬の医療費の推移

犬の医療費（年額）について、平成 18 年度、平成 23 年度及び平成 29 年度の調査結果を比較したところ、全体の構成比に特に大きな変化はなく、犬飼育世帯の 60%程度が 1 万円から 6 万円未満の医療費を費やしている。

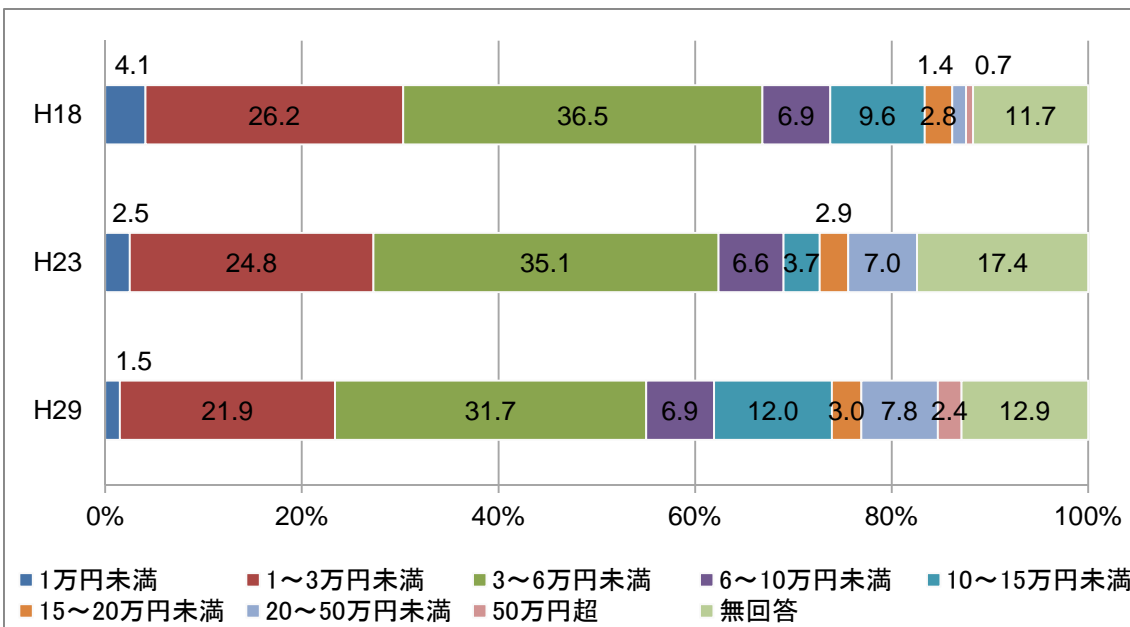


図 8.3-21 犬の医療費（年額・構成比）の推移

8.4 猫の飼育について

8.4.1 猫の飼育環境について

(1) 猫の飼育世帯率等の推移

猫の飼育世帯率等について、平成9年度では13.4%であったが、平成18年度以降は11%台で推移していた。

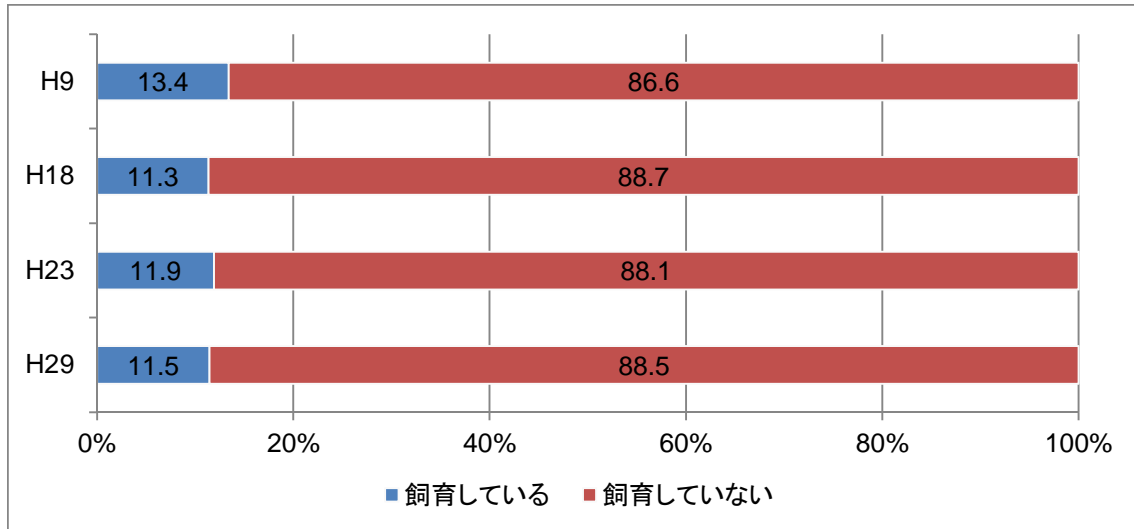


図 8.4-1 猫の飼育世帯率（構成比）の推移

(2) 住居形態と猫の飼育世帯率の推移

住居形態と猫の飼育世帯率について、一戸建て世帯では平成18年度以降12%程度でほぼ横ばいとなっており、集合住宅では同じく9%程度の横ばいとなっていた。

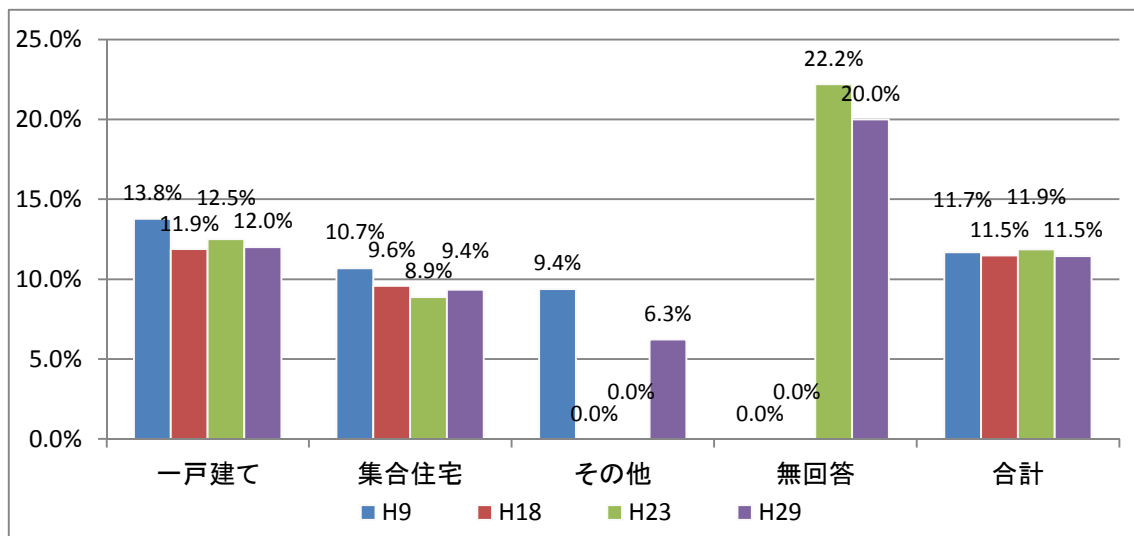


図 8.4-2 住居形態別にみた猫の飼育軒数比率の推移

(3) 住居形態と猫の飼育頭数

「一戸建て」と「集合住宅」では、集合住宅のほうが1頭飼育の傾向が高かった。
 2頭以上の飼育は集合住宅にも見られたが、特に一戸建ての持ち家に多く見られ、3頭以上の飼育が14.1%を占めた。

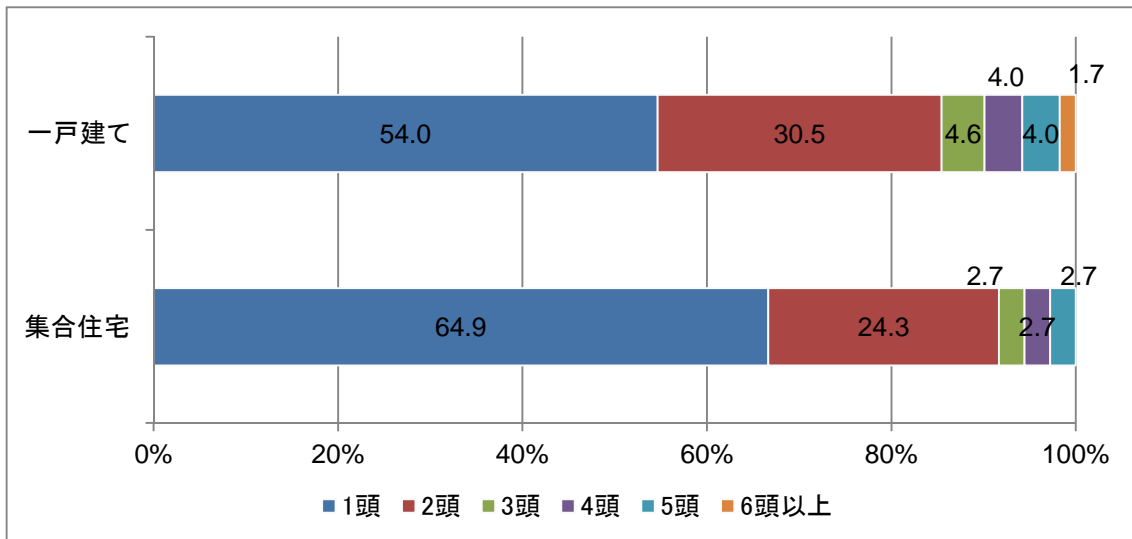


図 8.4-3 住居形態別の猫の飼育頭数別軒数（構成比）

(4) 住居形態と猫の平均飼育頭数の推移

住居形態別の猫の平均飼育頭数について、平成9年度、平成18年度、平成23年度及び平成29年度の調査結果を比較すると、一戸建てでは猫の平均飼育頭数は平成29年度は1.79頭で平成9年度以降ほぼ横ばいとなっており、集合住宅では平成9年度の1.71頭から平成18年度に1.27頭となったもののその後1.59頭へ増加し、平成29年度は1.50頭と、平成9年度からみると全体に減少傾向であった。

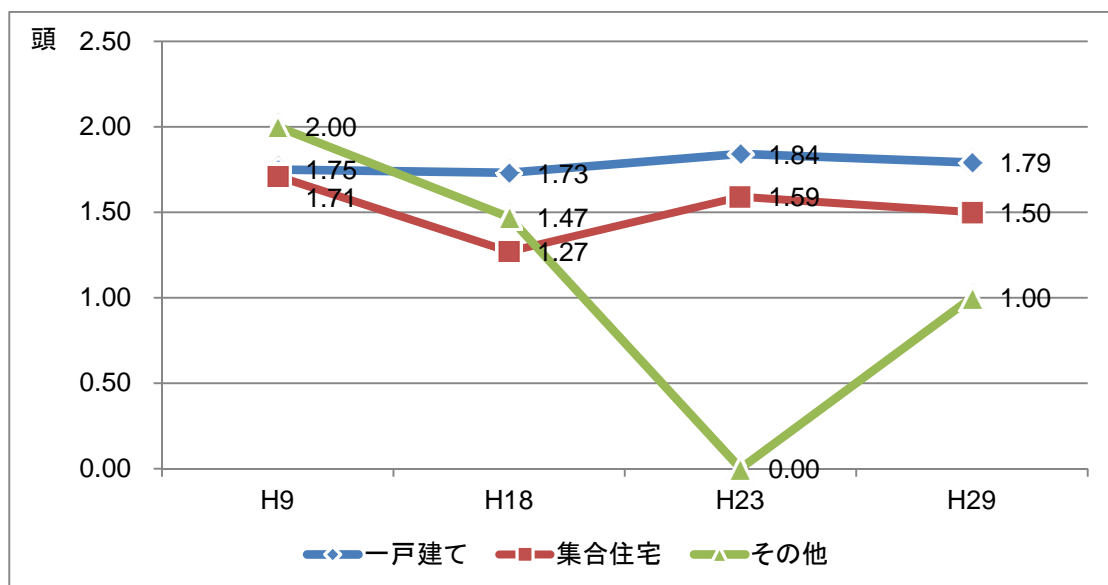


図 8.4-4 住居形態別の猫の平均飼育頭数の推移

(5) 住居形態と猫の飼育形態

一戸建て、集合住宅ともに、屋内で飼育されている猫が90%以上であった。集合住宅においては、「屋外」のみで飼育されている猫はいなかった。持ち家・賃貸で見ると、一戸建て・集合住宅とも賃貸のほうが「屋内」での飼育が多かった。

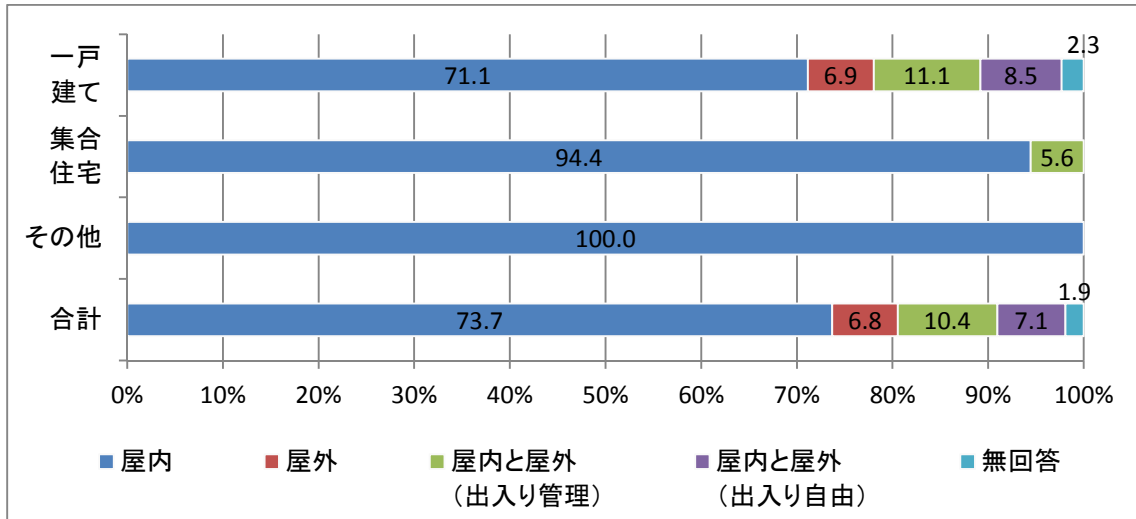


図 8.4-5 住居形態別の猫の飼育形態

(6) 集合住宅の猫飼育許可と猫飼育

猫飼育を「許可されている」とした世帯のうち猫を飼っている世帯は28軒(19.2%)であり、猫飼育を「許可されていない」とした世帯のうち猫を飼っている世帯は5軒(2.5%)であった。また、「わからない」とした世帯においても、7.3%で猫の飼育がみられた。

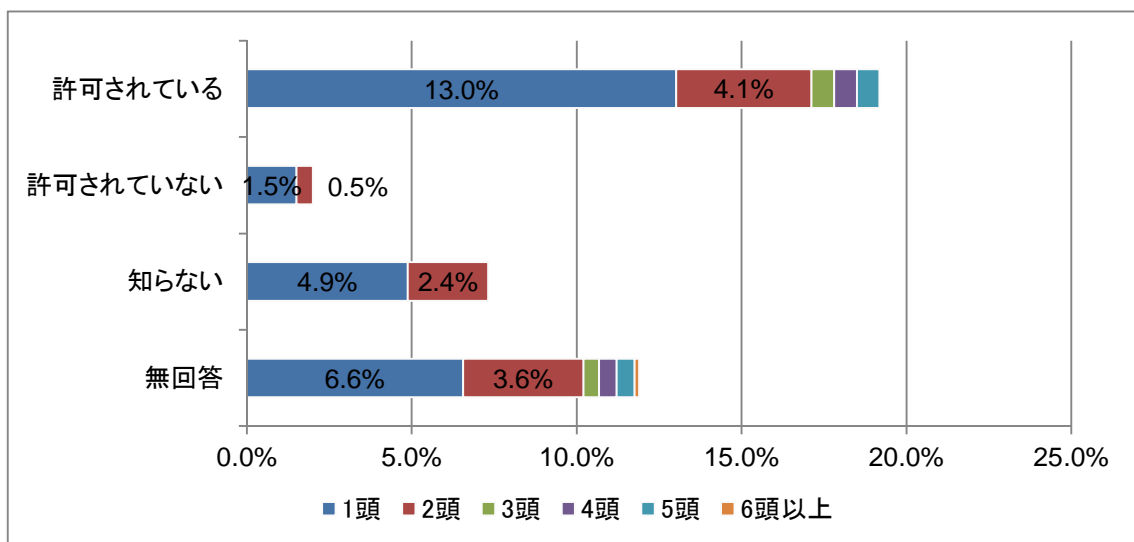


図 8.4-6 集合住宅の猫飼育許可と猫飼育頭数（構成比）

(7) 世帯構成と猫の飼育世帯率

世帯構成別の猫飼育世帯における頭数内訳を見ると、「単独世帯（一人暮らし）」「夫婦のみ世帯」「二世帯世帯」においては「1頭」飼育が最も多く 60%弱を占めたが、「三世帯世帯」では2頭飼育が60.0%で最も多かった。

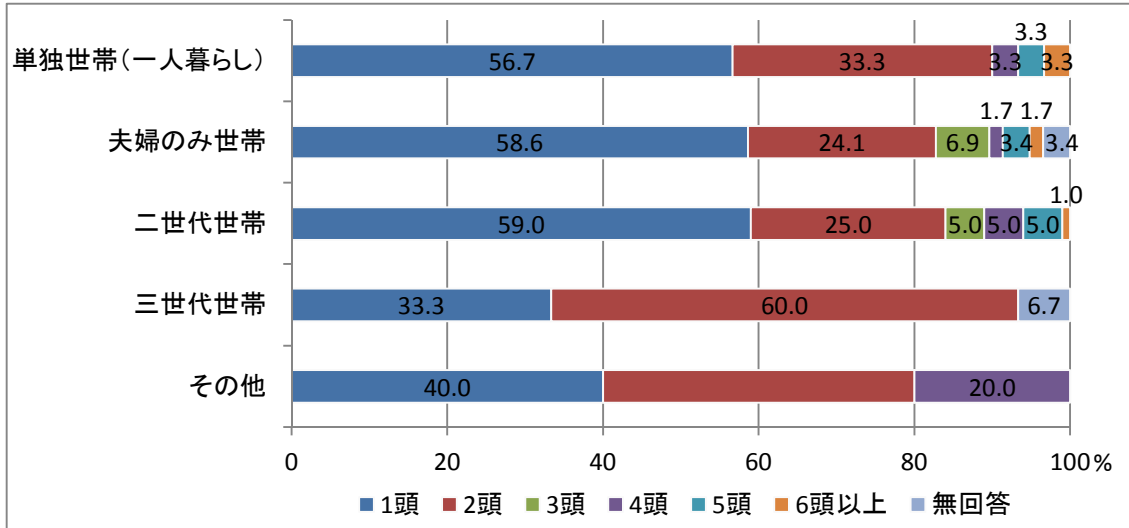


図 8.4-7 世帯構成別の猫の飼育頭数別軒数（構成比）

8.4.2 猫の適正飼養について

(1) 猫の入手方法の推移

猫の入手方法について、平成 18 年度、平成 23 年度及び平成 29 年度の調査結果を比較したところ、「知人から貰った」は年々減少しており、「拾った」との回答が増加していた。

「行政からの譲渡」は平成 18 年度には 0 であったが、平成 23 年度は 0.3%、平成 29 年度は 0.8%と、わずかだが増加していた。「ボランティア団体からの譲渡」は平成 18 年度には 0 であったが、平成 23 年度は 5.4%、平成 29 年度は 12.1%と、増加していた。

全体として、「貰った」「譲渡」「拾った」などの入手方法が多数を占め、「ペットショップで購入」は少数であった。

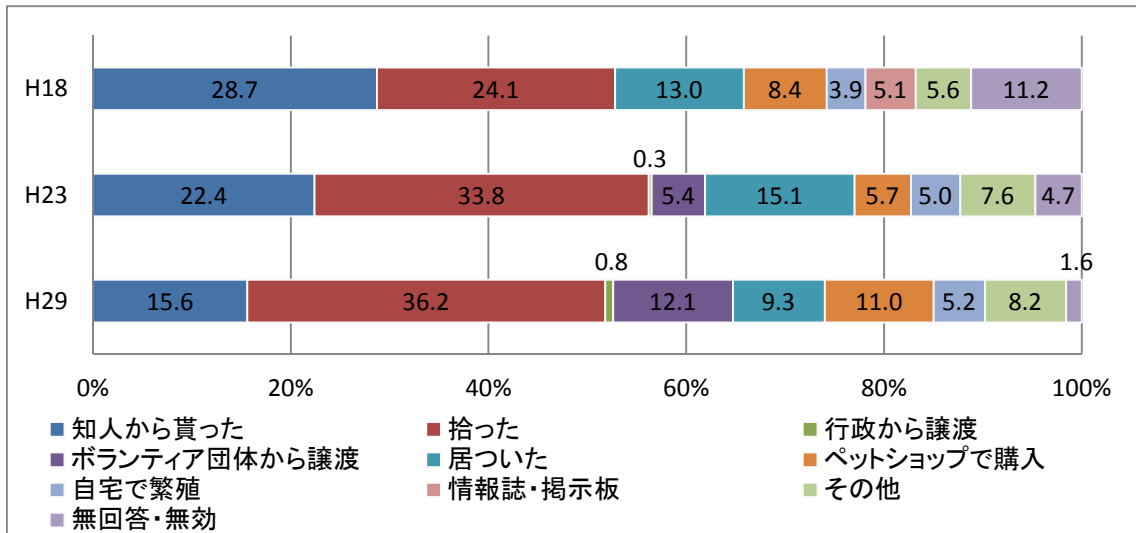


図 8.4-8 猫の入手方法（構成比）の推移

(2) 猫の身元表示の推移

猫の身元表示方法について、平成 18 年度、平成 23 年度及び平成 29 年度の調査結果を比較したところ、連絡先のある首輪・迷子札など「外見上判断できる身元表示あり」は、18.0%（平成 18 年度）から 14.5%（平成 23 年度）、7.1%（平成 29 年度）と減少していたが、「首輪などはつけていない」の割合は概ね 50%で推移していた。

「外見上判断できる身元表示あり」が減少した代わりに、「マイクロチップを入れている」が大きく増加していた。

「連絡先はないが、首輪をつけている」は、平成 23 年度以降 28%程度で横ばいであった。

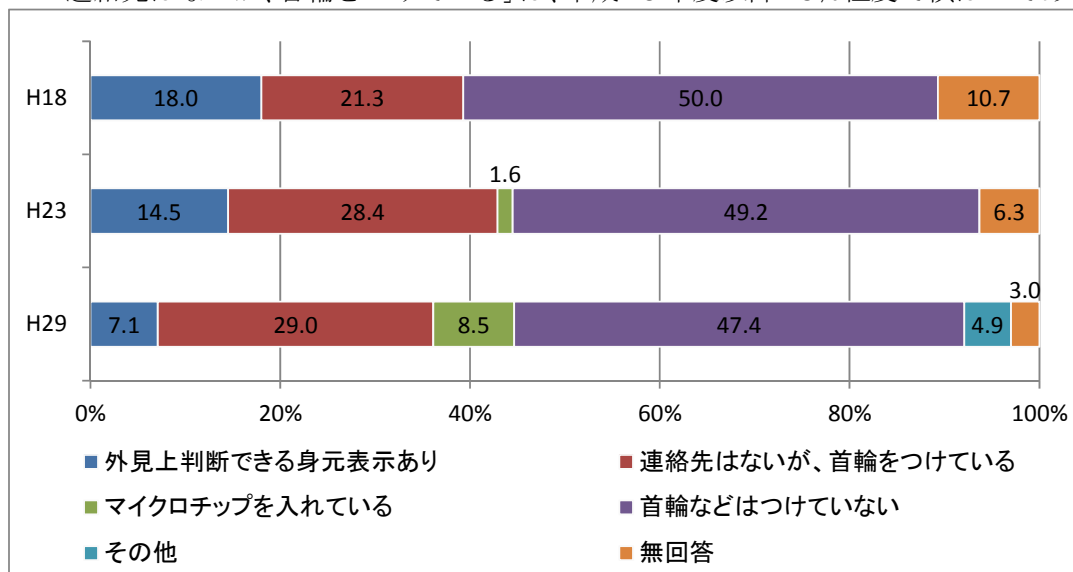


図 8.4-9 猫の身元表示有無（構成比）の推移

(3) 飼育形態と猫の身元表示

「屋外」で飼育されている猫のうち連絡先のある首輪等を装着している猫はおらず、84.0%は身元表示がされていなかった。「屋内」で飼育されている猫または「屋内と屋外」を出入りしている猫でも、連絡先のある首輪等により身元表示されている猫は16%以下であった。「屋内と屋外」を出入りしている猫では、連絡先のない首輪等を含めると、半数以上が首輪等を装着していた。

「マイクロチップのみ」の猫は「屋内」飼育にのみ見られ、11.5%を占めた。

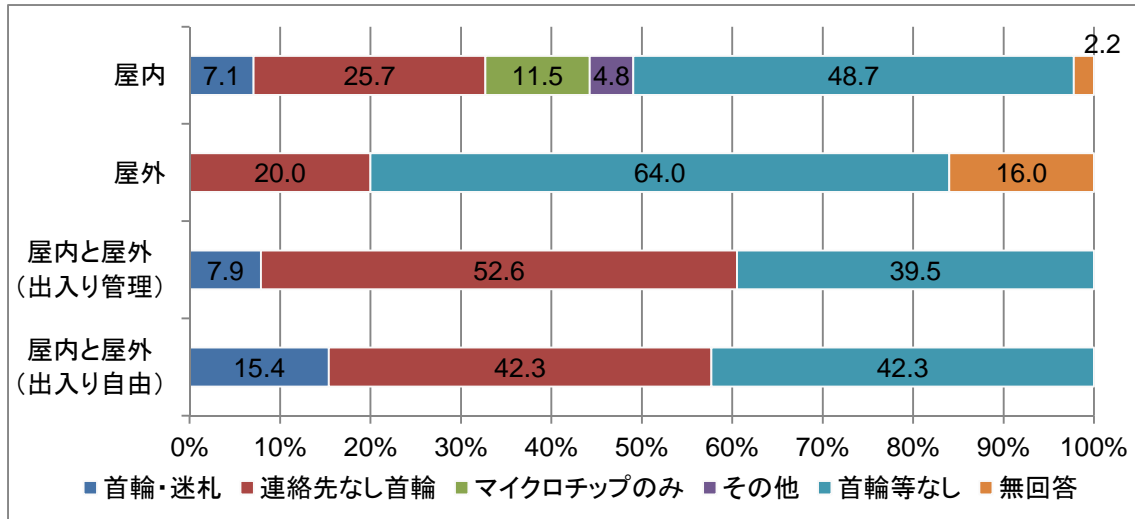


図 8.4-10 飼育形態と猫の身元表示 (頭数・構成比)

(4) 猫の不妊・去勢処置の推移

猫の不妊処置、去勢処置について、平成 18 年度、平成 23 年度及び平成 29 年度の調査結果を比較したところ、メス猫の不妊処置率は平成 18 年度で 86.1%、平成 23 年度で 86.3%であったが、平成 29 年には 92.0%となっていた。

オス猫の去勢率は平成 18 年度の 88.7%から平成 23 年度には 85.0%にやや減少していたが、平成 29 年度には 88.8%に上昇した。

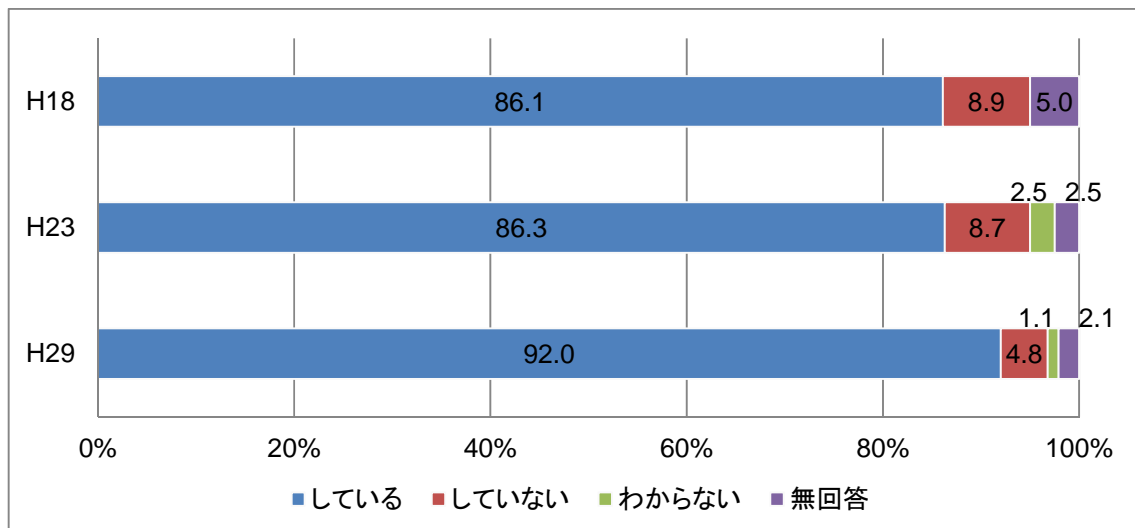


図 8.4-11 メス猫の不妊処置 (構成比) の推移

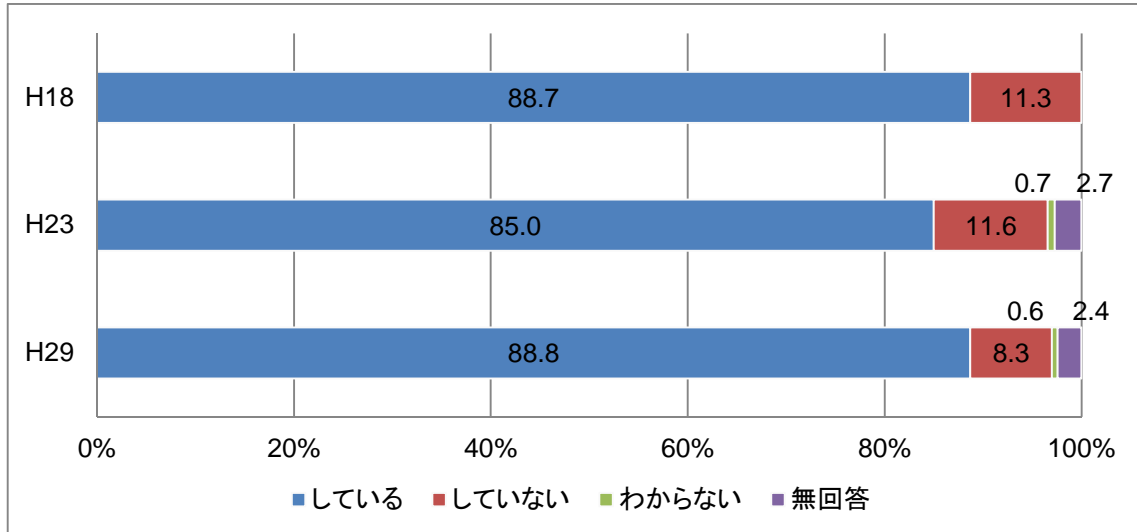


図 8.4-12 オス猫の去勢処置（構成比）の推移

(5) 猫の飼育形態の推移

猫の飼育形態について、平成 18 年度、平成 23 年度及び平成 29 年度の調査結果を比較したところ、平成 18 年度から「屋内」飼育は増加しており、平成 29 年度は 73.7%であった。「屋外」飼育や「屋内と屋外」飼育の割合は、平成 23 年度以降ほぼ横ばいとなっていた。

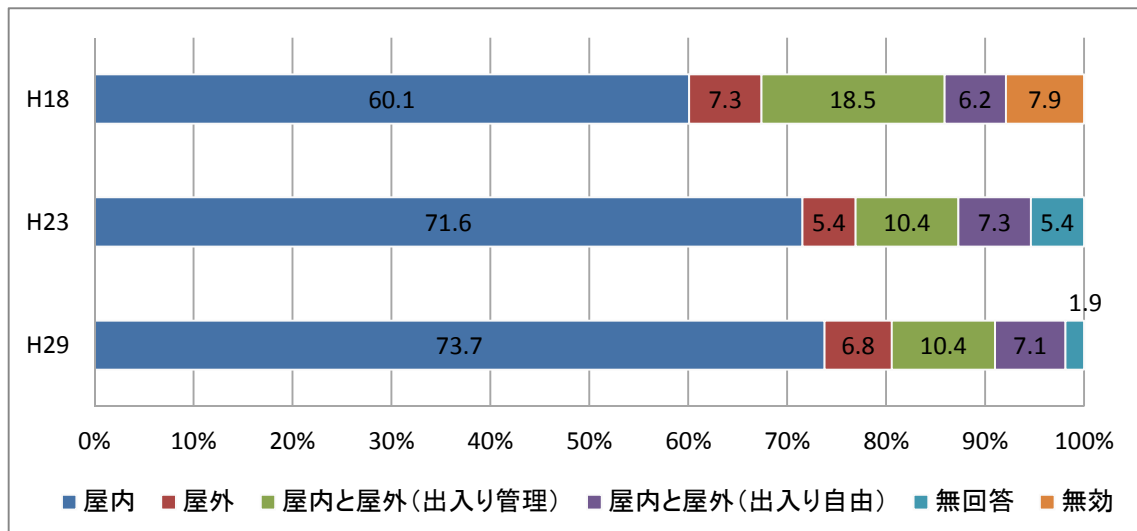


図 8.4-13 猫の飼育形態（構成比）の推移

(6) 猫のトイレに関するしつけの推移

猫のトイレに関するしつけについて、平成 18 年度、平成 23 年度及び平成 29 年度の調査結果を比較したところ、「屋内」で排泄している猫の比率は、平成 18 年度の 70.6%から平成 23 年度の 76.3%へとやや増加していたが、平成 29 年度も 82.7%とさらに増加した。

「屋外」については平成 29 年度のみ 11.8%となっているが、平成 29 年度は「しつけなし」という回答選択肢がなかったことから、平成 18 年度、平成 23 年度の「しつけなし」が移行したものと推察される。

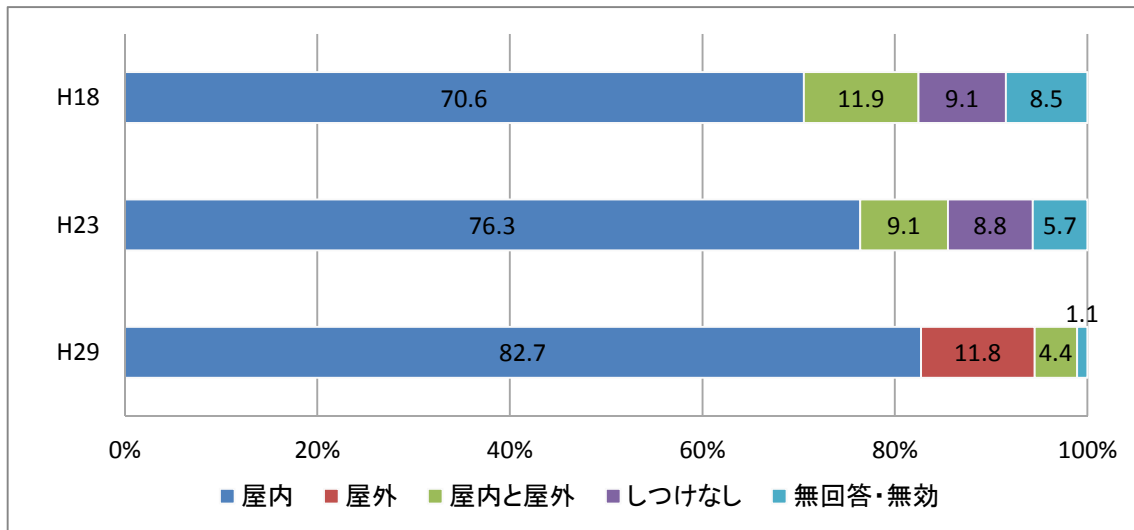


図 8.4-14 猫のトイレに関するしつけ（構成比）の推移

(7) 猫の餌代の推移

猫の餌代（年額）について、平成 18 年度、平成 23 年度及び平成 29 年度の調査結果を比較したところ、「1 万円未満」と「1~3 万円未満」を合わせた比率は徐々に減少しており、平成 29 年度は合わせて 30.4%であった。これに対し、「3~6 万円未満」の比率は 31.3%へと上昇しており、6 万円以上の割合も一定量見られた。

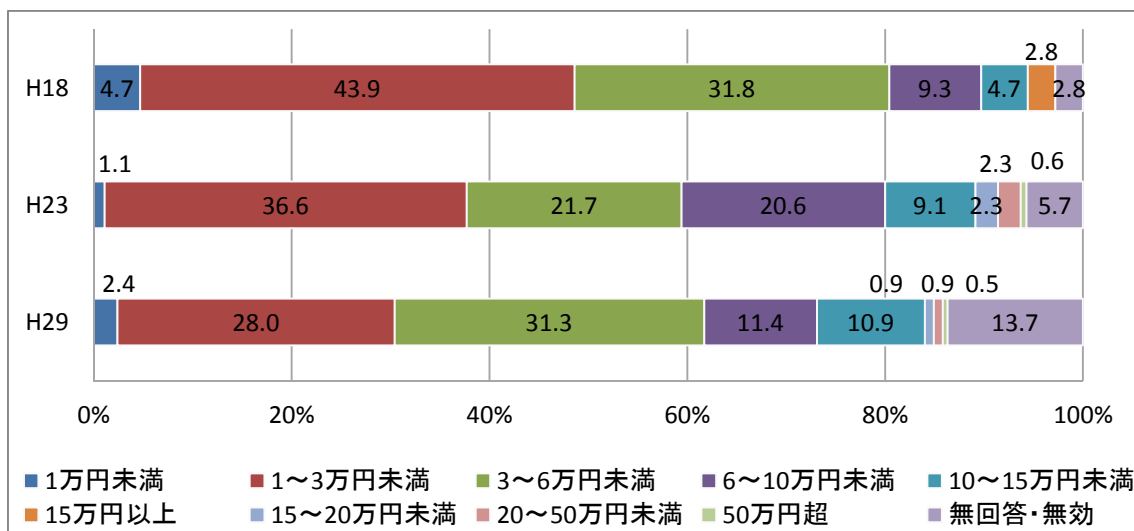


図 8.4-15 猫の餌代（年額・構成比）の推移

(8) 猫の医療費の推移

猫の医療費（年額）について、平成 18 年度、平成 23 年度及び平成 29 年度の調査結果を比較したところ、3 万円未満で見た場合、平成 18 年度では 50%強だったものが、平成 23 年度・平成 29 年度は 40%強にとどまっていた。

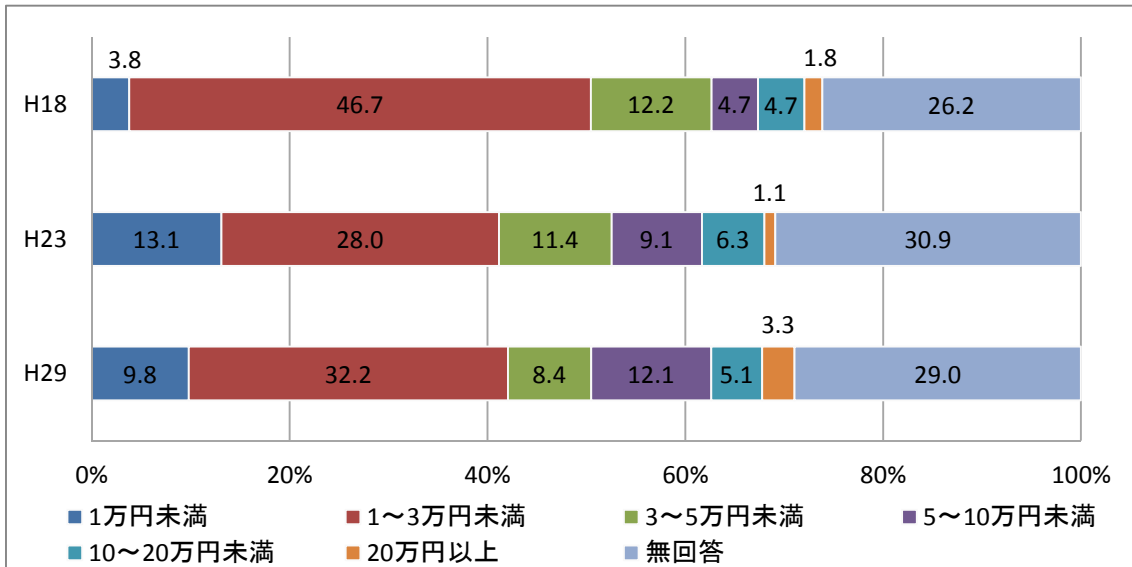


図 8.4-16 猫の医療費（年額・構成比）の推移

8.5 犬及び猫に関する評価について

8.5.1 犬及び猫に対する嗜好性の推移

(1) 犬に対する嗜好性の推移

犬に対する嗜好性について、平成 18 年度（実態調査地区）と平成 23 年度及び平成 29 年度を比較したところ、全体としては犬が「嫌い」とした人や好きか嫌いかわからないとした人の割合が減り、「好き」とした人の割合が増えるという結果となった。

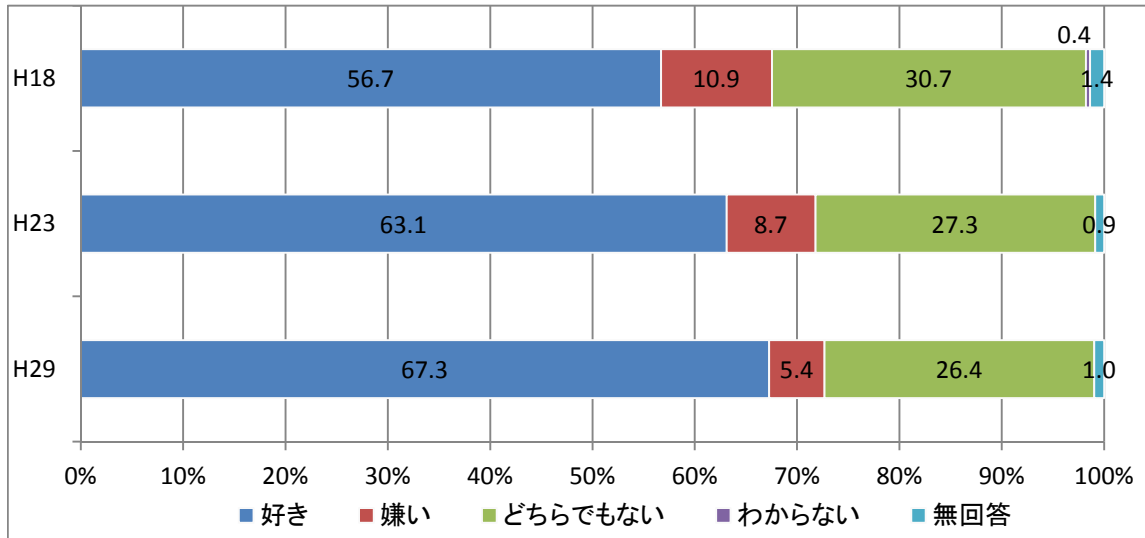


図 8.5-1 犬に対する嗜好性（構成比）の推移

(2) 猫に対する嗜好性の推移

猫に対する嗜好性に関する推移を整理した。

猫に対する嗜好性について、過年度調査においては「好き」「嫌い」「どちらでもない」の 3 つの選択肢の比率に大きな差はないが、平成 29 年度調査では、「好き」が 48.2%と高かった。

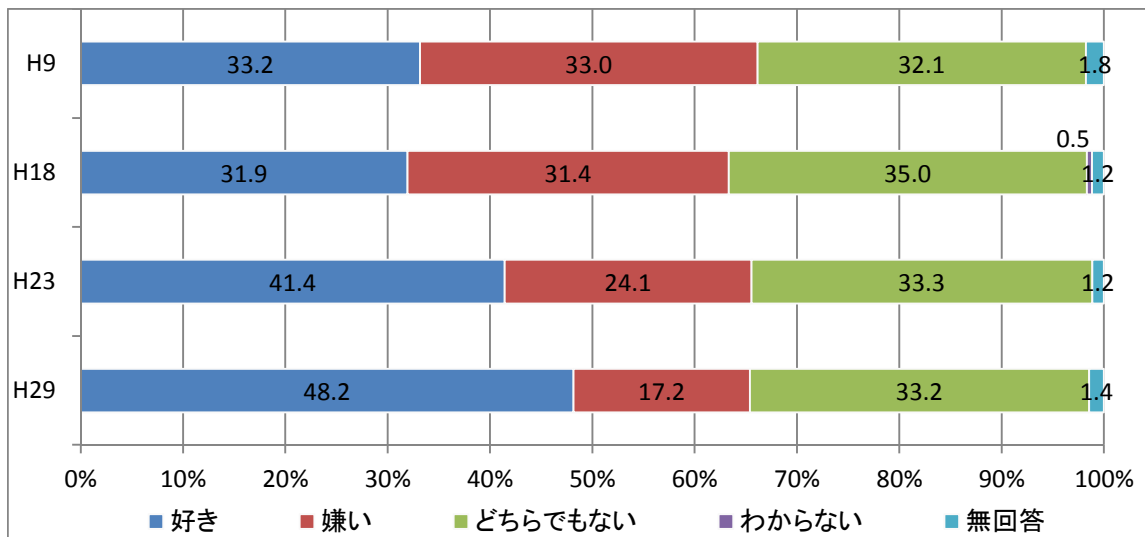


図 8.5-2 猫に対する嗜好性（構成比）の推移

8.5.2 飼い主のいない猫に関する評価について

(1) 飼い主のいない猫への餌やりを目にした経験の推移

飼い主のいない猫への餌やりを目にした経験に関する回答について、平成 18 年度と平成 23 年度及び平成 29 年度調査の結果を比較したところ、飼い主のいない猫の餌やりを「よく見かける」との回答は、平成 18 年度の 31.1%から平成 23 年度の 22.1%へ減少し、平成 29 年度には 13.8%へとさらに減少した。「時々見かける」を合わせても、平成 18 年度の 60.4%から、平成 29 年度には 44.0%となっている。

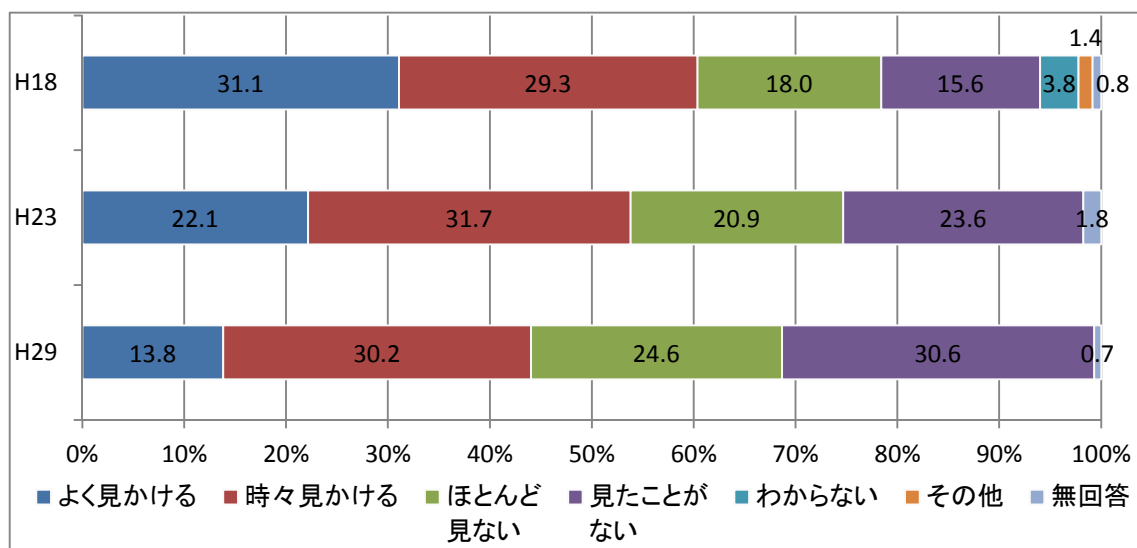


図 8.5-3 飼い主のいない猫への餌やりに関する回答（構成比）の推移

8.6 犬猫の終生飼養について

8.6.1 年代別のペット飼育理由

ペット飼育者の年代によりペットを飼育する理由に違いがあるかをみたところ、いずれの年代も「潤い・安らぎ」の占める割合が高かったが、20代のみ「動物好き」が上回った。

「子供の教育」を飼育の理由と答えた方の割合は40代が42.7%と最も高く、続いて30代（35.0%）といった子育て世代が続いたが、10代以下でも25.0%見られた。

「防犯」のためと考える方は全体的に少数であり、「運動」と答えた方の割合は年代が高いほど多かった。

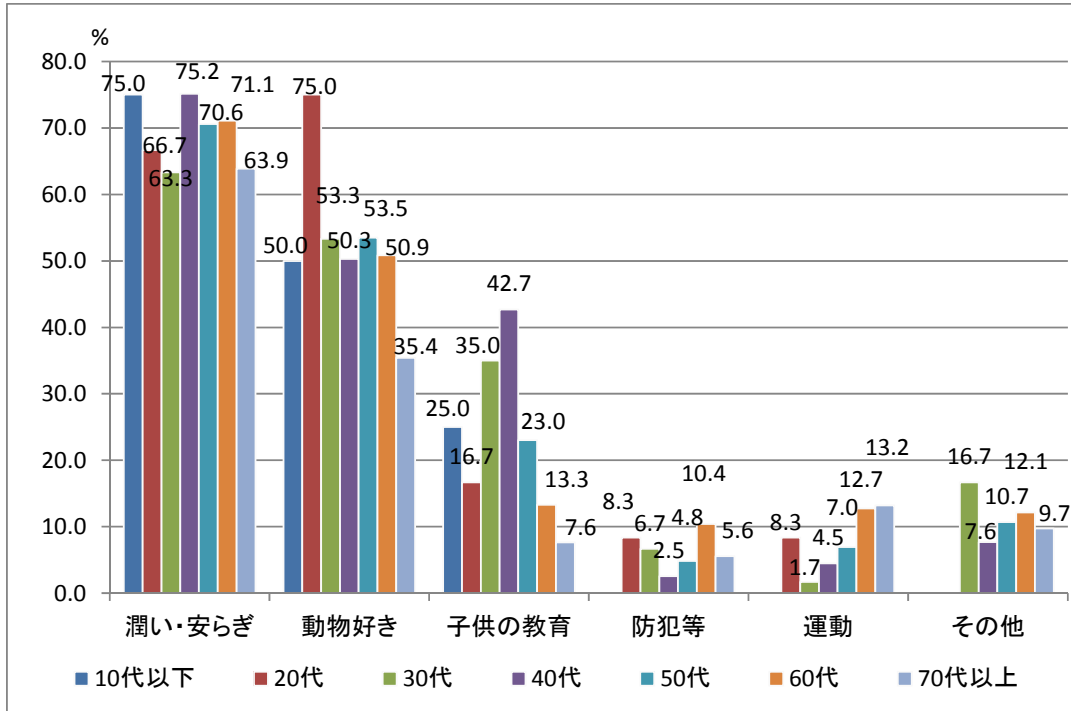


図 8.6-1 回答者年代とペット飼育理由（回答者割合・複数回答可）

8.6.2 60代以上の世帯の飼育犬猫の年齢

飼育犬の平均年齢は、「70代以上・単独世帯（一人暮らし）」（10.7才）、「70代以上・夫婦のみ世帯」（9.6才）、「60代・夫婦のみ世帯」（8.7才）、「60代・単独世帯（一人暮らし）」（6.7才）の順に高かった。

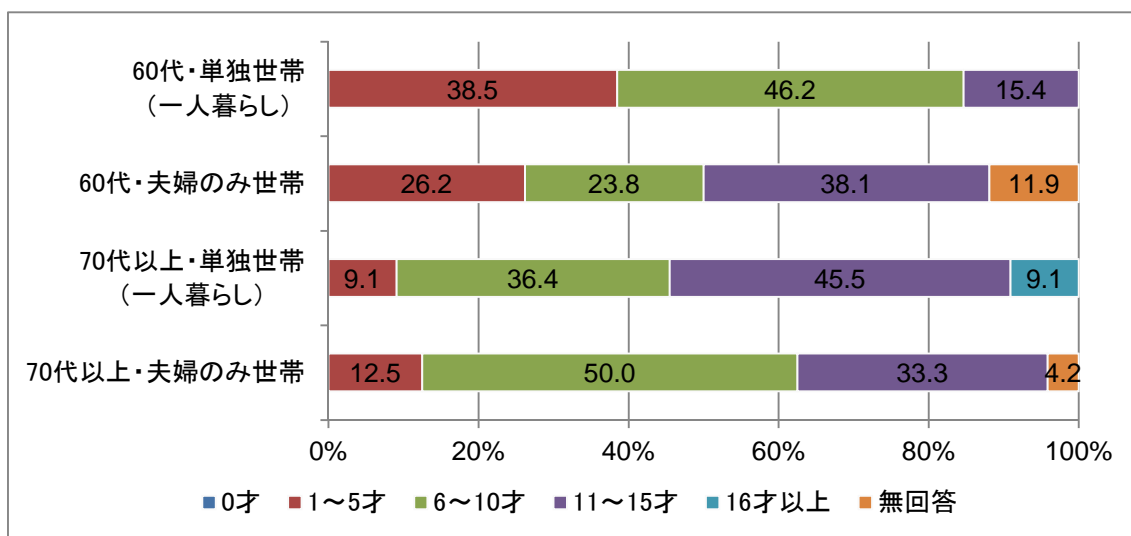


図 8.6-2 60代以上の単独・夫婦のみ世帯における犬の現在年齢（構成比）

飼育猫の平均年齢は、「70代以上・単独世帯（一人暮らし）」（9.7才）、「70代以上・夫婦のみ世帯」（8.8才）、「60代・単独世帯（一人暮らし）」（8.5才）、「60代・夫婦のみ世帯」（6.1才）の順に高かった。

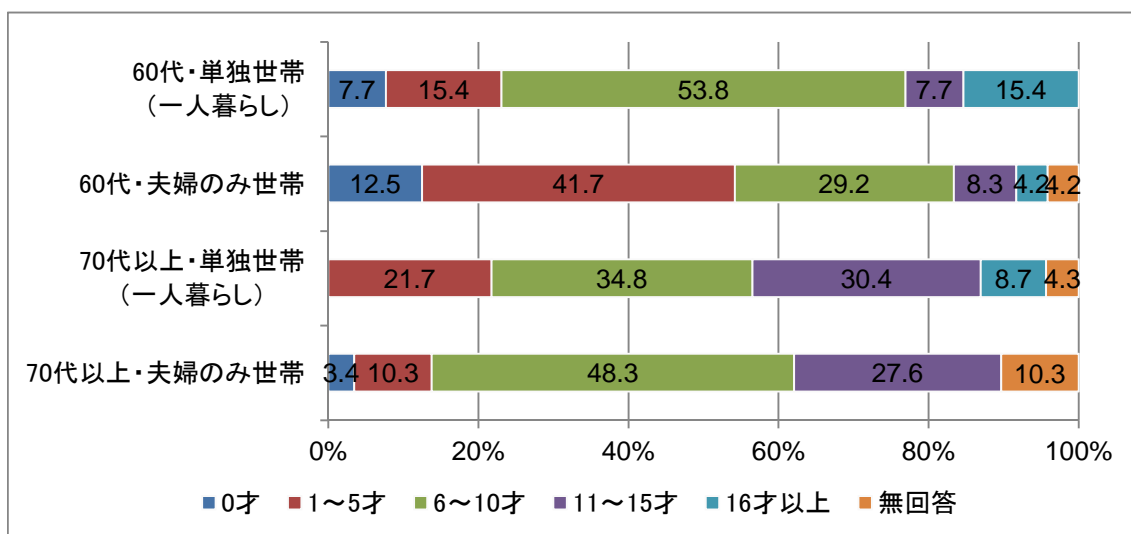


図 8.6-3 60代以上の単独・夫婦のみ世帯における猫の現在年齢（構成比）

8.6.3 年代別の安楽殺に対する意識

犬猫飼育者の年代により安楽殺に対する意識に違いがあるかをみたところ、犬飼育者では、「10代以下」「20代」を除き、「選択する」が「選択しない」を上回り、「70代以上」の59.2%が最も高かった。

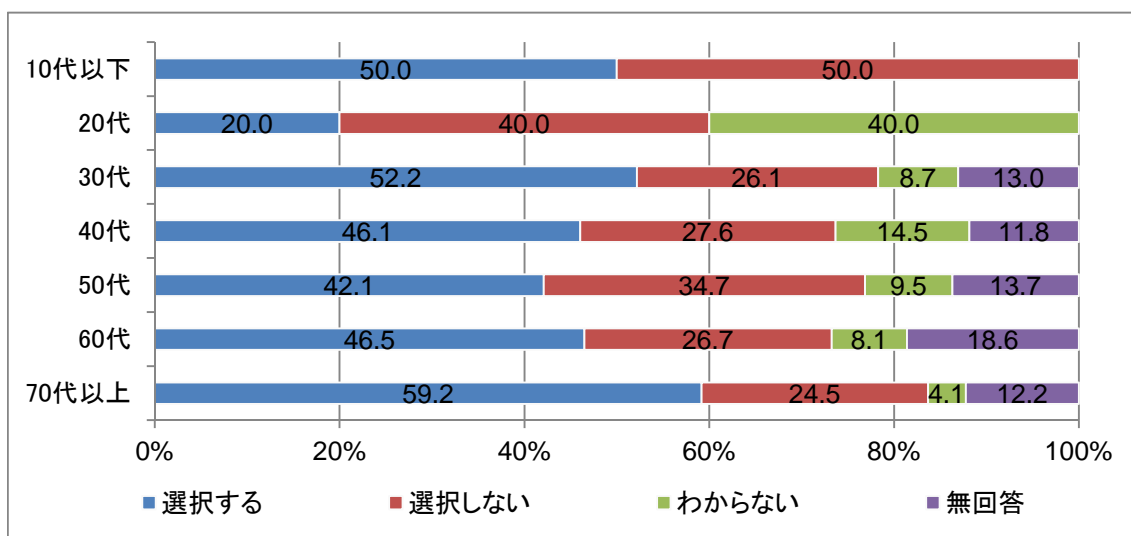


図 8.6-4 犬飼育者の年代と安楽殺の選択（構成比）

猫飼育者では、いずれの年代においても、「選択する」と「選択しない」の比率はほぼ同程度であり、顕著な差は見られなかった。

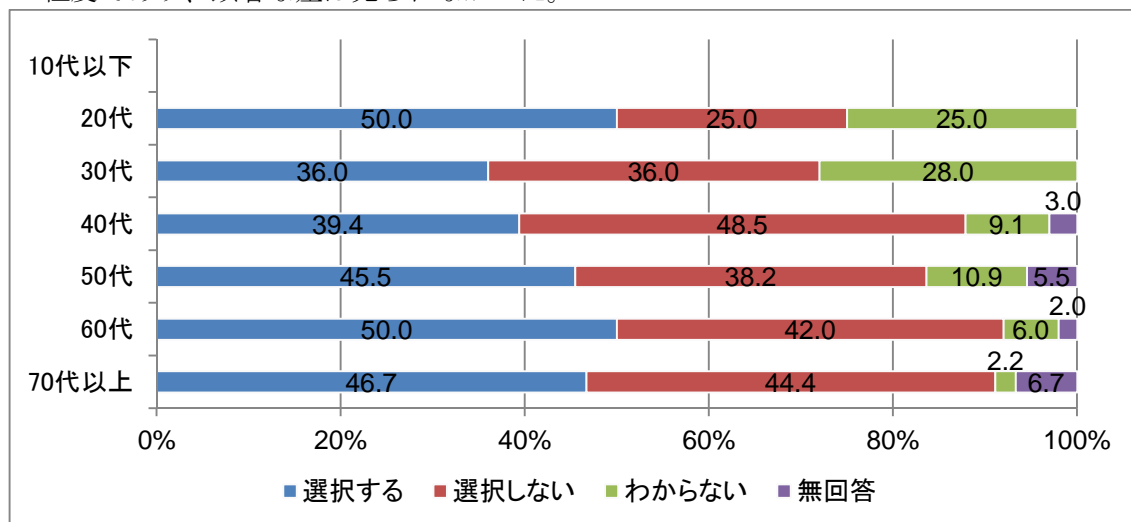


図 8.6-5 猫飼育者の年代と安楽殺の選択（構成比）

8.7 犬猫の譲渡について

8.7.1 飼育ペット種類と犬猫譲渡の認識

犬猫の飼育により犬猫譲渡の認識に違いがあるかをみたところ、「犬猫非飼育者」より犬または猫の飼育者の方が犬猫の譲渡を「知っている」と回答する比率が高く、「猫飼育者」で「知っている」の回答が93.2%と最も高かった。

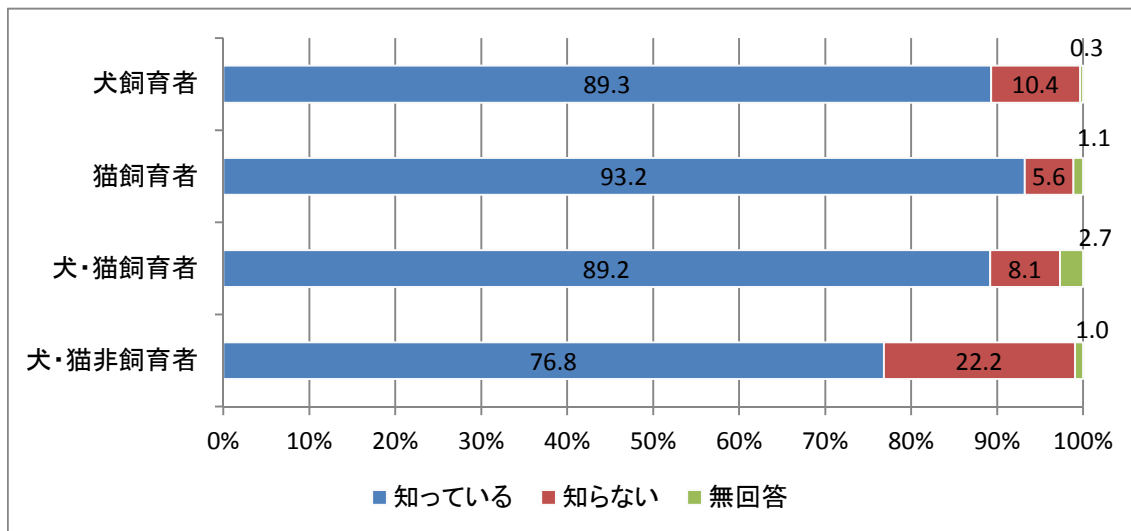


図 8.7-1 犬猫飼育有無別の犬猫譲渡の取り組みの認識状況（構成比）

8.7.2 犬猫譲渡の取り組みの認識状況と犬入手方法の関係

犬猫譲渡の取り組みの認識状況と犬の入手方法に違いがあるかをみたところ、犬猫譲渡の取り組みを「知っている」「知らない」のいずれにおいても、「ペットショップ」での購入は60～65%程度となっており、差は無かった。

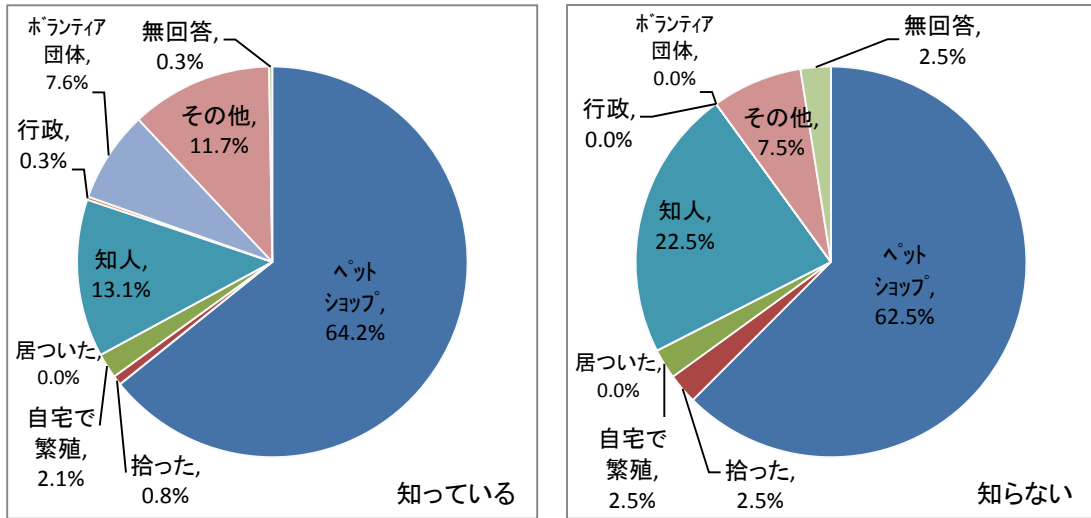


図 8.7-2 犬猫譲渡の認識と犬の入手方法 (構成比)

犬猫譲渡の取り組みの認識状況と猫の入手方法に違いがあるかをみたところ、犬猫譲渡の取り組みを「知っている」場合の「行政から譲渡」は0.9%、「ボランティア団体から譲渡」は13.3%であった。

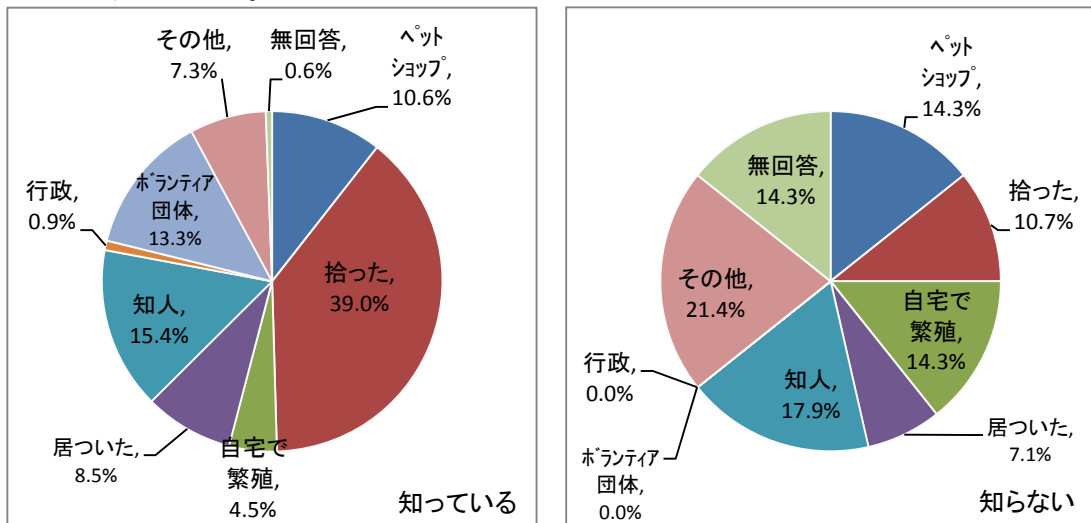


図 8.7-3 犬猫譲渡の認識と猫の入手方法 (構成比)

8.8 犬及び猫の災害対策について

8.8.1 年代別の同行避難の認識

「40代」では「知っている」の割合が58.2%と最も高く、これを境に年代が若くなるほど、また高くなるほど「知っている」の割合が減少した。

最も認知度が低かったのは「10代」で、33.3%であった。

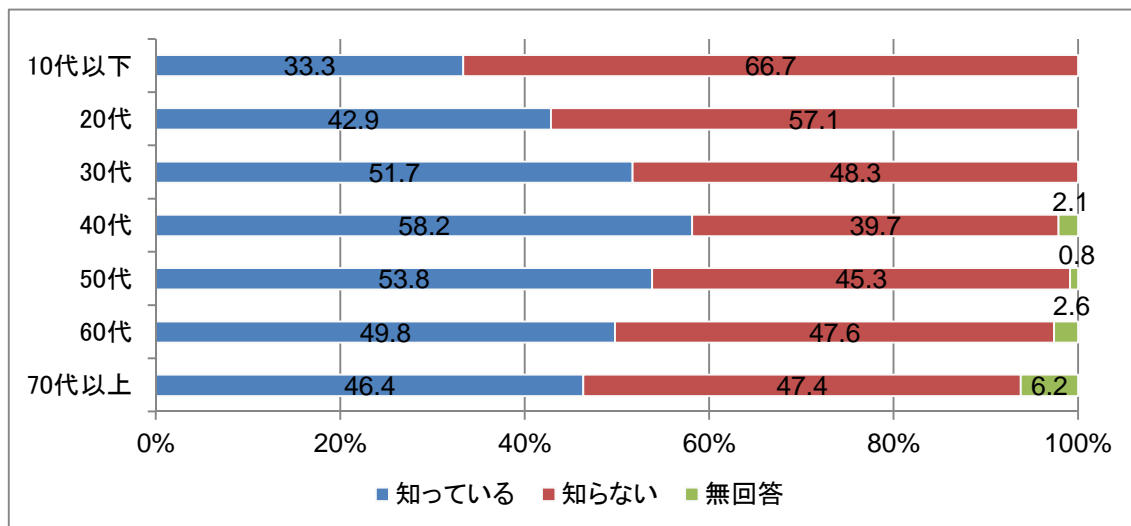


図 8.8-1 回答者年代と同行避難の認識（構成比）